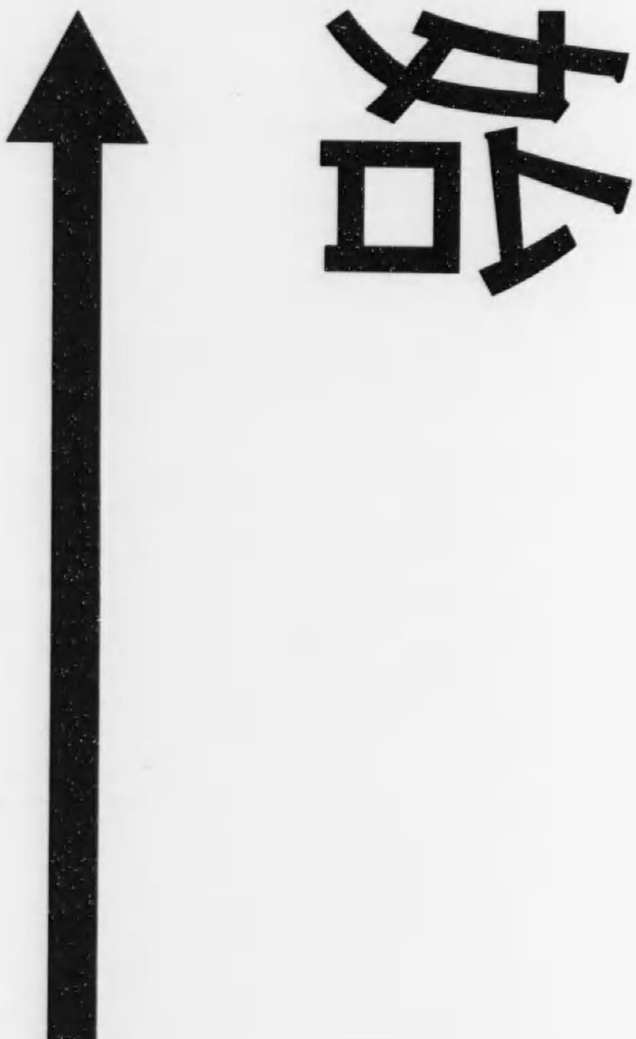
501
274



501-274

正宗白鳥著

冷涙

東京南郊社版

大正
11. 1. 20
内交

毒婦のやうな女　自一頁　至一〇五頁
冷涙　自一〇七頁　至二一三頁

毒婦のやうな女

毒婦のやうな女

その翌日は雨が降頻つたので、事によつたらと座興半分に云つて息込んでゐた七面山登りどころではなく、見殘してゐる名所舊蹟の參拜をも止めて、陸路を俥や乘合馬車で歸ることにした。

「なんなら、もう一晩此處へ泊つて行つたつて構はないんだがね。外を出歩かなくつても、按摩でも取らせて休んでりやいゝぢやないか、近所が靜かだから緩くり寢てゐられるだらう」と、新七は宿の勘定を濟ませて歸り仕度をしながら、まだ氣迷をしてさう云つたが、おかつは同意しなかつた。

「一度極めたんだから、迷はないで早く立つことにしませう。迷ふと決して後がよかないんですから」と云つて、自分で俥の催促をした。

幌を卸した俥の中に一人で身を置いてゐると、おかつは何となく氣輕になつて、むしろ雨天を

喜ばしく思つた。……富士川下りの乗合船や、紅葉の色づいてゐる鷹取山や、癩病患者の療養所になつてゐるといふ深敬病院など、昨日鰍澤を出てから一日がゝりで見て來たさま〳〵な事物が旅馴れない彼女には、みんな珍らしかつたのであつたが、身延詣での記念として何にも優つて鮮かに心の中に殘つてゐるのは、仁王門の構内で見たある若僧であつた。

昨夕は食後の腹こなしと土産物の買入れのために、新七に誘はれて、山の夜風の身に染みる寒い淋しい町を散歩して、仁王門のほとりまで行つたのであつたが、信心氣のないおかつも、雲の往來が繁くて三日月が忙しさうに出たり隱れたりしてゐる山の端を仰いで、晝間案内者に聞かされた祖師の開山の緣起を思出してゐると、この世ならぬ靈場へ來てゐるやうで、この頃ひそかに思ひつゞけてゐる濁つた思ひも、一時清められて、あの狂人じみた團扇太鼓の騷ぎも笑へないやうな氣持がした。

仁王門の内は參詣人の捧げる蠟燭の光で明るくて、調子を合せて太鼓を叩いたり拍子木を叩いたりしてゐる婆さんや爺さんの顏がハッキリと見られた。どれも皆な田舍くさい頑丈な人だちで、振動かしてゐる手にも力が籠つてゐた。口々に唱える七字のお題目も彼女の母親などがよく

口にしてゐる南無阿彌陀佛の聲に比べると遙かに勢ひがよかつた。見てゐる間に、二十をあまり越してはゐないらしい若い僧侶が入つて來て、取澄ました音聲で事々しい說敎をしだした。彼女の立つてゐると、ころとは距離が遠かつたのでよくは聞取れなかつたが、お宗旨の有難さを說いてゐるには違ひなかつた。

おかつは、あの若さで鹿爪らしいお說敎なんかをしてと、人柄に不似合なやうに思ひながら、風にゆらめく蠟燭の火影に照らされて、夢のやうに浮出てゐる若僧の袈裟姿を見てゐたが、その柔和な蒼白い顏は次第に彼女の心を蕩けさせた。あのまゝ木か石に彫つたらいゝ佛樣が出來ると思つたりして見詰めてゐたが、あのまゝ珠數を持つて、若い盛りを佛樣への御奉公をのみ勤めて、淋しい山の中で過させるのは惜しいやうにも思はれた。可愛らしく動いてゐる唇で、婆さんや爺さんの垢の溜つた耳へ、佛の御利益なんかを說かせるのが惜かつた。

「寒くなつたからもう歸らう」と、新七に云はれて、ふと振返ると、新七の下びた顏がこの時は際立つて彼女の目に映つた。何だつてかう頬が尖つてゐて、それにゲヂ〳〵のやうな眉をしてゐるのであらう?。

おかつは俥の中で、かの若僧の柔和な地藏眉や潤んだ眼を思出した。未來は極樂へ行けるにしても、あんな山奥で不味い物を食べてゐるのでは詰らないといふ氣にはならないのであらうかと思ふにつれて、自分が甲府のやうな田舍町で、怠けてゐられるだけの取柄で、いゝ當てのなさゝうな日を續けてゐるのが、いよ／＼溜らなくなりだした。今に財產を頒けて貰つたら、自分の一存で店が出せるやうになるのだから、それまでの不自由や退屈は辛抱してゐて呉れ、兩親は心が融けてゐるんだから、その中いゝ機會を見てお前に會ひたいとさへ思つてゐると、昨夕も新七は云つてゐたが、おかつは最早さういふ事を有難がらなくなつてゐた。今更男の父親や母親に會つて見たつてはじまらないし、こんな田舍町の商店の主婦になつて齷齪働いたつて何が面白からうぞと思ふやうになつてゐた。理窟もない分別もない、新七と一緒にゐるのが一圖にいやになつたこのまゝ一人で東京の方へ向つて俥を駛らせたら、さぞ淸々した氣持になるだらうと、慾も得も棄てた自儘な空想に耽つたりしてゐたが、後の俥の音は、何處までも彼女の跡を追つてゐるやうに、意地惡く耳に響いた。

飯富のある神社の前で俥から下りると、丁度乘合馬車が出掛かつてゐるところであつた。座席も空いてゐたので、二人は樂々と並んで腰を掛けることが出來たが、先客の目が無遠慮におかつの方へ注がれるのを、おかつは煩がつて、茶代の返しに貰つた身延案內記を開けて、何となしに文字の上に目を落してゐた。雨避けの被幕に妨げられて外は見えず、車體はやゝもすると激しい動搖を續けるので、兩岸の秋景色を眺めながら川を下つた時のやうな樂みは得られなかつた。

新七は向う側の客の相手になつて、世間の景氣を話合つたり、途中の村々の舊家の盛衰や新出來の富豪を話題にしたりしてゐながら、心はおかつの方から暫くも離してはゐなかつた。女の息の淺さ深さをも絕えず耳に留めてゐた。

「ちよつと本をお見せよ」と云つて、女の手から案內記を取つて、昨日見た寺院や石段の寫眞のある所を開けて見て、

「この本は後でお母さんへ送つて上げるといゝね。お宗旨違ひだけど、何時か身延の事を聞いてゐなさつたから」

「お母さんには槪の餞でも贈つた方がいゝの。この本は私がお詣りした記念に取つて置きませう」

「それもよからう。餘程の決心でやつて來たんだからな。おれの親爺なぞも無信心の方だが、そ

れでも身延の事といふと、土くれをも有難がつてるよ。外の土地へ遊びに行くよりも今度のやうなお詣りを喜んでるだらうから、途中が面倒でも來甲斐があつた譯なのさ」

「今時舟だの馬車だのと、まどろこしい思ひをしてお詣りしたんだから、餘程の御利益がなければ割に合はないわね。」

おかつは何氣なく御者臺の方を覗いたが、すると、富士川の流れと、嶮しい高い崖がちらと見えた。邪慳に鞭打たれてゐる馬は、その崖の方へ向つて驅けてゐるのであつた。乘客を跳飛ばしさうに車臺は搖動した。

「隨分危い所ですわね」と云つて、胸を轟かしてゐると、向ひの客は、前年大雨の後に、この近所で乘合馬車が顚覆して、多勢の怪我人が出來たことを話した。

「この頃はこの街道を重い者を積んだ車力がよく通るから、道がえらく壞れてゐる」と、他の客も調子を合せて、「若い衆さん、氣をつけてお呉んな。ひつくり返されでもしちや溜んねえからな」と、高い聲で云つて笑つた。

「あんまり馬を責めるのもよくねえだ。馬にだつて癇があるから、どんな拍子であばれ出さんとも限らねえ」

左右の人だちのそんな話を聞いてゐると、おかつはますます恐ろしくなつた。運が悪くて崖から落されでもしたらどうしよう。自分はこの頃悪い運に見込まれてゐるやうでならないから尙更危かしいと、不安な思ひに胸を騷がせてゐた。

ある立場で長いこと馬車が留つてゐた間に、おかつは厠を借りるために側の茶店へ寄つた。そこは川に臨んだ見晴しのいゝところで、向うから來る渡舟に雨の濺いでゐるのが厠の中からでも見えた。嬰兒を背負つて番傘を傾げてゐる田舍女が激しい雨にも激しい流れにもめげないで、呆けたやうな平氣な顏してゐるのを見て、おかつは臆病な自分の心を顧みた。厠から出ると、被幕の間から顏を突出して茶店の方を見詰めてゐた新七が、手招ぎしながら「早く〳〵」と聲を掛けたが、彼女はわざと落着き拂つて、馬車からは見えない所へ身を寄せて、髪を解付けたり化粧紙で顏を磨いたりしてゐた。

渡舟が着くと、客が込合ふからと氣遣つて、わざ〳〵茶店の中まで迎へに來た新七に急立てられて、彼女は不承々々に窮窟な馬車の中へ戻つたが、やがて渡舟から上つて來た新たな客に割込

まれて、身動きのならないほどに乘り苦しくなつた上に、濡れた汚い衣服や傘の雫で彼女の晴衣をも足袋をも汚された。激しく馬車が搖れるたびに頭の髪をも亂されさうになつた。

さういふことから、おかつの神經の惱むのを、新七は小聲で宥めてゐたが、宥められたりすると、なほ更こんな餘計ないやな思ひをするのも男のせいであるやうに、おかつには思はれた。

二

鰍澤で名物の鰻でも食べて、緩くりして行かうと、新七は相手の心を唆つたが、おかつは譯もなく歸りを急いで、馬車を下りると直ぐに乘合自働車へ移つた。ところが、運が惡くも、途中で自働車に故障が起つて、一時間あまりも泥濘の中で雨に濕れて待つてゐなければならなかつた。修復の見込がないので、泣出したい思ひをして野道を横切つて、鐵道馬車の停留所まで辿りついた時には、下駄も足袋も泥まみれになつてゐた。洗ふ暇もないので、泥足のまゝで乘つたが、かうなればもう自棄見たいになつて、頭も衣服も構はなくなつて、べたゞくした腰掛へドカと腰を据ゑて、衆人の注視に不樣な姿を曝して憚らなくなつた。

「日蓮樣のお氣に障つたことがあつたと見えて、ひどい罰を當てられた」と呟くと、

「だから、もう一日彼處にゐればよかつたのだ。せめて鰍澤でゞも晩まで遊んで來ればよかつたのに、お前があんまり急ぐからいけないのさ。早く歸つたつて仕方がないぢやないか」

新七はよく〳〵の思ひで出て來た旅行が雨のために不首尾に終つたのを恨しく思ひながら、愚痴っぽい口を利くと、

「一日延したつて明日の天氣が當てになりやしませんからね。それに私昨夕は變な夢を見たもんだから、一時も早く歸りたくなつたんですの」

「どんな夢？」

「夢の話なんぞ止しませう」

おかつは先つきとは打つて變つた快活な口調で、身延の山の秋景色や宿の女中の白粉くさい厭味たらしい顏や、乘合舟にゐた繭商人の事などを話して男を喜ばせたが、この旅を最後として自分だけで永久に甲州の土地を離れようと、ひそかに決心を強めてゐると、何にも氣づかないでゐる男の樣子が愚かしく見られた。傍の者の反對にもめげないで自分を庇つて、寵愛を續けて來て

呉れた男に對しては、いくらおかつのやうな女だつて、深い事情もないのに俄かに不實な考へを起すのを、自分ながら快く思つてはゐなかつたが、すでにさうなつたのをどうすることも出來なかつた。今まで氣づかなかつた醜さが男の鼻にも口にも現はれだした。

よぼ〳〵の老婢が留守居をしてゐる假住ひへ着くと、おかつも流石に安易を覺えた。近所の風呂へ入つて來て、坐り馴れた長火鉢の側に坐つて、鳥鍋で夕餐の箸を執つてゐると、生活の安樂に未練が殘つて、明日の日にも此處を立たうとした意氣込みが衰へだした。緣があつてこんな土地へでも來ることになつたのだから、迷はないで甲府の人になつて宮部の妻として一生を終らうかと氣を取直して、男の心を突つくやうな口は利かなかつた。

「昨夕お前の　た變な夢つて、一體どんなのだい？」と、新七が氣にかけて訊ねると、

「人の夢なんぞ執念深く訊くもんぢやありませんよ。歸つて來ると何事もなかつたんだから、私すつかり安心しちやつたの」

「お前は時々突然に脅かすからいけない」

新七も安心した。そして、宵の間に兩親や兄のゐる櫻町通りの店へ顏出して來ることにして、食事が濟むと滿腹の腹を撫でながら「別段用事はあるまいから、今夜は早く歸るよ」と云つて座を立つた。

おかつは獨りでゐる間には退屈凌ぎに絹刺をしたり手習をしたりしてゐるのであつたが、今夜は疲れてゐるので、長火鉢の側へ枕を持つて來て横になつてゐた。すると、隣りの二階から聞馴れた蓄音機の琵琶唄がガヤ〳〵と響いて來た。川中島の合戰に引續いてお極りの石童丸が唄はれた。

「あれにも飽き〳〵したよ。彼處でやる蓄音機には氣の利いたものは一つもありやしない。それにあんまり使ひ過ぎるから機械が壞れたと見えて、いやな音を出すぢやないの。たまには新しいのを仕入れて來たらいゝだらうにね」と、鐵瓶に水を差しに來た老婢の方へ目をやつて云つたが、老婢は何の感じもなさゝうに、

「左樣ですね」と卒氣なく答へた。

「あんたは昨夕一人でゐても淋しかなかつたの、おつるさんも遊びに來なかつたの」

「いゝえね、誰れも來りやしません。宵に早くから戸を締めて寢ました」老婢はさう云つて臺所の

方へ行きかけたが、ふと後戻りして思出したやうに、
「さう云へば今朝旦那の兄さんがこの家の前を通つてゐなさつた」と、聲を潜めて云つて、「私が御掃除してゐる時に、家の前に立つて此方を見てゐる人があつたから、誰れか知らんと出て行つて見ると、もうゐなくなつたんですけれど、どうも櫻町の若旦那のやうで御座んした。朝早く何處へお出でなさつたのか……」
「老婢さんは櫻町の方をよく知らないと云つてゐたぢやないの。どうしてそれが分つたの。」
「先日おつるさんと一緒にお使に出た時、途中で櫻町の若旦那に會ひましたんです。おつるさんが指差しゝて、あの人が此方の旦那の兄さんだよと教へて呉れましたから、一心に見ときました。」
「さう?。どんな人なの。此方の旦那樣によく似てゐるんですか」
「そりや御兄弟だから似ていらつしやるんでせう。御立派な方ですよ。色の白い目の大きな、それで此方の旦那樣よりも脊が高いやうに思はれました」
老婢の言葉が例になく熱を帶びてゐたのを、おかつは不思議に思ひながら
「そんなに立派な人なの?。だけど、あんたは目が薄いから、ちよつと見たくらゐぢやよくは分

らないでせう。なんだか當てにならないわね」
「ぢや、おつるさんに聞いて御覽なされ。私の目がいくら悪くつても、闇夜でゞもなければ、人樣の顔ぐらゐよく分りますさ。それを疑ひなさるんなら、姉さん御自身に櫻町のお店の前を通つてよく見ていらつしやればいゝ。」
「さういきり立たなくつてもいゝわよ。……御立派でも貧相でも、お色が白くつても黒くつても、どちらでもいゝことなんだからね。」
「でも、おつるさんはあの若旦那のことを褒めちぎつてゐますよ。主婦と連らつて歩いてゐなさる所を見ると、若旦那がいとほしくなるなんて云つてゐますよ。私は主婦は一度も見たこと御座いませんけど、あの若旦那に釣合ふやうな女は、こんな土地にや一人もないだらうと思つてゐますんです」
「また老婢さんの悪口がはじまつた。あんたの口にかゝつちや甲府も臺無しだけれど、この近所にもいゝ女がゐないこともないわね。佐渡屋の主婦さんもあく抜けがして意氣な姿をしてゐるし、角の洋品店の娘さんも歯はみそつ歯だけど目が何時も笑つてるやうで愛らしいぢやないの。」

「なんだな、あのくらゐな容色が」と、老婢はせゝら笑つて、「あのくゐな女は、東京なら軒並みにゐますさ」

「まさか」と、おかつは口では云つたが、腹の中では老婢の言葉に同感してゐた。そして、「あんたはこの土地にずうつとゐる氣になつてゐるんでせう。たび〳〵惡口は云つてゐても」と訊くと、

「それは姉さんがゐなさるのなら、何時までも御厄介になつてゐたいと思つてゐますけどな。……成らうことなら、まだ足腰の自由が利くうちに東京へ歸りたいと思つてゐますのです。あなたはまだ御存じないけど、甲府の冬の寒さつたらそれは格別なんで御座いますよ。私のやうな痩せつぽちの老人には隨分に應へます」

「さうでせうね。四方が山ばかりなんだから」

よほ〳〵の老婢でさへ都を戀しがつてゐるのが、おかつには可笑かつた。で、一しきり二人で東京の話を何といふことなしにしてゐたが、暫くして老婢が臺所の方へ行くと、おかつはふと思立つて、手習机を火鉢の側へ持つて來て、東京の母親へ宛てた手紙を書きだした。いろ〳〵な譯から親子の仲はいゝ方ぢやなかつたけれど、久しく別れてゐると、流石に懷かしいこともあつたので、筆を採ると、あれもこれもと書きたいことが胸の中に叢がつた。手習ひを勵んで字が上手になつたところを見せてやりたいといふ氣にもなつた。先づ身延詣でをしたことから、山々の秋景色の美しかつたことを書いて、それから最近の自分たちの生活の平穩無事なことを書いて、「喜んで下さい」と、浮かと書續けたが、

「一喜んで下さいも變だ」と、自分の筆の跟を見詰めて馬鹿々々しい氣がした。お母さんの方でもそれほど氣樂な生活をしてゐるのならもつと小使錢を寄越したらいゝぢやないかと云ふだらうが此方のお寺詣りだつて、人に羨ましがられるほどの面白いことぢやないのだもの。

「東京が戀しくなりました。氣の合つた話相手もないのに、こんな田舍の町に小さくなつてゐるのは心細くなりました」と、書いて見たが、それはお前の勝手ぢやないか、誰れも無理に勸めたのぢやなしと、母親の方で云ふだらうし、自分も母親や兄妹に弱々しい心を見せたくはなかつた。

で、いろ〳〵に書惱んだ揚句に、おかつは、書きかけの手紙は反古にして、新たに、簡單な時候見舞を述べて、榧の飴を贈屆ける次第だけを書いた。榧の飴は小包にした。そして、風呂へ出掛ける老婢に托して、郵便局へ持つて行かせた。

横になつて默つてゐると、次第に疲れが出て來て、このまゝグッスリ眠入つてしまひたくなつた。せめて今夜だけでも新七が櫻町の本宅の方に泊つて此方へ歸つて來ないで、自由な獨り寢をさせて呉れゝばいゝがと、おかつはそれを差當つての肝心な望みとしながら、ウトゝしてゐた。降頻る雨の音が彼女を眠りに誘ふばかりで、外には物の音はしなかつた。老婢は何時ものやうに長湯をして容易に歸つて來なかつた。

戸の開く音がしたやうだつたので、おかつはふと假睡から醒めて頭を持上げたが、誰れも入つては來なかつた。「老婢さん」と聲を掛けたが返事がなかつた。夢だつたのかと思直して再び枕に就いたが、何だか氣になるので、戸口へ出て見ると、老婢が軒先に立つて誰れかと話をしてゐた。おかつが顔を出すと同時に、その影のやうな人間は、「左樣なら。お大事に」と、四十を過ぎた女のやうな聲を出して、傘を傾げて行つてしまつた。

「あの人は誰れなの。御近所の人？」と訊ねると、老婢は口の内で曖昧な返事をして、茶の間の方へ急いだ。そして、火鉢の側へ坐つてから、譯ありげな忍び聲で、

「あの人は元八日町の塚本さんのお店で御飯炊きをしてゐたんだけど、この頃は娘がいゝ所へ緣付いたから、其處へ手傳ひがてら掛人になつて行てゐるんでせう。お湯屋の前で行會つて久振りに話をして見ると、此方樣の事もよく知つてゐるのに驚いちやつたんです」

「立話が隨分長かつたのね」おかつは老婢の方からこそ餘計なお喋舌をしたのであらうと察して、皮肉な目を向けたが、老婢は氣にもしないで、

「塚本さんでも臺所の方の人手が足りなくて困つてゐるんださうですよ」

「それで、あなたに助けに來て呉れと云つたんぢやないの」

「いんね。さういふ譯ぢやありませんです」

老婢の言譯は暗かつたが、おかつはどうでもしろといふ氣になつて追窮はしなかつた。いかにも大儀なので、今夜は寢床をも老婢に延べさせて、新七に構はないで枕に就いたが、すると、老婢も湯上りのいゝ氣持でコクリ〳〵居眠をしだした。

そこへ、雨を冒して歸つて來た新七は、重苦しい思ひに屈託して、冴えない顏をしてゐた。お

かつは早寢の言譯をしながら枕を離れなかつたが、新七が直ぐに寢室へは來ないで、長火鉢に寄りかゝつて煙管をいぢりながら默つてゐるのを、不斷と違つたことゝして變に思つて、

「あなたはどうかなすつたの。櫻町で變つたことでもあつたんですか」と訊ねた。

「さうでもない」

「ぢや何を考へてゐらつしやるの」

おかつは打遣つて置く譯にも行かなかつたので、寢卷の上へ羽織を引掛けて火鉢の側へ寄つた。

そして、茶を入れて、濃いのを自分でも飲んで、たゐんだ目蓋に力を入れた。

「私の事でまた六ケ敷いお話があつたんでせう」とおかつはわざと微笑を浮べて輕く云つた。

「格別六ケ敷い話つてこともないが、親類の奴がみんな舊弊な分らず屋なんだからね。この土地の習慣で親類が巾を利かせて餘計な差出口をしていけないんだ」

「そのことはたびぐ〳〵あなたから承つてよく分つてゐますさ。今夜のお話を隱さないで聞かせて下さいな。驚きやしませんよ」

女が平氣でゐるのに新七は力を得て、「傍で愚圖々々云へばまた東京へ出掛けるまでのことさ。

……だけど、折角親爺の方で頼けてやゐつていふ身代を棒に振つて他國へ行くのも辛抱氣がなさ過ぎるからね。どうせもう少しの間の辛抱だから、蟲を殺して待つてゐんだね。そのかはり此方の物になつちまへば、大つぴらで何をしようと勝手な譯さ」と、自分で慰めるやうに云つて、「……それで明日の日にでも親爺がお前に會ひたいと云つてゐんだから、お前もそのつもりでゐてお吳れよ。おれが店へ出てゐ間に、自分だけこの家へ來て會はうと思つてゐらしいから、何時來られても構はないやうに、油斷しないでゐてお吳れよ。不斷云つてゐ通り、親爺は極端な質素好きで、今風な贅澤は非常に嫌つてゐゐんだから、そのつもりで身つくりをしてゐてお吳れよ。質素な風をして家の中をキチンと整頓させて、働くことには骨を惜まないつていふ樣子を見せれば、親爺はそれで滿足するんだ。六ケ敷い注文はない、至極簡單なものなんだ。」

「でも私には大役ね」

「なに。親爺やお袋はおれの云ふことを信用してゐんだから大丈夫さ。親類の奴が誤解してゐからいけないんだが、此方で眞心さへ持つてれば、親爺だつてさう世間態ばかり苦にすりやすまいよ。」

身を堅めてこの土地で店を出すことに極まりさへすれば、相當の資本を出して貰へるし、二人しかない兄第の一人として、財產の分前も少くはないことを、新七は何時ものやうに女の心を引立てるために話した。一人だけあつた娘が年頃になつて死んでからは、一層二人の子供に執着して、弟の新七を膝下から離して他鄕で何時までも學問などさせて置くには堪へられなくなつた父親の氣休めのために、新七も一先づ小さな商人にでもなる氣になつてはゐるものゝ、末永くこの田舍町で過す覺悟をしてゐるのではなかつた。

「今のやうに兄貴の下で働くんぢや張合ひがないが、自分が主になつてやる日にや商賣もなか〳〵面白いもんだよ」

今更珍らしいことではないが、新七の說明を聞いてゐると、おかつも財產家の妻になつて、兄妹や知人に對して肩身の廣くなることに心が動かないことはなかつたが、一心を籠めてこの幸運を取逃さないやうに努める氣にもなれなかつた。

長い一生新七に連れ添ふことの懶さが感ぜられるのをどうすることも出來なかつた。靜かな茶の間で男と差向ひで、將來のいゝ事を聞いたり聞かされたりしてゐながら、樂しい夢心地にはなれないで、しまひには返事をするのも大儀になつてしまつた。

「今日はいろんな目に會つた。そのせいだか、一日が大變長かつたやうに思はれてよ」

おかつがさう云つて欠伸をすると、新七もそれに誘はれて欠伸をした。

翌日新七は、前夜注意したことを、も一度繰返して、日々の勤務としてゐる櫻町の本宅（印傳の大問屋）へ出掛けた。初めの間おかつは角帶に前垂の商人姿を外套で包んで、古い烏打帽子を被つて出て行く男を見送るたびに、いた〳〵しく思つたり可笑しく思つたりしてゐたのだつたがこの頃は男の樣子がスッカリ田舍商人らしくなり切つたのが不愉快に見えだした。

「本當に櫻町のお父さんが訪ねて來るのか知らん」と思ふと、自分の境涯が顧みられて心が引締つて來たが、素直に男の差圖に從つて、父親を待つてゐるのが馬鹿らしい氣がして、田舍の頑固親爺の御機嫌なんか取るには當らないと、譯の分らぬ不平の端くれをそんなことに對してでも洩らすつもりで、わざと身裝をつくろつて待つてゐることにした。

空が奇麗に晴れて山々の眺めは美しかつた。おかつは無駄足を厭はないで藝者町の風呂屋まで行つて朝湯に入つて來て、丹念に化粧に取掛つた。此方へ來てからも時々結つて、彼女には似合

つてゐるとおつるから云はれてゐる女優髷にわざと結つた。

「姉さん、申兼ねますが、ちよつとお時の家へ行かせてお呉んなさい。午餐前に屹度歸つてまゐりますから」と、老婢は頼んだ。

「あゝいゝとも」

おかつは快く許したが、老婢が昨夕の立話に釣られて給金のいゝ所へ行かうとしてゐるのを察して、「よほど〳〵の癖に何て慾が深いんだらう。此處を止めたら東京へ行きたいと云つてゐた口の下から直ぐあゝだから呆れてしまふよ」と、鏡に映る自分の顔に向つて呟いた。

鐵瓶に湯を滾らせて、茶や菓子の用意をもして待つてゐたが、時が立つにつれて、新七の云つたことを眞に受けて、訪ねて來る譯のない人を待つ氣でゐたことが馬鹿らしくなつた。こんな時におつるさんでも遊びに來れば、折角おつくりした甲斐があるのだがと思ひながら、退屈晴しに格子の間から表通りを見てゐた。往來の人々に目をつけて、服裝や顔形をひそかに批評してゐたが、暫くしてふと、格子戸が開いて「御免」といふ聲がした。

さては父親が來たのかと驚いて、おかつは氣取つた返事をして愼ましやかに障子を開けたが、

土間に立つてゐたのは老人ではなかつた。新七の兄の幸吉であることは一目で察せられた。

「櫻町から來たんですが、上つてもいゝですか」

幸吉は極りの惡さうな顏して云つた。

「さあ、どうぞ」

おかつは茶の間を通つて奥の座敷へ客を導きながら、弟とは似もつかぬ兄の水際立つた目鼻立をウットリ目の先へ浮べてゐた。

「いろ〳〵お世話になりまして」と小聲で挨拶して、お茶や菓子器を運ぶのに手間取つてから、闇の側に小さくなつて首垂れてゐたが、生れてはじめてかういふ男に近づいたといふ意識は、彼女の胸を湧立たせてゐた。

「あんたにはもつと早くお會ひせにやならん筈だつたのだが、出拔けに此方へ上つてもどうだらうかと思つて、御無沙汰してゐました。……東京からこんな田舍へ來て暮すのは不自由でせう。」

「いゝえ、別段不自由な思ひはいたしません。……ですけれど、毎日何もしないで遊んでゐちや妙利が書きるやうに思はれてならないんで御座いますわ。老婢さんなぞお斷りして自分で家の事

をしたいと終始思つてゐますのですけど」

「あんた一人で留守番してゐちや淋しいでせうから」

幸吉は彼女の母親の住所や兄妹の身の上について訊ねたが、それは通り一片の話題としたばかりで、深い意味を含んだ質問ではなささうだつた。おかつの方でもいゝ加減に跋を合せてゐた。そして、相手の方で肝心なことを云ひ出しさうにしては控へ〳〵してゐるのに氣を留めながら、肝心な話を待ちあぐんでゐたが、やがて、

「私はたとへこの土地で一生を暮すことになつてもよろしいんですけれど、私が此方へまゐつたゝめに、お宅の皆さんに御迷惑を掛けちや濟みませんから、何時でも東京へ歸らせて頂くやうに新七さんにお願ひしてゐるんで御座いますよ」と自分の方から切出した。

「あんたの方からさう云はれると話がしよいんだが、私の家にはいろ〳〵込入つたことがあつて、結婚どころではない些細なことでも當人の一存は容易に通らないことになつてゐるんです。何もあなたに難癖をつけて彼此云つてゐるんぢやないから、その點は誤解しないやうにして頂きたいんだが、たゞ最初に親の許しを得ないでこんなことになつたのが、一概に新七の不始末になつてゐるんです。普通の家なら何でもなしに收まつて行くんでせうが、私の家は例外に面倒なんで困るんですよ。……無論落度は新七の方にあるんだから、あんたの考へはよく承つて、私どもの方であんたに對して盡すだけのことは充分に盡す氣でゐるんです。だから覆藏なく、あんたのお考へを私に明して下さい。私が責任をもつてあんたの面目を潰さないやうにしたいと思つてゐるんですから」

幸吉が言惜くさうに云ふのを、おかつは遊び半分に聞いてゐた。今から一月も前であつたら、そして相手が幸吉でなかつたなら、持前の負けん氣を出して、「手切金でも出せばいゝと思つてゐるのか、金づくでどうでもなる私ぢやない。田舍者のくせに人を見くびるな」と、芝居染みた啖呵を切るか、それとも泣崩れてこの色戀に執着するところなのだが、今の彼女はそれほどには心を取亂さなかつた。

「新七さんはあなた方にどう云つてゐらつしやるんでせうか」

おかつは落着いてさう云つて、顔を上げて相手を見詰めた。濃い眉や高い鼻が凛々しい男らしさを現はしてゐたが、近づきがたいやうな怖い男でないことは先つきからの話振りによつて分つ

てゐた。少し含羞んだ眼差しは弟とよく似てゐながら、けてゐると身震ひされるやうな色氣をもつてゐた。

「新七の心はあなたにはよく分つてゐるでせう。あれは嘘を吐く男ぢやない。あれが兩親や兄や親類の者の信用を得ようと思つて、毎日店へ出て來て仕事に身を入れてゐるのを見てゐると、私も兄として不憫でならないんです。兩親だつて新七の心は酌んでゐるんだが、表立つてあなたと結婚させることはどうしても出來ない譯になつてゐるんです。あれはまだ店の事はよく知らないから、自分の家が可成りの財産家ででもあるやうに思つてゐるんだらうが、私どもの商賣は見掛けばかりで、財産なんぞあるものぢやない。この家で別世帶を今まで持續けて來るために、あれも隨分苦しい算段をしてゐるやうです、」

幸吉はさう云つた後で、ふと調子を變へて、「それとも、あんたはどんな貧乏暮らしをしようとも、大びらに新七の妻として世間が通れなくつても、一生弟に別れないといふ覺悟をしてゐなさるんですか」

「兄さんは何故そんなことを仰有るんですの」と、おかつはふと氣色ばんで、「私が慾得づくで新七さんに附纏つてゐると、お宅の皆さんは思つてゐらつしやるんですわね。私はそんなさもしい量見を持つてやしませんから、それだけはハッキリ申上げて置きます。」

「それはあんたの誤解だ」幸吉は慌てゝ打消した。「私が今日突然に此方へ上つたのも、兩親や新七には内所なんで、私の一量見であんたの考へをよく知つときたいと思つたためなんだから、氣を悪くしないやうにして下さい」と云つて、座を立ちさうにした。

「私なんだか腑に落ちませんから、もつとハッキリしたお話を承りたいと思ひますの。私がこれつきり新七さんにお目に掛らないで、今日の中にでも東京へ歸ることにしましたら、それでお宅の皆さんは御安心なさるんでせうか。新七さんも私も將來を樂みにして、かうして仲よく暮して居りますのに、籔から棒に。お前だちは添遂げる望みはないんだからさつさと東京へ歸れと仰有るのは、あんまり酷過ぎるやうに、私には思はれるんで御座いますが。私はとに角、新七さんがそんなにお手輕に戀仲を裂かれて平氣でゐらつしやれるやうな方だつたら、これまで皆さんに御心配を掛ける譯がなかつたぢやありませんか」

おかつは、幸吉といふ人は若い男と女との仲についてはちつとも察しのない人、こんな役目を

以て來るには不似合な人、商賣にかけては腕があるのか知らないけれど、色戀の道には暗いに極つてる人、人のいゝ人に違ひないと獨り極めにしてゐた。しかし、損害賠償として相當な金を取つて東京へ歸るにはこんな人を相手にした方がいゝかも知れないと、今の男に默いた果てに頻りに萠してゐる冷刻な慾念も持上らないではなかつたが、幸吉の顏を見てゐると、甲府といふ土地にも俄かに愛着の思ひが起つて、慾得を棄てゝもつと辛抱してゐたくなつた。

幸吉は烈しい事を云つて弟の氣を挫かないやうに兩親が遠慮してゐることや、身延詣りを快く許したのも、それを最後にこの家を疊ませるやうにと思つたゝめであることなどを話したが、そんな話もおかつの心を脅かすよりも、彼女の氣だるい身體を刺戟して、生々と今日の日を見させた。幸吉の聲音は、言葉の意味が何であらうとも、彼女の耳に色つぽく聞えだした。……兩親に同意して二人の仲を裂く下心をもつて來たのやら、弟思ひで二人の仲を憫れんで來たのやら、どちらだつておかつは關はなかつた。そして、却つて自分の方から、

「新七さんに自棄を出させないやうに氣をつけて下さいましな。今日兄さんのいらしつたことも內所にして置きますから」と云つて、「後々のことは私後でよく考へて、あなたに御返事いたしますわ」と、淡白に云つて相手を喜ばせた。

四

昨夕の寢醒めに思出したりしてゐた身延の若僧の靑褪めた品のいゝ浮世離れのした顏は、幸吉の俗人らしい生々した顏に蹴押されて、おかつの胸の中から淡く消えてしまつた。長い間戀焦れてゐた男にめぐり會つたやうな氣持で、おかつは幸吉の顏形を何時までも目の前に浮べては弄んでゐた。二人きりの兄弟でありながら、何故あゝも違つてゐるのであらう。氣が弱くて人がよくて、物分りのよくなさゝうなところは兄弟よく似てゐるらしいのに、肝心な顏形は何故のんなに雪と墨とほどに違つてゐるのであらう。若しかすると腹違ひなのかも知れない。

おかつは自分が東京でふとした事から馴染んだ男が、兄の方でなくつて弟の方であつたことを忌々しく思つた。籤の引損ひか、博奕の賽の目の出損ひのために、長い間の樂みをふいにしたやうな口惜しさが感ぜられた。

幸吉が行つてから間もなく、歸つて來た老婢は遲くなつた言譯をクド〳〵としてゐたが、おか

つは取合はないでゐた。

「今日はどなたかお客樣でも入つしやつたんでせうか」と、老婢は訊ねた。

「誰れも來るものかね」と、おかつは無愛想に答へて、自分一人の夢を見てゐた。

「でも、姉さんの御樣子が違つてゐますもの」老婢は、何時もなら自分が外から歸つて來ると、さも待受けたやうに迎へて外の樣子を訊ねたがるおかつが、今日はちつとも取合はないのを變に思ひながら、「かう申しちやお詔ひのやうに思ひなさるでせうけれど、頭髪をそんな風にしていらつしやるのが今日は特別によくお似合ひなさるんですよ。それに何かいゝ事の前觸れでもあつたやうに日本晴れの顏してゐなさるんですもの」

「さう、奢つてもいゝわね」と、おかつは悅しさうに云つて「老婢さんは目が薄い〳〵と云つてゐながら、人の事にはよく目が利くから油斷が出來ないのね。お客樣は來なかつたけど、いゝ音信があつたんですよ」

「それ御覽なさい。……東京から郵便がまゐりましたのですか。東京からだとお手紙でも珍らしう御座いますね」

「さうね」おかつは快い笑ひを洩らして、「私今日は奇麗になつて?。不斷よりはちつとはいゝ女に見えて?」と甘へた口を利いた。そして、何時も美しいのに、今日はこと更美しく見えると、老婢にお世辭を云はれるのが、例のお世辭と思ひながらも悅しかつた。

おかつは午餐後の常例となつてゐる午睡もしなかつた。退屈凌ぎと修養のために、新七からも勸められて日々少しづゝでも努めてゐる手習や絽刺しも、今日は手をつけないで、長火鉢の側や、冴えた日の差してゐる緣側で、ボンヤリしてゐた。新七と親しくなつた自分の有樣や、その前に掛り合つてゐた男のことが、目の前に浮いたり消えたりした。手輕に掛り合つて左程の思ひを殘さないで別れて來た二三の男については、今思ひ出しても悔ひも恨みも懷しみも殆んど感ぜられなかつたが、最初ある知合ひの惡婆に易々と騙されて、頭の禿げた豚見たいな男に僅かな金のために、無垢の身體を汚されたことだけは、思出すと口惜しくてならなかつた。

「勿體ないことをした」と、自分の美しい肌を粗末に取扱つたことが、悔ひても〳〵足らないのであつたが、いよ〳〵窮した時には、その豚のやうな爺さんを訪ねたら助けて貰へさうな氣がして、知らず〳〵心の底では手賴りにしてゐるのであつた。

「あのお爺さんは私を猫か犬かのやうに寵愛して、いろ〳〵の事を教へて呉れた」おかつはそれを思ふにつけて新七の無邪氣な戀の次第を連想したが、弟と性質は似てゐるらしい幸吉をも、同じ手順で馴染を深くして行かれさうに思はれた。

美しい女として自分の顔が幸吉の目に映つたに違ひないと思はれて悦しかつた。

「老婢さん。櫻町の若旦那の主婦さんといふのはどんな方なんでせうね」と出抜けに訊ねた。昨夕ちよつと聞いたのであつたが、あれだけでは物足らなかつた。

「おつるさんのお話では、主婦さんは御容色人ぢやないさうですよ。何しろ在所の方ですからね」

「在所といつて、何方だらう」　おかつは、身延詣りの途中の村々を思出した。雨の中を嬰兒を背負つて渡舟に乘つてゐた健氣な田舍女を思出して、それを幸吉の主婦でもあるやうに、幸吉と並べて見たが、さうしてゐると、田舍女の主婦が嫉ましかつた。さういふ田舍女に滿足して睦じく暮してゐる幸吉の心根が齒痒かつた。……いくら身代を延ばしたつて、その主婦を有難がつて色戀も知らずに若い時を過して、何がいゝことがあるのであらう。

日暮れ近くなつて、隣家では例の蓄音機を鳴らしだしたが、今度は聞飽いた琵琶唄や勸進帳の外に「行こか戻ろかォー」ロラの下を、ロシヤは北國果て知らず」といふ哀れつぽい流行唄が唄はれたり、陽氣な馬鹿囃子が鳴つたりした。おかつはそれ等の唄に調子を合せて唄つてゐたが、哀れつぽい唄には涙のこぼれるほどに哀れになり、陽氣な唄には踊りだしたいほどに陽氣になつた。

「老婢さん、今夜は御酒を取つて來て下さいな。それから蒲燒の三人前も誂へて置いてね」と、勢よく云ふと、

「御酒を召上るんですか、お珍らしい」と云つて、老婢も悦しさうな顔した。

「みんなして飲みませうよ。旦那樣も時々は醉つた顔でもした方がいゝのよ。あんただつて時々は寢酒の欲しさうな顔してゐるぢやないの」

「姉さんは口が惡い。……此間は煮物のお酒の殘りを、勿體ないから頂いたゞけなんで御座いますよ」

「老婢さんは正直ね。……私のお母さんが寢酒を飲みたがるんですよ。だから、私もちつとは御酒が頂けるんでせう」

老婢が使に出た後で、おかつは夕化粧をしてゐたが、そこへ、新七は靜かな足音をさせて歸つ

て來た。

「お歸んなさい」と云つて、おかつは振返つたが、新七は昨夕と同じやうに屈託に曇つた顔をしてゐた。本宅で何事か彼れの氣に掛かることを云はれてゐるに違ひないと、おかつは察してゐたが、兄の訪問については、彼の方から言出さないかぎりは默つてゐることにした。

「お前は今日は氣持がよさゝうだね」と、一層見まさつた女の顔に、新たな愛着を感じながら云つた。

「毎日鬱いでゐたつてはじまらないんですもの」と、おかつは甘つたれた聲音で云つたが、彼女の機嫌がいゝのは、新七には何よりも悦しかつた。

「本當にさうだね」と、彼れは曇りの拭はれたやうな目をした。

「お夕飯には久振りにお酒をつけることにしたのよ。いゝでせう」

おかつはいゝ匂ひのするクリームや練白粉や香油などを手の平で撫でにり鼻だの頰だのと、彼方此方の皮膚につけたりするのに、云ひ知らぬ樂みを覺えてゐたので、暇にまかせて鏡臺の前を長い間離れないでゐた。すると何時の間にか新七は鏡臺近く躙り寄つて鏡の中を覗きだした。「あなたにもつけて上げませうか」と、一度男の顔を化粧してやつたことがあつたので、新七が今もさう云はれたさうにしてゐるのをおかつは察しながら、今はそんな戯れを樂む氣にはなれなかつた。

鏡に映つた男の顔は愚からしく淫らゝしかつた。

「私今夜はおつるさんを誘つて町を散歩して來ようと思つてゐるの」と、わざと云ふと、

「約束してゐるのかい」と云つて、新七は直ぐに不快な目をして、「お前はあの女とうまが合ふんだね」

「だつて私にはこの土地に女のお友だちは一人もないぢやありませんか」

「それはさうだが……」新七は自分は今親しい友人の一人もないのを苦にしてゐないのにと思ひながら、「僕はいつそ東京へ行つちまはふかな」と云つた。

男の言葉は呻いてゐるやうにおかつの耳に響いた。「あなたの辛抱氣のないのには呆れてしまふ。昨夕あんなに云つてゐなすつたのに。私そんな氣まぐれは大嫌ひさ」

「だつた、昨夕と今日とは僕の境遇が違ふんだからな」と、新七は聲を落して、「親爺の仕向け樣

次第で、僕はどんな酷い決心をするかも知れないよ」
「ぢや、何時まで立つても私はお宅の方の信用が得られないから駄目なのね。私さへ此處にゐなければ、あなたは御大家の御次男で文句はないんでせう」
おかつは他人事のやうにさう云つて、それよりも白粉の乘加減に一層興味を惹かれてゐるやうであつた。
「おれは明日から店へは出勤しないよ。早く自分の店が出せないくらゐなら、この頃やつてゐることは無駄骨なんだから……兄貴や兄嫁に侮辱されたかないからね」
「兄さんと喧嘩したんですか。詰らないぢやないの。あなたは素直にさへしてゐれば、ひとりで財産が頒けて貰はれるんぢやありませんか」
たび〳〵繰返してゐる財産の話が出ても、一月前のやうに、あるひは四五日前ほどにも、おかつの方で熱心に話に乘つて來ないのが、新七には牴牾しくてならなかつたが、相手の冷淡さを責めるのは躊躇された。「三分一でも四分一でも、お父さんの丈夫な内に頒けて貰はにや損よ」と、以前のやうにおかつに嗾けられなくなつたので張合ひが抜けた。

老婢の知らせで、二人は仕度の出來てゐる食卓の側へ寄つたが、新七は二ヶ月あまりを過したこの隱家をやがて立退くための別れの酒宴のつもりで盃を手にした。側にゐる女の晴々した顏を見るにつけても、今日の午后本宅の奥座敷で兩親や兄が顏を揃へて評議をした時の有樣を明らさまには話されなかつた。
「何をさう思案してゐるんですよ。店を分けて貰へないことなの」おかつは揶揄ふやうに云つたが、今朝幸吉が此處を訪づれたことがどれほどの利目があつたのかをひそかに知りたく思つてゐた。幸吉が訪問を隱してゐるらしいのも不思議であつた。
「お前さへ覺悟すれば僕は何處へでも行くよ。さうなりや外の思案は入りやしないんだ」と、新七はふいと眞面目になつたが、かう眞面目になられたのに、おかつはゾッとした。何處へでも行くよなんて云ふのが、甲府に來る前の新七の言葉を、おかつの記憶に呼起させた。一緒になら死んでもいゝと、どうかすると思つてゐるらしいのが恐ろしくつて、揶揄つてなどゐられなかつた。話を外して、老婢をも呼んで酒を振舞つたりして氣樂な世間話をして紛らせてゐた。

五

新七を煙たがつて、彼れが家にゐる時には成べく遊びに來ないやうにしてゐるおつるが、格子窓の外から「今晩は」と聲を掛けると、おかつはそれをいゝ機會にして座を立つて、家の中へ招いて、買物を兼ねて遊びに出掛ける道連れに誘つた。

「あなたはいらつしやらないでせう」と云つて、新七を家に殘して、おかつは不斷着に縮緬の羽織だけ引掛けて、おつるとともに外へ出ると、

「私、今夜は櫻町の方へ行つて見たいの。連れてつて頂戴な」と云つて 新七の本宅をはじめて、外からでも見ようとした。

「あなたはお店の皆さんをよく御存じなんでせう」おかつは相手が平生遠慮して本宅の内輪の話に觸れないやうにしてゐるのを察してゐながらさう云つた。

「お顔だけなら皆さんを知つてますわ。」

「ぢや、あなたと一緒にお店へ寄りでもしたら、私つてことが皆さんに分るわね」

「だつて、彼方では姉さんを知つてらつしやるんでせう。大旦那だつて若旦那だつて、疾つくから姉さんを知つてゐらつしやるんでせう」

「ほんとに。私迂濶だつたわね。……どなたにもお目に掛つたことがないから、知らん顔してお店へ買物に行かうと思つてゐたのに、當てが外れちやつた」

疾つくから顔を知られてゐるのは意外であつたが、それにつけても、甲府といふ土地が一層狹苦しくなつたやうにおかつは感じた。「此方では知らないのに、先方にだけ知られてゐるのはいやなものね」

「でも、姉さんはお店の若旦那にはお會ひになつたんでせう」

「……」おかつは、「いゝえ」と答へかけたのを危く思直して、「おつるさんはどうしてそれを知つてらつしやるの？」と、事ちなげに云つた。

「だつて今朝お宅へお入りになつた方の後姿が幸吉さんのやうでしたから」

「私あの方に叱られたのよ。彼處の人はみんな堅苦しさうね」

「さうでせうか」

おつるは信じない口吻であつた。櫻町の本宅の方へ足を向けてゐながらも、おかつは最早間が悪くつて、はじめの興味は殺がれてゐた。彼女の住居の近所とは違つて、櫻町あたりは都會らしく明るくて賑かで、いろ〳〵な夜店も出てゐた。おかつは久振りで雜沓の中へ足を踏込むと、東京の夜が戀しくて溜らなくなつて、新七一人が男でもあるやうに自分の身體を彼れにまかせてこんな土地へ來たことの頓間さが、新たな悔ひとなつて胸に浮んだ。町の左右の商店や飲食店や見せ物などについて、おつるが知つてゐるかぎりの説明を絶えず聞きながら歩いてゐたが、おつるに對して何となく打解けられなくなつて、その言葉の端々をも邪よに聞きがちになつた。

「宮部さんのお店はそこですよ」と教へられると、足を留めて、電信柱に身を隱して其方を見詰めた。間口の廣い立派な、見るから身代の豐からしい店であつた。額の廣い老人が眼鏡を掛けて書付を讀んでゐた。

「さあ行きませう」と、おかつは詰らなさゝうに云つて後へ戻つた。

「何時も若旦那がお店へ出てゐるのに、今夜はどうしたんでせう」とおつるが云つたが、おかつの耳には冷かしのやうに聞かれた。で、平生なら、蕎麥でも汁粉でも奢るところなのだが、今夜は何處へも寄らないで、買物もしないで眞直ぐに家へ向つた。

「ステキな女だ」と、擦違ひに若い者から聲を掛けられると、自分がすべての男の目を惹いてゐるやうな誇りを覺えた。

おつるの家の前でおつる　別れると、おかつは自分の家を目の前に見ながら、薄暗い通りへ道を外らして、暫らく當てもなく歩いてゐた。明日から出勤しないと云つてゐる新七に、寢ても醒めても附纏はれるのは、思つても氣味が悪かつた。

よく知らない町を歩いてゐるうちに、ふと先つき通つた賑かな所へ出て來たので、おかつは再び宮部　店の方へ行つて、横目でソッと店の中を覗きながら通り過ぎた。すると、老人の坐つてゐたところへ、幸吉が代つて坐つてゐて、小僧を相手に話をしながら笑顔をしてゐたのが、おかつの目に留まつた。此方へ氣がついたら、幸吉がどんな顔をするであらうかと、おかつはだらけた好奇心に驅られて、も一度店の前を通つた。幸吉も今度は此方を見たに違ひなかつた。通過ぎて電信柱の蔭から顧みると、幸吉の樣子は先つきとは違つてゐた。口を噤んで澁つた顔付をしてゐた。

澁い顔して見せたつて怖かない。顔や姿こそ違つてゐても性分は弟と同じことなのだらう」と、おかつは可笑しく思つて、親しく幸吉に近づける手段を空想しながら、今度は足早く家へ歸つた。

新七はまだ醉ひの醒めきらない顔して、火鉢の側で仰向けに寢てゐた。

「たゞ今」と、氣取つた聲で云つて、おかつは櫻町の本宅を見て來たことを話した。

「なんだつてそんな所へ行つたの？」

「だつて、おつるさんが連れて行つたんですもの。あの人はお腹の中にいけないところのある人ね。私これから成べく懇意にしますまいよ。とんだ迷惑を掛けられるかも知れないから」

「だから僕が不斷さう云つてゐたのに」

しかし新七は、今の場合おつるの事などはどうでもよかつたので、重ねて訊返しはしないで、今まで獨りで考へてゐたことを、粘つこい口調で話しだした。今夜中に必要な物を纏めて置いて、明日早く何處かへ行つて姿を隱さうといふのが、彼れの詰りの企てであつたが、おかつは「私さへ辛抱してゐれば此處にゐたつていゝぢやないの。私があなたを唆かして他所へ連出したと思はれるのはいやですからね」と、熱心を粧つて、眉根に皺を寄せて云つた。

「誰れの口から知れたのか新聞にまで出されたから、なほいけなくなつたんだよ。」

「新聞に？。どんなことが出たのか讀んで見たいわね。あなたはその新聞を持つてゐらつしやらないの」おかつは自分の事が生れてはじめて新聞に出されたのに興味を感じたが、新七は明らさまにはその記事を語らなかつた。

「僕は家の者や世間の奴から馬鹿者にされたつて構やしないが、お前は僕が零落したつて愛想を盡しやすまいね。お前のお母さんにもつと氣樂な生活が出來るようにして上げると約束してあるんだけど、當分約束を果す見込みはなささうだ」

「そんな不景氣な話はお止しなさいよ。氣が滅入つちまふわ」

おかつは男の煮えきらないクドくした話のお相手になつてゐると息苦しくなるので、露骨に「私の情愛が薄くなつて、はじめの間ほどにあなたを大事にしなくなつたと思つて、いろ〳〵に氣を廻して心配してゐらつしやるんでせうけれど、私は現在あなた一人を手賴りにしてゐるんぢやありませんか。あなたの外に私の掛り合つてる男が一人も半人もある譯ぢやないし、こつちへ來

てからは外の男の人とは口を利くことさへないんですからね。念のために老婢にでも聞いて御覽なさい」

「僕はそんないやなことを思つてお前を疑つてやしない」と、新七は口を尖らせた。

「ぢや、それでいゝぢやないの」

それ以上に、自分から何を欲しがつてゐるのかと、おかつはこの男の物足らないらしい口吻を奇怪に思つた。最初に馴染んだ爺さんに仕込まれた色戀の手管に新七の滿足しないのが不思議であつた。

「いやねえ、あなたは。涙を落したりして」

「お前は泣くことなんかないんだらう」

「だつて、泣く譯がないのに泣けやしないわ。……口惜くつて夜つぴて泣いたこともありますさ。あなたはまだそんな思ひをしたことないでせう。……私とあなたとが浮世の義理かなんかで別れなければならない時が來たら、その時こそお互ひに思ふ存分に泣きませうよ。今から泣いて見たりなんぞしないでさ。見つともないから」

子供を綾すやうに云つて、おかつは手巾で男の目を拭つてやつた。新七は黙つて綾されてゐたが、次の室でほどき物をしてゐた老婢が入つて來ると、つと起上つて、生眞面目に坐つた。そして、

「老婢はお時の家へ行くのなら、今から行つて泊つて來た方がいゝだらう。明日の朝早く起きられちや騷々しくつて却つていけないから」と云つて、おかつに向つて、先つき老婢に急用があるといつてお時が迎へに來たことを話した。

「でも、泊りがけで行くほどのことはないんでせう」

おかつは今夜は二人きりで夜を過すのが何となく不安に思はれたので、老婢を離すまいとしたが、老婢は新七の勸めを幸ひに、泊りがけで行くやうに頻つて手早く仕度をし

よぼ〳〵の老婢でもゐなくなると、俄かに家の中が寂しくなつた。身延の宿で二人差向ひで川の音を聞きながら過した先日の宵の寂さよりも、一層氣味の悪い寂しさがおかつの心を震はせた。新七とはその前に掛り合つた二三人の男と別れた時のやうに、手輕に別れる譯には行かないのは、今はじめて氣のついたことではないが、今夜は相手の顔を見てゐると、早晩自分の身にふりかゝ

つて來る災難が豫じめ彼女の神經に傳はつて來るやうであつた。「この人は死ぬるまで私を離さない氣でゐる」と思ふと、男の執念に自分の今後の幸福が暗闇にされさうで、櫻町の兩親などの計らひで穏かに別れの道がつきさへすれば、自分に惡い名をつけられることなんか、どちらでも構はない氣になつた。

寢床に就くと熟睡を装つてゐたが、不思議に目は冴えて容易に眠つかれなかつた。時雨の音さへ聞えて、人里離れた遠い所にゐるやうであつたが、すると、自分でも譯の分らない寂しさ詰らなさから、涙が枕に傳はつた。……をり〳〵夜半の寤醒めに、どうかすると涙のこぼれることがあるのを、晝間は思出しても馬鹿らしくて誰れにも話したことはなかつたので、寢返り一つしても氣がつくほどの新七も、いまだに氣づかないでゐるのであつた。

六

「本當に今日は櫻町へいらつしやらないの」

翌朝おかつは非難するやうにさう云つて、雨戸を開けて澄んだ秋空を見上げた。老婢のかはりに拭掃除から朝餐の仕度までも自分一人の手でしなければならないのが煩はしかつたが、新七は缺勤の覺悟は堅く動かさないで、そのかはりに臺所まはりの用事を自分から先に立つてしだした。今日にも立退くと云つてゐた家の土間を掃いたり、四つ匂ひになつて緣側に雜巾を掛けたりした。

が、何時もの出勤時刻が來ると、新七も落着かなくなつた。暫く引續いて勤めてゐたのに、無斷で一日でも休んだなら、角立つた話のあつた昨夕の後ではあるし、本宅の方で打遣つて置く譯はない、樣子を見に誰れかを寄越すに違ひないと案ぜられたので、病氣にかこつけて缺勤を屆けることにした。その使には近所のおつるを賴むことにして、おかつが流し元で食器を洗つてゐる間に、無斷で裏口から出ておつるの家へ行つた。

「オヤ、お珍らしい。おつるが何時もお世話になりいして」と、家の側の濡で大根を洗つてゐたおつるの母親は、慌てゝ衣服を搔合せて、洗い物は打遣らかして、家の中へ入つておつるを呼んだ。

新七は用事だけを云つて、直ぐに歸らうとしたが、卿子に頻りに引留められて、せめてお茶の一杯でもと歎願されたので、上り框に腰を卸した。

おつるがお茶を入れてゐる間に、母親は細身の煙管と煙草の袋とを持つて來て新七に勸めて、「老婢さん」と「姉さん」との名を先づ持出して、穩かな氣樂な三人暮しを羨ましさうに褒立てた。

「あなたのお世話であんな手ごろないゝ家が借りられたのだが、近々にあの家を出るかも知れませんよ」と、新七は話の行きがゝりで、うかと云はずともものことを云つた。

「それはまあ」母親は迂散くさい目をして、「櫻町のお宅の御近所へでもお引越しになるんで御座りいすか」

「いや、さうぢやないです。……僕なんかは一寸先きは闇見たいなもんです」と、新七はまたうかと云はずともものことを云つた。

「あなた樣がそんなことを仰有つてなるもんですか。お兄さんもこの頃はあなた樣のお宅へ入らつしやるやうぢや御座いませんか。ハンデお會ひになつて此方の姉さんの御氣象が分りさへすれば、お兄さんのお心も融けるに極つてゐると、私どもゝさう申してゐるんで御座ります」

「兄貴は一度もこつちへ來たことはない筈だが……」新七は獨言のやうに云つて、おつるの方を顧みた。

おつるは頼まれた使に出掛けようとして、土間へ下りたところであつたが、新七の嶮しい目付を氣遣ひながら、「お母さんは當推量でいろんなことを云ふからいけないよ」と言つて、急ぎ足で外へ出た。

母親は娘の注意に氣づかないのか、そんなことには頓着しないのか、「此間中からたび〳〵お兄さんをこの邊でお見掛けしてゐるんで御座います。お二人きりの御兄弟だから、お案じなすつてお出でになるんだらうと思つてゐましたんです」

「さうですか」

新七は不愉快な思ひを顔に現はさないやうに努めながら、口輕く暇を告げて家を出た。兄が此方の家の閾を跨いだことは一度もない筈なのだが、しかしおつるの母親が根も葉もない拵へ事を云ふ筈もないと、彼れは判斷に迷ひながら、裏口からそつと自分の家へ入つた。

おかつは手紙を書いてゐたが、知らぬ間に歸つてゐる新七の屈託した顔を見つけると、「吃驚しちやつた。……あなたは默つて出て行つて默つて歸つて來るからいけない。何かお旨い物を買ひに行つてゐたんですか」と云ひながら書きかけの手紙を靜かに疊んだ。

新七は自分の邪推のためよりも、むしろ迂濶な問ひを出して女の感情を害ねるのを氣遣つて、ちょつと躊躇したが、默つて濟す譯には行かなかつたので、「この頃兄貴が訪ねて來たことがあるのかい」と訊ねた。

「え、入らしつてよ、昨日の朝。」と、おかつは即座に事もなげに答へて、何故今になつて言出したのかと、突然の問ひを訝りながらも、空呆けてゐると、

「矢張り本當だつたのか」と、新七は呟いた。そして、おつるの母親から聞いたことをそのまゝに話した。

「あなたは何だつて不斷いやがつてたおつるさんの家へいらつしやるの？。櫻町へのお使ひなら車屋でも誰れでも私が賴んで上げますのに」。と、おかつは忌々しさうにツケ〳〵と云つた。おつる親子に對する昨日までの親しみを根こそぎ無くしてしまつて、「あんな人の云ふことを信用するやうぢやあなたも駄目。輕薄なお喋舌家だから、時の拍子でどんな出鱈目を言出すか分つたもんぢやない。……第一兄さんは昨日の朝ちよつと顏出しゝなすつただけぢやありませんか」

「兄が來たなら來たで、お前もおれに隱さなくつてもいゝだらうに。兄貴も昨日そんな話はしなかつたよ。……ぢや、親爺のかはりになつて兄貴がお前に會ひに來たんだね。お前は兄貴の氣に障るやうなことは何も云はなかつたらうね」

「私餘計なお喋舌はしませんよ」

「來るのなら親爺が來て呉れゝばよかつたのに、兄貴が會ひに來たからいけないんだ。兄貴は自分の女房につゝかれたりして、はじめからおれだちに對して好意を有つてやしないんだから。」

新七は、夫婦の間の世間話の種にするつもりで、兄がわざ〳〵此處の樣子を見に來たのだらうと云つて、兄の訪問の秘密にされてゐたことについての不平を、おかつの方へは向けないで、兄の方へのみ怨みを寄せた。心の中に多少疚しかつたおかつは、煩い詰問を受けないのを喜んだが、幸吉夫婦が寢物語に自分の噂をしてゐると思ふといゝ氣持はしなかつた。

せめて甲府から二里ほど距つた積翠寺温泉へでも行つて、當分身を隱してゐようと新七が云ふのを、おかつは上の空で聞きながら、今日明日に迫つたやうに思はれる自分の身の處置を考へてゐたが、考へてゐると、分別くさい身の處置どころか、わざ〳〵甲府三界まで鬼か佛かに引張られて來たのを緣に、思ふ存分の事を仕遂げて見なければ、腹の蟲が收まらないやうに慾念が燃え

立つた。「身延へお詣りして來ると、直ぐに新七さんと別れを急ぐ氣持になつたり、幸吉さんに會へたりしたのも、佛樣のお導きかも知れない。そんなに人の思惑を苦にしてお導きを袖にしちや佛樣の罰が當るだらう」など、、おかつは調子づいて自分の慾念に媚びてゐた。

「積翠寺とかへはあなた一人でいらつしやつちやどう？。私は身延で慾々してゐるんだから旅は御免ですよ」と云つて微塵動ぎもしない氣振りを見せた。

そこへ、櫻町から歸つて來たおつるが姿を見せて、頼まれ事を果した返事をすると、おかつは「お使賃に何かお奢んなさいよ」と新七に云つて、自分は奥の室の机に向つて書きかけの手紙を書きつゞけた。

それは幸吉へ宛てた手紙であつた。「……御親切なお言葉はおろそかにはいたしません。昨日一日いろ〳〵に考へまして、お宅の皆さまのお計らひに背かぬやうに、私の身の極りをつける決心をいたしました。緣のある者緣のない者。人間わざではどうともいたし方のない定まり事と思はれますから、私は皆さまのお計らひにおとなしくおまかせして、自分の剛情ははり通さないことに決心いたしました。つきましてはあなた樣にお目にかゝつて、最後のお差圖を頂きたいと存じますから、おいそがしいでせうけれど、至急にお目にかゝれるやうにして下さいまし。新七さまには内しよにして置きますから、左樣御承知の上よろしくお取計らひ下さいませ」

おかつはかう書いて封筒へ收めて袂へ入れたが、胸の鼓動を禁じ得なかつた。乘合馬車の窓から覗いて見た富士川の崖際のやうな危い所を動いてゐるやうな氣がした。自分の夢のやうな望みが遂げられないで、手紙の文面通りにスゴスゴこの土地を立退かされるやうになつても變なものだがと、おかつは何方向いても不安な影が身に迫るのを覺えたが、そんな甲斐性のないことでどうなるものかと自から勵ました。「ビクく〳〵して尻込みしたつて災難が落ちて來る時にや來るんだから、思ふ存分やつて見なければ嘘さ。一目見た時から、この人になら命かけてもと思つたのだもの」

おかつはかう思ひながら、新七が自分で茶を入れて、珍らしくおつるを持成してゐるを見てゐたが、ふと、

「私これから郵便を出しに行くから、次手にお旨い お茶受けを買つて來ますよ。お二人でゆつくりお話をしてゐらつしやい」と云つて座を立つた。

手紙を直ぐにポストへ入れるのは流石に躊躇されたので、俥夫か誰れかを使にやらうかと考へたが、傍の目に觸れないで幸吉に手渡しするのは六ケ敷さうであつた。たとへ手紙がうまく屆いたにしても、新七に知られないやうにして幸吉に會はうとするのは手順が困難であつた。幸吉の方で氣を利かせて呉れゝばいゝが、手紙の文面を上べだけで讀んで頓間なことをして呉れたら、折角の心を籠めた思付きも妙なことになつてしまふと氣遣はれたが、さう氣遣つてゐても果しがないので、思切つて運まかせで、手紙をポストへ抛り込んだ。

こんな時に老婢やおつる親子が心から自分の味方になつてゐないことが不便に思はれた。

おかつが廻り道して、風月堂で西洋菓子を買込んで家へ歸つた時には、火鉢の側に新七一人例の屈託した顔してゐておつるの姿は見えなかつた。

「あなたは大變仲がよささうに話をしてらしつたのね。不思議ですわね」と云ふと、

「あの女の顔を見てると滑稽だよ。横からだとさうでもないが、正面に見てると隨分しやくれてゐるからね」

「今日はじめて氣がついたの？」

おかつは空々しくさう云つて、火鉢の側を避けて奥の間へ入つた。心が咎めるといふほどではないが、男の顔を見たり言葉を聞いたりしないでゐたかつた。

幸ひに新七が散髪に出掛けたので、彼女は一念を籠めて手紙の成行を見詰めてゐることが出來た。冴えた日の差してゐる縁側には隣りの白猫が遊びに來て、細い目をして此方を見てゐたが、今のおかつには、幸吉といふ美しい面影を他所にしては、この甲府の土地に一刻もゐる氣はなくなつてゐたのだつたが、燃立つてゐる一念に冷たい水をぶつかけるやうな物があたりにウヂヤ〳〵してゐるのが小憎らしかつた。老婢でもおつる親子でも迂散くさい目を此方へ向けてゐるのが、おかつの大望に取つては、今から小煩い邪魔物になつてゐた。……白猫は媚びを含んだ目をして柔しい鳴聲を立てた。おかつはその聲に惹かれて知らず〳〵縁側へ出て、白猫を抱上げて綾してゐたが、さうしてゐる間に誰れもゐないといふ感じが、これまでとは違つて彼女を誘惑しだした。

おかつはふと猫の子を抛出して、自分の持物の中の大切なものを撰出して一つの行李に纏めたりしてゐたが、するとそこへ歸つて來た老婢は、改つた挨拶をして、「申上げにくいんで御座いま

すが」と、今日中に暇を呉れと言出した。

「爲方がないわ」と云つて、おかつはそれ見たことかと、自分の豫想の中つたのをひそかに誇つて、「あんたは塚本さんへ行く氣なんでせう」

「あんな忙しいお家へは行きたかないんで御座いますけれど、おまきさんが自分のかはりに、せめて十日でもお店の臺所を助けて上げて呉れ、自分がお引受けして奉公人を捜してゐるんだけれど、どうしても見つからないからと、手を合せて頼まれますので、斷り切れないんで御座いますよ」

「そんなら行つてお上げなさいな。私の方はどちらでもいゝんですから」

おかつは、くだ〳〵しい言譯を續ける老婢の方を見向きもしないで、持物の整理をしてゐた。老婢も自分の押入れを開けて、いろんな物を風呂敷や行李の中へ掻集めてゐた。おかつはあらまし片付けてしまふと、突立つたまゝ皮肉な目で老婢を見ながら、

「あんたは旦那樣のお許しがなくつても出て行くつもりなの？」

「姉さんにお願ひして置けば宜しいんぢや御座いますまいか。どうせ旦那樣にも御挨拶してからお暇はいたしますけれど」「でも、老婢さんは旦那樣が連れてらつしつたんぢやないの。私にはこの土地の樣子がちつとも分らないからつて。あんたに出て行かれちやこんな小ぼけな世帶でも、私のやうな無性者には持ち切れないかも知れないけど、それでも旦那樣はいゝと仰有るでせうかしら」おかつは揶揄ふ氣で云つた。

「こちら樣では私のやうな者はゐてもゐなくても同じことぢや御座いませんか」

「でも、老婢さんがゐなくなると、後が淋しくなるわね」

おかつはわざと哀れつぽい口調で云つた。下女をかねて隱し目付のつもりで雇つてゐながら、新七の方で給金以外の心付をすることもないし、おかつ自身も、はじめから老婢を好いてゐないので、屢々物惜しさうな謎を掛けられても知らん顔して、餘分な施しをしたことはなかつたのだが、暇を願ひ出た今の場合になつて、おかつはこの老婢でも自分の味方に引込んで置きたいやうな氣持ちになつた。よほど〳〵のくせに、少しでも給金のいゝ方へと目がくれて、寒い時節をひかへて忙しい家へ奉公しようとするやうな慾の深い老婆を手懐けるのは雜作もないことのやうに思はれた。

「あんたは東京へ歸りたいと、先日の晩云つてゐたぢやないの。歸るのはお止めにして此方に長くゐつく氣になつたの？。私は都合によつたら近い中に東京へ歸らうかと思つてゐるんですがね」

「姉さんお一人で？」

「私一人だが、旦那樣も御一緒だか、それはまだ決らないんだけど、どちらにしてもあんたには一緒に行つて貰ひたいと思つてたんですの。だけどあんたが塚本さんへ御奉公することになつたのなら爲方がないわね。私の當てが外れちやつた」

「東京へ連れて歸つて頂ければ、私何よりなんで御座いますがね、姉さんは急にお立ちになるんですか」

「何時立つことになるか、日取りはまだハッキリ決つてやしないけれど」

「私の方では塚本さんにお義理がある譯ぢや御座いませんから」

老婢は東京へ行けるのなら、何時でも塚本の家から暇を貰つて來るからお伴をさせて呉れと熱心に頼んだ。おかつはこのよほど〳〵の老婆　氣迷ひを可笑しく感じながら、相手の心を慮くやうな返事をしてゐた。

七

老婢は新七が歸り次第、兎に角暇を貰つて直ぐに出て行くつもりで、身仕度をして待つてゐたが、新七が歸つて來ない先きに、幸吉が入つて來たのには、老婢もおかつも驚かされた。手紙がそんなに早く屆かうとは思はれなかつたが、しかし、あの手紙の文面を胸に持つて幸吉が訊ねて來たやうにおかつには思はれてならなかつた。

「新七は加減が悪いんですか」と、幸吉は二人の何方に訊ねるともなく訊ねて、上り框に腰を掛けた。

「床屋へまゐりました」と、おかつは明らさまに答へて、「もう歸つて來ますでせうから、お上んなさいまし」

「いや病氣でなけりやいゝんです」

幸吉は家の中を見廻した後で、おかつの顔に目を落したが、間が悪さうに直ぐに目を外して、

「親爺が來ると面倒だから、私が代りに樣子を見に來たんですが、大した病氣でないのなら安心

です。今日一日は休んで明日は店へ出勤するやうに云つて下さい」

「承知いたしました」おかつは慎しやかに通り一片の受答へをしたが、ふと、ウッカリして大切な時を取逃してはならないと胸を波打たせながら、「新七さんはお勤めにいらつしやるかどうか分りませんわ。私が勧めたつて無駄ですから兄さんが御自身でお勧めなすつて下さい」と云つて、老婢に向つて、「御苦労だけど、あんた一走り床屋へ行つて旦那さんにさう云つて下さいな。」

「いや呼びに行かなくつてもよろしい。ただ私が來てさう云つとつたと新七に傳へて下さればそれでいゝんです」

幸吉がさう云つて、直ぐにも歸りさうに腰を浮かせたので、おかつは焦立つたが、手足ののろい老婢は成べく使歩きを免れたい算段をしてゐるのか、幸吉の顔を見ながらぢつとしてゐた。

「早く行つて頂戴ね」と、おかつに急立てられて、老婢はやうやく土間へ下りたが、迂散くさい目で二人を見かへつた。それがおかつにはいやに煙つたかつた。

「昨日あれからよく考へまして、先つきあなたに宛てて郵便でお手紙を差上げました。私のやうなものでも一心を籠めて書いたのですから、兄さんお一人でよく讀んで頂きたいんで御座いますが。兄さんの御返事次第で、私が甲府にゐるもゐないも、一生の事が決るんですわ」

おかつは老婢が閾の外へ出ると、さう云ひながら心の中では神や佛の加勢を祈つてゐた。白々しい顔して煙草なんか吸つてゐても、これほどに思つてゐる私の事を何とか思つてゐるに違ひないと、獨り極めにして悪びれないで、

「櫻町のお父さんや御親類の方にはどう思はれても構ひませんけれど、兄さんにだけは私のお腹の中を聞いて頂きたいんです。何處へでもお伴いたしますから、あなたの御都合のよろしい所へ私を連れて行つて、私が申上げたいことを充分に云はせて下さいましな」と調子に艶をつけて云つた。

「昨日であなたの心持は私にはよく分つてゐるんです。世間でどんな噂を立てゝゐても、私はあなたが新七を騙したといふことは信じはしません。どう決りがつかうとも、あなたの顔を潰すやうなことは私が受合つてしないから、その點だけは安心しといて下さい」

「そんなことは私どちらでもいゝんですの。昨日お目に掛つた時とは私の量見も異つてゐますのです。それで、兄さんにお手紙を差上げてその御返事を頂いてから、この土地にゐるともゐない

とも決心するつもりで、御返事を待つてゐるんですわ。」
「どんな手紙かしら。私の一存で御返事の出來るやうなことなんですか」
幸吉が不安な好奇心に動かされてゐるのを、おかつはいゝことにして、
「私の申上げることは兄さんは充分に聞いて下さるでせうけれど、私にしては生命定めなんですから、こんな所でお話しする譯にはまゐりませんわ。何時に何處へ來いと仰有れば私間違ひなく其處へまゐります、仰有つて下さい。私のためにいろ〳〵御心配を掛けたんですから、御迷惑でもこのお願ひも聞いて頂きたいんですの」
「しかし、ちよつと困つたなあ。……手紙で返事じちやいけないですか」
「新七さんに添はれなければ死ぬるの何のといふやうな馬鹿なこと云つて、あなたを困らしやしないかと心配してゐらつしやるんですか。そんなことを考へてゐるほどなら、兄さんに御相談なんぞいたしやしませんわ。無教育な女の私が皆さんに惡く云はれながら、默つてこの土地を立たうと決心してゐるほどなんですもの。兄さんも私が是非とも申上げたいと思つてることを聞くだけでも聞いて下すつても、お人柄に障ることはあるまいと思つてゐますのですが」

「……よろしい。ちや、晩餐後鷹匠町の幾造の家へ行つとつて下さい。私が歸りにさう云つて置きますから」
「でも私お宅のお知合ひの方の家はいやで御座いますわ」
「だつて知らない人の家であなたに會ふのも困るからね」
「ぢや道を歩きながらお話してもよろしいんです。ハツキリ時間を極めて下されば、私太田町の公園へ行つて、日朝樣のお堂の前でお待ちして居りますわ。」
おかつは日朝樣のお堂の前で願掛けをしてゐる風をして待つてゐようと空想しながら、幸吉を說きつけると、幸吉は躊躇しながらもやうやく納得した。
「あゝ悅しい」おかつは思はずはしたない聲を洩して「ぢや、その時何もかもお話しゝますわ」と云つて、時間の打合せをした。幸吉の方でも此方を何とか思つてゐればこそこんな賴み事を承知したのだと獨り極めにして、夢心地で相手の顏を見てゐたが、此處へ新七に歸つて來られて、兄弟の間に面倒な話の取りかはされるのを、傍で聞かされるのを豫想すると、ふといやな氣がしたので、

「兄さん。今夜私に會つて下さるのなら、今は新七さんにお會ひにならないで歸つて下さいませんか。昨夕お宅でどんなことがあつたのか存じませんが、新七さんはあれから不機嫌で爲樣がありませんの。兄さんには何を言出すか分りませんから、今日はこのまゝ知らん顔で歸つて下さいまし。後で私がいゝやうに言つて置きますから」と、先つき自分で引留めたことは忘れたやうに云つた。

幸吉も此處で弟に會ひたくはなかつたので、短氣を起さないで今日一日はゆつくり休息するやうにとの言傳てを賴んで急がしげに出て行つた。おかつは身延詣での御利益があつたのか知らんと、まことしやかに佛樣を崇める氣になつたが、男を惹く力が自分に備つてゐるのを誇るやうな氣持もした。あの人は新七に會ふよりも自分に會ひたさに來たのぢやないか。それに違ひないとふと思當つて獨りで微笑まれた。

「お客樣はどうなさいました」歸つて來るとさう云つて怪んだ老婢の問ひには答へないで、

「老婢さん。私今どんな人相をしてゐて？。運が向いて來さうに見えて？」と、出抜けに訊ねた。

「いゝお話をお聞きなすつたの。姉さんは昔からいゝ運にばかりお會ひになつてゐぢや御座いませんか」

「戯談お云ひなさい。今こんなにして暮してゐるのはちつともいゝことないぢやないの。だけど明日の日にも私に幸福が向いて來たら、あなたにもお裾分けして上げますよ。緣があつたらばこそ、見ず知らずのあなたとこんな土地で二月も三月も一緒に暮すことになつたんだから、これから先も懇意に突合つて頂戴な」

おかつは老婢に對して頻りに別れを惜むやうな口を利いた。そして、「日那樣には秘密よ」と云つて、紙幣を包んでやつて、洗ひさらしの足袋をも添へてやつた。……もつとやり榮えのする物をやりたかつたのだが、持物の豐かでない彼女には、外によささうな物が見つからなかつた。——でも、老婢は意外な賜物として頂いて喜んだ。

やがて床屋から歸つて來た新七は、兄のゐないのに拍子抜けがしたが、結句それをいゝ事にした。老婢が暇を乞ふのを快く許してやつて、此方から出すとなりや、相當の事をしてやらなけりやならないんだが、婆さんの方から出て行くといふんなら丁度いいよ」と後で云つた。

「あなたも商人の子だから勘定高いのね」と、おかつは冷かして、「誰れとでも別れたいと御自分

で思つた時には、先方からさう云つてくれた方が、あなたのために都合がいゝんでせう」と、冷かに云ふと、新七は顔を赤らめて、

「さういふ譯ぢやないよ。……」と、自分が吝嗇でない言譯をしだした。

「でも、あなただつて私だつて、金持になつたら吝になるかも知れないわね。遣ふためのお金だから、惜まないでドシ〳〵遣つたらよささうに思はれるけれど、持つて見る、出惜みをするやうになるんでせうね」

おかつは努めて相手の話に相槌を打たうとしながら、日の暮れまでの待遠しさにいら〳〵して時々はトンチンカンな返事をした。

「口では手強いことを云つてゐても、まさかおれだちを見殺しにすることも出來ないんだね」と、新七は兄の訪問をも自分の都合のいゝやうに解いて一時の氣休めにして、昨夕のやうに昂奮はしなかつた。かねての希望通りに財産の分配をされる時を空想して、さうなつた時には惜しげもなく遣つて見せるやうな口を利いて得意な色を見せたりした。

「あなたが財産家になつたら、おつゐさんに帶の一筋も買つてお上げなさい。物を慾しがつてゐ人に物をやるのは張合ひがありますからね」おかつは自分の平生の贅澤な望みなどは口に出さないで、淡白にこんな返事をしてゐた。

「老婢(はあや)でもゐなくなると淋しいわね」おかつは稍々もすると返事もしないで、空に物を思ひながら口を噤んでゐる言譯にさう云つたが、新七も何となく淋しかつた。

「さう云へばさうかも知れないね。……今度下女を置くやうだつたら、もつと小奇麗なのを雇ふんだね」

その日は夕餐を早目に濟ました。そしておかつは食後風呂へ行くと云つて家を出掛けたが、出がけに何の氣なしに振返ると、新七は淋しさうに立上つて此方を見入つてゐた。その顔が暫く彼女の目先にちらついて無氣味であつたが、湯屋の戸を開けるまでには目から消えてしまつた。

約束の時間のことを考へながら身體を洗つてゐたおかつは、餘裕があつても心が急かれたので不斷の長湯に似ず、今夜は慌たゞしく切上げて、火照(ほて)つた顔を夜風にさらした。公園へ着くまでには、星が見えだして細い月も冴えた空に照つた。身延の山の夜がふと彼女の胸に浮んだ。公園の片隅にある三階建ての料理屋には賑かな人影が見えて三味線の音もしてゐたが、日朝樣の方は

薄暗くて燈火も點いてゐないで、たゞ蟲が鳴いてゐるばかりであつた。

おかつは周圍に人のゐないを幸ひにして、薄暗い方へ道を採りながら、湯屋で貰つた釣錢を賽錢として投げるつもりで手に握つてゐた。が、お堂の前へ着かない前に、木蔭から出抜けに人影の現はれたのに驚かされた。黒い帽子を目深に被つて外套をも着てゐたので分らなかつたが、近寄つてからよく見ると、それは幸吉であつた。おかつは既に心を許し合つてゐる戀人に會つたやうな氣持がして、打解けた微笑を洩らした。幸吉はわざとらしくも生眞面目な態度を持して、

「私はあなたと約束したから來ることは來たんですが、こんな所に長くまごついてゐ譯には行かないから、用事だけを早く云つて下さい。」と云つて、あたりに目を注いだ。

「用事を云へと仰有られちや私困りますわ。……私の手紙はお讀み下すつたんでせうか」

「見ました。……」幸吉は池の方へ向つて歩きながら、「手紙には私の差圖によつてどうとも決めるといふやうなことが書いてあつたが、私も權柄づくの差圖は出來かねるんです。成べくならあなたにも新七にも傷がつかんやうにして極りをつけたいと思つてゐるんだから」

「お互ひに何時まで煮え切らんことを云つてゐてもはじまりませんわね。私は兄さんの權柄づくのお差圖が受けたいんですの」

おかつは池のほとりのベンチを見つけると、自分から先きに腰を卸した。そして、手に握つてゐた賽錢は池の中へ抛り込んだ。私を嫌つてゐなければこそ此處まで來たのであらうのにと樂つたく思ひながら、

「でも、私に會ひによく此處まで來て下すつたわね。私の願ひが叶つたんですわ。昨日兄さんにお目に掛つた時から、私は今までのおかつぢやありませんの、生命を棄てても、義理も人情も棄ててもといふ氣になりましたの。あなたも今朝訪ねて來て下すつた時から、さういふ私の心をちやんと察していらつしやるんぢやありませんか」

「私にはあなたのいふ事がよく呑込めないが」と、幸吉は慌てながら、女の方から目を外して、「新七を棄てるといふことなんですか」

「新七さんに關係したお話は、今夜は一口も仰有らないで下さいね。命に掛けて戀焦れた私の思ひを察して會つて下つすたんだから、今夜といふ今夜死んでも滿足だと私思つてゐますの。私今は甲府といふ詰らない土地にゐるやうな氣はいたしませんの。……私、兄さんのお差圖で地獄、

でも監獄へでも行けと仰有れば喜んでまゐりますわ。どうにでもして下さい」

さう云つた女の熱い息に驚いたやうに幸吉はつとベンチから立上つた。

「全體あなたは私をどうしようと云ふんだね。此方ぢや眞面目に聞いてゐるのに戯談を云つちやいけないね」

昂奮してさう云つた幸吉の胸の鼓動は、おかつの神經にはよく響いた。

「戯談ですつて？。戯談か戯談でないか、兄さんのお腹の中ではよく分つてゐらつしやる癖に。私のやうな馬鹿な女にでも、これだけの事を云はせといて、耻を掻かせないやうにして下さい。兄さん、後生ですから」

「私は新七の兄だからね。そんなあなたの話を聞いとる譯には行かない」

「新七さんとは別れゝば赤の他人ですわ」

おかつが追縋けるやうにさう云つた時には、幸吉は足早く池のほとりを離れてゐた。おかつは待つて呉れと聲を掛けようとしながら唇を閉ぢた。そして、幸吉の姿が闇の中に消えるまで、ぢつとして見送つてゐた。

「なんて卑怯な人だらう」

おかつは相手を憐れむやうに心の中でかう叫んだ。折角心を籠めて待設けてゐたこの最初の密會が色も香もなく卒氣なく終つたのが口惜しかつたが、幸吉の心の底は見透かされるやうだつたので絶望の惱みは感じなかつた。眞直ぐに家へ急ぐ氣にはなれなかつたので、當てもなく彼方此方の町を歩いてから、おつるの家の前へ出ると、外から聲を掛けた、

「私の家へ遊びに入らつしやらない？。私今一人で公園まで散歩して來たところなの」

「お一人で？」と、おつるは障子の間から顔を出して、「老婢さんは急にお暇を頂いたんでつてね。お困りぢや御座いませんの」

「老婢はお宅へお寄りしたんですか」

「いゝえ。私先つきお宅の前を通りがけに聲を掛けましたの。あなたのお歸りが遲いつて新七さんは心配してゐらつしやいました」

「さう？」

おかつは、何時かのやうに新七が湯屋へ迎へに行つてゐやしないかと思つて、今さらのやうに

赤蜻のやうな女

煩く感じた。うるさく待つてゐられるところへ歸つて行つて機嫌を取つたりするのがいやだつたので、無理におつるを誘出して、一緒に家へ連れて行つた。

夜の公園の寂しい有樣を語つたり、日朝樣へ願を掛けたことを語つたりして、自分の後暗い所行を言紛らせて、おつるを相手に賑かに宵の内を過した。そして、今夜はどうしても新七と二人きりで夜を過すのが厭だつたので、いろ〳〵に說勸めて、おつるを泊らせることにした。新七だけを奥の室へやつて、自分とおつるとは茶の間に寢床を並べることにした。若しも幸吉が今夜の事を彼れの妻や兩親や、あるひは新七にまでも明らさまに知らせたならばと、ふと氣遣はれて、眠りかけた目も醒まされたが、それは彼女に取つては瞬間の迷ひに過ぎなかつた。……弟によく似てゐる兄ではないか。不意打ちに吃驚したやうに一度は氣強くあゝ云つたものゝ、どうせ腹の中は分つてゐるのではないか。

おかつは幸吉がその妻と添寢しながら、今夜の事を思出しては眠りかねてゐる有樣を想像して「私を跳ねつけて見たつて、今夜いゝ夢は見られりやしないだらう」と、目の前に描出した男に向つて冷かすやうに云つたが、おかつ自身も夜つぴていゝ夢は見られなかつた。

八

翌日の午過ぎまで櫻町から何の音沙汰もなかつたので、あの事については幸吉の胸一つに收められてゐることを察して、おかつは意を安んじた。そして、自分の不所存の詫言をして、氣持よくこの地を立ちたいから是非會つて呉れと書いてやつて、も一度幸吉を何處かへ引出さうかと企てゝゐた。

「今日はちよつとでもお店へ顔出ししていらつしやいな」と、時々思出したやうに新七に出勤を勸めてゐたが、新七は出勤どころか、自分一人だけでは一歩も外へ出まいとしてゐた。おかつの方で不平らしいことさへ一言も云はなくなつたのが、彼れには却つて氣掛りになつてゐた。早晩別れなければならぬやうな破目になりかゝつてゐるといふ豫感は頻りに彼れを脅かしてゐた。

「家でボンヤリしてゐても詰らないぢやないの。ちよつとでも出ていらつしやいよ。お父さんの氣に入るやうにしといた方が、あなたのためにも私のためにもいゝんですからね」と、おかつは唆かしても新七が動かないのがもどかしくて、

「ぢや、どうでもなさい。末を楽みにしてどんな辛抱でもすると、あなたが不斷云つてゐた　は嘘だつたのね」と拗ねて見せたが、女に拗ねられるのに張合を覺えた新七は、その言葉に縋つて、いろ〳〵の口說をはじめた。

何時とも同じやうな詰らない愚痴として、おかつの耳は惱まされた。男は何故こんな詰らない愚痴ばかり並べるのが面白いのか知らんと、無理にも悅しがらせの一言も云へなくなつて、欠伸の出かゝるのをやうやく嚙殺してゐたが、そこへ櫻町の小僧が新七を呼びに來たので、彼女も油斷してゐられなくなつた。

「まだ加減が惡いからもう一日休むと云つといて呉れ」と、新七は小僧を返して、「また兄貴でもやつて來るだらう」と皮肉のつもりで云つたが、おかつは受答へをしないで奥へ入つて夜具を出して横になつた。他所目には不貞腐れと見えるやうな態度で、新七の云ふ事する事の相手にならないで、剛情に自分一人の思ひに耽つてゐた。若しも幸吉が愚かにも卑怯にも裏切りでもしようなら、その時こそ負けてはゐない、此方から身を投出して宮部の一家に小つぴどく耻をかゝせてやる。碎でもない男に長い間自分の身を任せた果てに、ケチをつけられて、スゴ〳〵この土地を去るやうでは甲斐性がなさ過ぎる。腹が癒えない。新七の實意や情愛が何の足しにもなるものか。

家の中は靜かであつたが、ふと首を曲げてそつと目を開けて見ると、新七は茶の間で肱枕して足を曲げて假睡をしてゐた。寒さうで寢息も微かであつた。

おかつは喉が乾いてゐたので、新七の眠つてゐるのを幸ひに起上つて、鐵瓶の湯を呑んだが湯は生温くて、長火鉢には火の氣もなかつた。

そこへ、櫻町からの使が再びやつて來たが、するとおかつは新七には知らせないで、自分で土間へ下りて、小僧を裏手の庭先へ連れて行つて本宅の樣子を訊ねた。

「今直ぐに一緒に連れて來いと大旦那が仰有つたんですから、此方の旦那にさう仰有つて下さい」と小僧は手强く云つた。

「ぢや、今起しますから待つてゐらつしやい。……お宅の若旦那は昨夕もお店へ出てゐらしつたの？。」

「えゝ。昨夕はおそく歸つて來ました。」

小僧が好奇心に驅られた目でおかつの顏を見ながら、氣輕な返事をするので、おかつは老人夫

婦や若主人夫婦の氣風やこれ等の人々に對する店員の氣受けなどについていろ〳〵と訊ねた。主婦と若旦那とは仲がいゝかゝと訊ねると、小僧はニヤ〳〵笑つた。

「待つてゐらつしやい」と云つて、おかつはふと思出したやうに家へ入つて、小紙幣を鼻紙に包んで來て、使賃として小僧の手に握らせた。この小僧にしろ老婢にしろ、僅かな金を悅しさうにして受けるのを、おかつは見るにつけて、もつと金が自由になつたら、かういふ人だちの手に播いてやつて、自分の思ふやうに皆んなを使つて見たいと考へたりした。

「あなたに頼みたいことがあるんだけど聞いて下すつて？」と、懷つこさうに云ふと、

「へゝえ」と、小僧は無邪氣な笑ひを浮べた。

「ぢや、ちよつと待つてゐて下さいな」

おかつはふと思ひついて、家へ入ると急いで机に向つて、「昨夜は申譯のないことをいたしました。お許し下さいませ。もはや皆さまにお目にかゝるも耻かしく、いつそ自殺しようかと存じましたが、一言あなたさまにお詫びして、許すとのお言葉を頂きませんと、この世に思ひが殘つて死ぬにも死なれぬやうに思はれます。おしつけがましく何とも申譯は御座いませんが、昨夜と同じ時刻に同じ所へお出で下されて、私に會つて下さいませ。一分間でゝもよろしいのです。私の一生の望みはこれ一つで御座いますから、人ひとりのあの世の迷ひを救つてやるとおほしめして是非聞きとゞけて下さいませ」と書いた。

これだけ書くにも案外手間取つたので心が焦立つたが、幸ひに新七の眠りは醒めなかつた。おかつは針の先で小指を突いて、自分の名前の下を血汐で染めた。

「これを秘密で若旦那に上げて下さいな。たゞ默つて渡せばいゝんですから、誰れにも見せないやうにね」と手紙を小僧の内懷へしつかりと挾んで「あなたのお名前は何と云ふの？」と訊ねた。

それから新七を搖り起すと、新七も不承々々に行く氣になつたが、おかつは不斷の出勤の時とは違つた他所行の晴着を出してやつて「今日は度胸を据ゑて確かりした口を利かなきゃ駄目ですよ」と力を添へた。

「僕は大丈夫だ。直きに歸つて來るから、お前は何處へも出ないで、火でも熾して待つといで」

新七は寢呆氣顏しながら快活にさう云つて、小僧と一緒に出掛けた。

いよ〳〵こんな家に退屈して安閑としてはゐられない時が迫つて來たのを感じて、新七が歸つ

て來るまでに覺悟を極めなければならないと、おかつは昂奮して頻りに心が急かれたが、しかし昨夕の所行についての悔悟の念はちつとも起らなかつた。むしろ、破滅なら破滅でよかつた。どうせ一度は免れることの出來ない新七と別れ際の爭ひをも表立つて爭ふのも結句いゝ氣持のやうであつた。獨角力は取れないために、煤ぶつて煮切らないで、面白くもない愚圖ついた生活のお附合をしてゐるよりは、摑み合ひの喧嘩別れでもした方がよさゝうであつた。

幸吉は昨夕おそく歸つて來たと、使ひの小僧の云つた言葉も、彼女は自分の都合のいゝやうに解いて、「私の云つたことが氣になつて、夢中で方々を歩いてゐたのだらう」と賴もしく思つてゐた。

立つてゐるおかつの頭の上にふと電氣が點いた。時計は止つてゐたが、日の暮れかゝつてゐるのに氣づくと、おかつは昨夕のやうに外へ出る身仕度をした。どんな破目にならうとも世を憚つて脆甲斐なくコツソリ逃げだす氣は最早なくなつてゐたので、自分の持物を新七の留守の間に持出したりなどしなかつたが、自分の手元にある金は財布に浚へ込んで表の戸を引寄せたゞけで外へ出た。

おつるの家の外には遊びに行く所のない彼女は、また風呂へ入つて時を過した。新七の前へどういふ話が持出されてゐるかと自分が櫻町の次の室に忍込んで立聞きでもしてゐるような氣で、石鹼を片手に、茫然とした樣子して耳を澄ましたりしてゐたが、「入らつしやいまし」と、直ぐ側で聲を掛けられたのに驚いて目を据ゑると、櫻町の家族の顏は湯氣の中へ散つて、おつるの母親のダブ〳〵した身體が彼女の鼻先で場所を取つてゐた。

「オヤ、ちつとも存じませんで」

おかつは悪い人に見つかつたと、いゝ幸先でもないと思ひながら、一しきり愛想のいゝ受答をして、母親よりも先きへ湯から上つた。

公園の入口まで行くと、おかつも流石に危かしいやうな愚かしいやうな氣がして、ふと足が留つて進みかねたが、でも、スゴ〳〵家の方へ後戻りして、新七の歸るのを待つてゐたつても、別にいゝことのあらう筈がなかつたので、ふとした氣おくれを振拂つて昨夕のところへ押進んだ。昨夕此方の應力にかゝつて來た幸吉が今夜あの手紙に惹かれて來ないつてことはないと、おかつは疑はなかつた。

昨夕詣りそこねた日朝様のお堂の前へ行つて、蹲んで見上げたが、お堂の中には燈火一つ點いてゐないで陰氣で薄汚さうであつた。身延の仁王門の側で見た時のやうに此處では佛様も尊げには見えなかつた。おかつは賽錢を闇がりの中へ抛込みながら、參詣人のないかういふお堂の中こそ、婿曳に都合のいゝ所だと不意にさう思つたが、さうすると、薄汚い陰氣なお堂の中も懐しく見られ出した。昨夕のやうに星が冴えて、弱々しい蟲の音も足下から聞えた。

昨夕と同じ時刻になつたことはあたりの様子で知られた。おかつは階段の側に蹲んだり立つたりしてゐる間に、知らず〳〵佛様に向つて熱心に祈願を籠める氣になつた。佛の御利益を説いてゐた身延の若僧の姿も、彼女の祈願に力を添へるやうに目の前に浮上つた。待焦れてゐる自分の思ひが佛の助けによつて幸吉の心に通つて、此處へ寄つて來るやうにと口の中で祈つてゐた。珍しくも兩手を合せて目を瞑つて額づいたりした。

闇に包まれて本尊の御姿は見えなかつたが、暫く瞑つてゐた目を開いて見据ゑると、お堂の正面には幸吉の姿がまざ〳〵と現はれた。驚く間もなく直ぐに消え失せたが、おかつはそれを佛の示現のやうに感じて、改めて眞心から合掌禮拜した。燈火も人影も見えないお堂のあたりが、色

つぽい不思議な靈場となつて彼女の心を蕩けさせた。風は動かないで冷々とした空氣は彼女の湯上りの肌の温みをさました。料理屋の方からは木の間を潜つて三味線の音が微かに聞えて來た。

おかつはいくたびか足音の近づくのを耳にしては欺かれてゐたが、やがて、人影が間違ひなく此方へ近づくのを見つけて夢から醒めたやうに目を見張つた。人影は屢々立留つたり、あるひは横道へ外れたりするので、おかつは半信半疑で、正體を見つけるつもりで、自分から歩出して、木蔭に身をかくしながら星の光で相手の顔形の分るところまで近寄つた。

正體を一目見たおかつは、足下に蛇を見つけたやうに驚いて思はず後退りした。ボンヤリしてゐる薄暗い人影も、血眼になつて彼女を搜してゐる新七の面相を彼女の心に呼起させた。

おかつは後退りして、逢つた道を求めて急いで公園を出た。後を氣にしてたび〳〵振返りながら、暫く當てもなく歩いてゐたが、心が次第に鎭まるにつれて、幸吉が手紙の秘密を弟に告げたのぢやないかと疑はれて、その卑怯な所行は憎々しく思はれた。

佛様の御利益も何も滅茶々々になつたので、おかつはガッカリした。眞心を籠めたつもりの戀の邪慳に壞されたことが一圖に悲しくなつて、誰れとも爭はうとする力が拔けて、こんな土地に

一日もゐたゝまらないやうな氣になつてしまつた。

「どうにでもなるがいゝ」おかつは弱々しく自分の心に向つてさう云つた。そして、新七の歸つて來るのを待つて、彼れの心まかせに最後の處置をつけて、自分一人で今夜にでも東京へ立てるものなら立つことにしようと考へながら、フラ〳〵と家へ歸つた。表の戸は開けつ放しになつてゐた。

火の氣のない火鉢の前にぢつと坐つて待つてゐると、新七の思惑などはどちらでもよくなつて口惜し涙が留度なく流れた。

新七が歸つて來たのは暫く立つてからであつたが、先つき出て行つた時とは見違へるやうな蒼褪めた力のない顏をしてゐた。「お前は何處へ行つてゐた？」と、咎めるやうに云つたが、女の身に異狀もなかつたのに安心してゐることは言葉にも顏付にも現はれた。

「私此處にぢつとしてゐたつて詰りませんからね」と、おかつは當てつけるやうに云つて、相手の鞭の下りるのを待つてゐると、

「僕は何が何やら分らなくなつたよ。親爺や兄貴には相變らず眞綿で首を絞められるやうな意見

をされた上に、今日は變な事を云はれたのだが、それは別の話として、家へ戻つて來ると、お前はゐないしね。一人でゐると、あれやこれやと考へられて氣持が惡くなつたから、昨夕お前が公園に行つたとおつるに話してたことを思出して、僕も氣晴らしに公園の方へ散歩に出掛けたのだ」と、新七は努めて靜かに云つて、おかつの方へ目を注ぎながら口を噤んだが、おかつは沒表情のまゝで聽かりした受答へもしなかつた。

「さうすると公園で僕が誰に會つたと思ふ？。僕は吃驚したよ。……」

「へえゝ……」ふとおかつの目はきらめいた。思はず訊返さうとしながら、言葉を嚙殺して、相手の問はず語りを待設けてゐた。

「日朝樣のお堂の側をまごゝゝしてゐる男があつたから、何の氣なしに側へ寄つて見ると、それが兄貴だつたよ……少し前に氣持のよくない事を聞かされた後で、思ひも染めんところでまた出會つたんだから、僕は變でならなかつたが、兄貴の方でも吃驚しとつたよ。……お前は何とも思はないのかい」

「それが私にどういふ關係があつて？」

「僕には今日の事がみんな腑に落ちないんだよ。兄貴も氣が欝してならないから散歩してゐるんだと云つて、僕を誘つて田圃の方を歩いて、歸りには汁粉を奢つて呉れたんだが、その間に僕の腑に落ちないやうなことをいろ〳〵話してゐたよ。この間中とは人が違つたやうに、兄貴は親身にいろ〳〵な事を云つて呉れたが、途中で別れてから考直すと、親身な話でも以前のやうにそのまゝにや受取れなくなつた。二人きりの兄弟で、子供の時分から大した仲たがひをしたことなしに大きくなつて來たんだが、この頃はどういふものか一人しかない兄が本當の兄のやうに思へなくなつたんだよ。兄貴の事を考へるといやあな氣がするんだ。今日に限らず不斷でも僕の爲めを思つていろんな事を云つて呉れてゐるんだらうが、……」

新七はつゞいて云はうとしたことを直ぐには云出しかねて、澁い顔して口を噤んだが、おかつも浮かりした口を利いて籤蛇になるのを恐れて默つてゐた。火の氣のない火鉢の側に差向ひで默つてゐる間の鬱陶しさつたらなかつた。新七さへ公園へ行かなかつたなら、望通りに幸吉に會はれたのだと思ふと、おかつは新七に對してどうかしなければ腹が癒えないやうに焦立つたが、我慢して目を伏せてゐると、

「兄貴はこの頃僕等に對して嫉妬心をもつてゐるんだ」と、やがて新七は言ひづらさうに云つた。

「さう？。可笑いわね」

「そんなことは思つても不愉快だから思ひたかないんだけれど、どうもそれに違ひないよ。お前は勸づいてやしないのか。二三度兄貴に會つたんだから、話の中に自然に思當ることがありさうなもんだがなあ」

「分らないわ、あなたの仰有ることは。嫉妬と云つて何を嫉妬するんです」

「そんなことを立入つて口に出して云ふのはいやだ。考へるのもいやだ」ふと氣色ばんでさう云つた新七の聲は震えてゐた。そして、努めて心を鎭めながら、

「おれは今夜の中にでもこの土地を立ちたくなつたよ。お前もどうせ此處にゐる氣はなくなつてゐるんだらう。後の仕末は後で考へりやいゝんだから、一刻も早く他所へ出て行かうぢやないか。此處にかうして居つちや先きが恐ろしいやうに思はれてならないんだ」

「私と一緒にゐると恐ろしいことがあるんですかねえ」と、おかつは無感興な返事をして、「ぢや、私がゐなければいゝんでせう」卒氣なく云つて、長いこと坐つてゐた火鉢の側から立上つたが、

すると、新七は今まで壓えく〳〵してゐた疑惑の惱み慾慮の思ひを最早、自分の心一つに收めかねて、われ知らず立上つておかつの後に立つた。

「お前は僕に苦痛を與へるつもりなんだな。僕を苦めといていゝ氣になつてゐるんだな。……それなら僕は云うぞ。お前は利益のためには僕等の家庭を亂してもいゝと思つてゐるんだらう。僕と一緒にゐたつて得になる目込みがないと分つたら、どんな手段でも取る氣になつてゐるんだらう。僕は傍で何といはれても、今まではお前を些とも疑つてなんかゐなかつたのだが、先つきからのお前の樣子で自分が馬鹿だつたことが分つて來たんだ」

新七の目に涙の溜つてゐるのをおかつはふと顧みたが、直ぐに顏を背けて、

「何とでも仰有いよ。私が得をするためにどんなことをしたんですかねえ」と空々しく云つた。そして、かねゝ別にして置いた風呂敷包を開けて、他所行の衣服を出して着替えようとしながら、まかり間違へば、打づたり蹴つたりくらゐされるかも知れないと覺悟して待つてゐたが、それつきり荒い言葉も聞かれなくなつたのを却つて無氣味に感じて、そつと振返ると、新七は後に突立つたまゝ目を据ゑて此方を見入つてゐた。それが、怒つてゐるといふよりも、見惚れてゐるといふやうにおかつには思はれたので、これならいゝと安心して、手早く衣服を着替えて、

「私、これから母の所へ行つてよく相談して來ますからね。留めないで下さいね」と、輕く云つて部屋を出掛けた。夜行で東京へ行くかどうするか、まだ極つてゐなかつたのだが、とに角それを口實にするのが穩當だと思つたからであつた。

「此間から僕が誘つた時には、母親なんかに會ふのも詰らんやうに云つてたぢやないか。一人で東京へ行く氣になつたのか」と、新七は前を遮つて云つた。

「だつて、私は母にでも相談するより外は誰れも親身な話相手はないんですからね。私の邪魔をしないやうにして下さい」

「ちや、どうでもしろ。……こんないやな思ひを殘して別れてもお前は何ともないんだね」

新七が惡夢に襲はれてゐるやうで、藻掻きながら手出しはしかねて、ぼんやりした目で女の動作を見てゐる間に、おかつは心忙しく出て行つた。後から追蹤けられるのを氣にしながら、横町から横町へ外れて、暫くして後を顧みて、新七らしい影の見えないのにやうやく安心した。

案外無事に濟んでよかつた。こんなことなら、今まで詰らない我慢をしてゐるには及ばなかつ

たと、おかつは縛めから解かれたやうで晴々した。それに、幸吉の心の中さへ疑ふ餘地のないやうに知れて來たのに、空手で東京へ歸れる筈はなかつたので、足に無意味に停車場の方へ向ひながらも、幸吉を呼出す工夫を凝らしてゐた。

老婢がこの土地へ來たはじめに足がゝりにした義理の姪にあたるお時の家は、停車場の近くにあつた。おかつは罐詰や菓物などを僅かばかり店先へ置いてあるその家の前に立つた。そして嬰兒を抱へて店先へ出てゐるお時に向つて、急用があつて塚本さんの家にゐる老婢にちよつと會いたいんだが呼んで來て貰へまいかと賴んだ。「東京へ歸るかも知れないんですからね。さう云つて下さいね、老婢さんと約束してゐることがあるんだから」と言添へた。

お時はぢろ〳〵おかつの樣子を見ながら、嬰兒を脊負つて、奥にゐる誰れかに店番を賴んで出て行つた。おかつは明るい所を避けて片蔭に身を潜めて、旨く事の運ぶやうにと念じながら、表の人通りを見てゐた。停車場の近所であつても人影はまばらで、この頃明るい賑かな町にあこがれてゐた彼女は、何處へ行つてもこの市中には自分の心を惹くやうな所のないのを今更のやうに感じて、どんないゝことがあるつもりで、新七なんぞに誘はれてこんな土地へ來たのだらうと、出京間際の自分の氣まぐれな考へを思出したりしてゐたが、ふ　新七に違ひない若い男の影が目の前を横切つたのに驚かされた。脇目も觸らずに足早に歩いてゐた。

「何といふ煩い人だらう。私を追つて停車場へ行つてるんだ。男のぐせに見つともない」おかつは自分が直ぐに停車場へ行かなかつたことを喜んで、用心のために表から見えない所へ身を潜めた。

平生の新七の擧動から推して、彼れがあはてゝ狂人見たいに彼女の行衞を搜廻ることはおかつには明かに分つてゐたが、今はそれを苦に病むほどに恐ろしくはなかつた……もう私の身體をあんな男の自由にさせるこつちやない。あの人の親切くらゐは、私ほどの女が二月あまりもこんな土地で弄び物になつてゐたので、充分過ぎるほどに返禮してゐる。

自分ゆゑにこの田舍の町に一騷ぎの起ることも、むしろいゝ氣持で想像された。そして、大きな騷ぎか小さな騷ぎか騷ぎの起るのを覺悟してゐると、氣に張りが出來て、人には無理無體と思はれさうな戀慕も難なく遂行されさうに思はれた。

「老婢さん、お氣の毒でしたわね」と、蹲んでゐた暗い所から立上ると、忙しく息をはいてゐた

老婢は、
「何時お立ちになるんですか。今夜のことぢや御座いますまいね」
「都合で今夜立つかも知れないわ。それについて、あなたにお頼みしたいことがあるんですがね」
おかつは低い聲でさう云つた。そして、お時に硯箱などを借りて急いで手紙を書いて老婢に渡しながら、幸吉を宮部家の代表者として會つて置く必要のあることを喋いて言譯をした。
「成べくお店の人に目立たないやうに、あなたが若旦那に直かに會つて、これを渡して御返事を聞いて來て下さいね」
「はい」
老婢は力のない返事をした。下女として雇はれてゐた間でさへ使歩きは大儀だつたのに、わざ〳〵呼びつけられて可成り遠い所へ使にやられるのは不平であつたが、その大儀さうな風に氣づいたおかつは、
「成るべく急いで行つて頂戴な。そのかはりお禮は充分にしますよ。東京へ行つたら屹度あなたを呼んで上げてよ。……塚本さんとこは仕事が樂ぢやないでせう」と、人情のありさうな口を利いた。
「お禮なぞどちらでもよう御座いますが、東京へは連れてつて下さいましよ」と、老婢は俄かに悅しさうな顏をした。
「歩くのが大儀なら近所まで俥に乘つていらつしやいな」と、おかつは無理にいくらかの金を押付けた。そして、老婢が急ぎ足で行くのを見えなくなるまで見送つてゐたが、お時に勸められて、家の者の寢室になつてゐる二階へ上つて休んでゐることにした。すでに敷かれてゐる寢床をわざ〳〵片付けられたりするのを、おかつは氣の毒に思ひながら、新七と親む前に東京のある家のこんな二階である男と出會つてゐたことを遠い昔のことのやうに思出したりしてゐたが、一人になつて薄つぺらな座蒲團にキチンと坐つて待つてゐると、一刻々々が長く待遠しくて堪へられなかつた。
お時は澁茶を入れて來て、お愛想に世間話を持出したが、話が新七の事に觸れるので、おかつは返事をするのに苦んだ。老婢を雇入れたのもお時の世話だつたので、お時の亭主は以前宮部家へ出入りしたこともあつたのだから、おかつは油斷してはゐられなかつた。

「櫻町の大旦那はそりやお堅いんですからね。新七さんにもお氣の毒で御座いますよ」と、お時は的の外れた同情をしておかつが一人で東京へ歸るやうな破目になつたのを憐れむやうな口を利いた。

私もこんな見窄らしい田舍の主婦に氣の毒がられるやうになつたのか知らんと、おかつは樑つたい氣持がした。

餘程立つてから戻つて來た老婢は、階子段を上るや否や、先方の返事を傳へる先きに、「姉さん今廿處でお宅の旦那樣にお會ひしましたよ。私何も申上げませんでしたけれど」と、さもおかつの心を呑込んでゐるやうにキョトン〳〵してソッと云つた。

「さう？。何處へ行つたんでせう」おかつは空呆けてさう云つたが、驚きをかくす譯には行かなかつた。

「お前は何處へ行くとお訊きなすつたから、ちよつとお時の家へとお答へすると、歸りに寄つて行けと仰有いました」

「へえ。……」おかつは煩さうに云つて、「それで櫻町の方はどうだつたの？」と、老婢ののろさを齒痒がつて訊ねると、

「若旦那樣はお店の火鉢の側で青い顏して俯首いてゐらつしやいました。お手紙を差上げると吃驚しなすつて、今夜はおそいから、話があるのなら明日にでもして呉れといふ御返事でした。そして大變慌てゝゐらつしやいました」

「明日にしろつたつて、私はもうこの土地には家がないぢやないかね」おかつは、老婢の所爲でもあるやうに思はず氣色ばんで突つかかつたが、「あなたが出て行つた後で、私もあの家にはゐないことに極めてるのよ」と後で顏を和らげて云つた。

「こんな穢るしい所でもおよろしければお泊んなさいましな。私がお時にさう申して置きますから。……姉さんもこのまゝ東京へ歸んなすつちや詰らないでせうから、櫻町のお家で道をつけて下さるまではこの家にでも泊つて待つてゐらつしやいましな。私もお役に立たなくつても御用があれば何でもいたしますよ」と、老婢は意外にも焚付けるやうに云つた。

「えゝ、有難う」おかつは老婢の心は見え透いてゐながら、何となく心元なくなつてゐる今の場合さう云はれるのは有難かつた。「あなたにはまたお頼みしたいことがあるんですけど、今夜はもう

歸つて下さいな。遲くなつたらお家へ悪いでせうかゝ。私もお暇しませうよ」と、座を立ちかけると、

「姉さんは御遠慮なさらないでこちらへお泊んなさい。その方がよう御座いますよ。姉さんは今夜からお時の家にゐらつしやるつて、櫻町の若旦那にさう申上げといたのですから。若旦那にお會になつて話がつくまで此處をお動きにならない方がよろしいと思ひますよ。……私はおつるさんにも塚本さんの方にも、どなたにもあなたが此方にゐらつしやることを話しませんから。東京へお立ちになるまで、安心して何日でも此處にゐらつしやいましよ」

「ぢや、老婢さんは若旦那にいろんなことをお話したのね」

「私の方から申上げた譯ぢや御座いませんけれど、若旦那がお店の角まで私に隨いていらしつていろんなことをお訊きなさいますから。……それは姉さんのことばかりお訊きになつたんぢや御座いませんです。實はおつるさんが櫻町の若旦那には大變な執心なんで御座いますから」

老婢は自分の餘計なお喋舌を言紛らすためにおつるのことまで持出したが、おかつはおつるなどに對して嫉妬を起すにはあまりに自から恃むところがあつた。むしろ嘲笑ふやうな氣持で聞いてゐた。

度胸を据ゑて此處に泊ることに極めて老婢を歸してから、おかつは階下でお時や初對面のお時の亭主を相手に、就眠前の暫くの時間を過したが、幸吉夫婦の話が出ると、疼いやうな刺戟を感じた。幸吉の妻の平たい肥つた赭ら顔が、自分が何處かで見たことがあるやうに明かにおかつの胸に映つた。そして、その女に對して嫉妬の思ひのむら〳〵と起るのをどうすることも出來なかつた。……今夜は自分のところへ來る筈の幸吉が、自分のことを忘れてはゐないに極つてゐるのに、氣臆れして、そんな配偶のところに今まで通りに添寢するのを情無く思つてゐた。

卑怯な人、腑甲斐ない人と、おかつは男つてものみんなそんなのか知らんと、勝手に蔑視みながら、直ぐにも達せられさうな望みの容易に達せられないことの牴牾しくて、幸吉に對する戀しさは、夜の明けるまでどうしてぢつとしてゐられるかと思はれるほどに燃立つた。

二階へ上つて煎餅蒲團に横たはつて枕に就いた時には、表の戸も鎖されて、外の足音にも夜の更けたことが知られた。汽車の音が耳近く聞えてから次第に遠くへ消えてしまふのが、おかつの心を何となく哀れつぽくさせて涙をさへ浮べさせた。無理にでもこの戀を遂げなければと荒れて

ゐる彼女の心もふと鎖められて、かの豚ぶとりの老爺のことが思出された。無垢な自分を最初に弄んだ憎い爺さんだけれど、親切なことは親切なのだから、此方から泣きついて助けを乞ふたら見殺しにはすりやすまい。「どうせ満足に世が渡られる身ではないし」無理な色戀には諦めをつけて、お爺さんの所へ行つてあの後の身の上話でもして、思ふさま泣いて見ようかと、おかつはふと心弱くなつたりした。涙に濡れた枕紙に額を押付けて寢苦しい思ひをしてゐる間に知らず知らず眠入つたが、彼女の夢の中に忍込んで來たのは、幸吉でも新七でもなくつて、豚のやうに肥つた頭の禿げた老爺であつた。お爺さんはニコ〳〵した顔してやつて來た。

老爺に枕を投げると同時に、おかつは目を醒ましたが、夢の中でいやらしかつた爺さんの擧動は、醒めてからも目の前にちらついて、おかつは寢卷を脱いで振拂(ふるはた)きたいやうな氣持がした。眞夜中過ぎになると、俄かに冬が來たやうに、寒い空氣が薄い夜具の隙間から彼女の肌を冷やした。

九

一番の汽車に乘る客が外を通つてゐる頃であつた。戸を叩く音と呼起す聲に、明け方の眠りを

醒まされたおかつは、自分に關係したことで誰れかゞ訪ねて來たのに違ひないと思はれたので、胸を轟かせながら聞耳を立てゝゐた。雨戸の隙間は薄明るくなつてゐた。お時が寢呆けた返事をして、愚圖々々してゐる間に、手早く衣服を着けながら、戸外の音聲に耳を澄ませてゐたが、やがてお時と話しだした客の聲には見當がつかなかつた。自分に會ひに來たのぢやないと思直すと寒いのに早くから起きてゐたつて仕方がないので、再び寢床へ入りかけたが、すると、話聲が切れて、お時が梯子段を上つて來たので、おかつは先つきよりも一層はげしく胸騒ぎをさせた。

「宮部さんの御親戚の方が、あなたにお目に掛りたいつて入らしつたんですが、お通し申してもよろしいでせうか」と、お時は側へ寄つて小聲で云つた。

「御親戚の方ですつて？」おかつは氣抜けがしたやうにさう云つて、ちよつと間を置いて、「私宮部さんの御親戚の方にはお會ひしたくないんですから、お斷りして下さいな」とキッパリ言放つた。

「若旦那の叔父さんに當る方なんでせう。ちよつとでもお會ひになつてお話をお極めになつたらいかゞでせう」

「いゝえ、私その方にはお會ひしたくないんですの。お氣の毒ですけど、斷つて下さいな」

「さうで御座いますか」

お時は不機嫌な顔して下りて行つた。おかつは張合ひがなかつた。寢卷に着替えて寢床へ入つて、日が差すまで、も一眠入りするつもりになつてゐたが、階下では朝の仕度やら子供の泣聲やらで騷々しくなつた。一錢道馬車の音も聞えだした。ふと壁一重の隣りの二階から、拍子木の音に和して南無妙法蓮華經の聲がかしましく聞えだしたので、おかつは自棄見たいな朝寢が出來なくなつて、夜具を片付けて階下へ下りて顔を洗つた。化粧道具さへ持つてゐないのが不自由であつたが、自分の荷物を取りに行く譯には行かないので、お時の鏡を借りて頭髮だけ解きつけてゐた。眠不足のためか、いやな夢に惱まされたためか、疲勞か目顏にあらはれてゐるのが、おかつ自身にもよく分つた。

「主婦さん。老婢さんの緣で此方の御厄介になつたのですけど、御迷惑なら直ぐにお暇しますよ」と、後から此方を見てゐるお時に云つた。昨夕は一晩泊るのさへ多少氣がひけてゐたのであつたが、最早さういふ些細なことに神經を病むには及ばないと度胸を据ゑて、自分の力一ぱい幸吉の家に取付いて離れない覺悟を極めて、どうかなるまで此處に寢起をしてゐようとした。

「主婦さん。私、櫻町の若旦那の幸吉さんにお目に掛つて、私の顏の立つやうにして頂いて綺麗にお別れすることに約束がしてあるんですからね。幸吉さんの外の方がいらしつたら、お斷りして下さいね。若しも新七さんが訪ねて來ても私は此方にゐないつて云つて下さいな。お世話になり次手に、それだけは堅くお賴みしますわ」

「承知いたしました」お時は相手の手强い言葉に呆れて、押して忠言めいた口は利きかねた。

「私のやうな者をかくまつて置いては宮部さんのお家に濟まないと思ひなさるのなら、さう云つて下されば何時でもお暇しますよ」

「姉さんをお泊めしたつて、宮部さんの方で私どもにお小言を仰有る氣遣ひは御座いませんよ」

お時が卑下してさう云ふので、おかつは思上つて、自分が彼等の目上の者で、些少の金でもやつて彼等を自由に差圖するのが當然なやうに思つたりした。

「新七さんが來たら私は他所へ行つちまつたと云つて下さいな。大事なお願ひなのよ」と、おかつは念を押して、お時が一も二もなく命令に從ふのを見て、ひとりでに自分の部屋と決つた二階

へ上つて身を潜めた。そして、幸吉に宛てゝ同じやうな呼出しの手紙を書いた。「……明日といふ日は待遠しくてなりません。今日の中に私の身もあなたのお身の上もどうなるか分りませんので すから、一ときも早くお目にかゝれるやうにお願ひいたします。人間はいつ何時じゆ命が切れるか分らないですもの。私は心がせかれてなりません」と、今の今心底から思はれて仕方がないことを書添へたが以前の手紙とは違つて、今度のは上べも底もない露骨な色文みたいになつてしまつた。

おかつは躊躇しないで、お時に頼んでその手紙をポストへ入れさせた。一日を待暮すのは容易ならぬ辛抱の入る譯だつたが、おかつの昂奮した心は、退屈する暇のないやうに忙がしかつた。新七の屈託してゐる顔や、血眼になつて捜廻つてゐる顔なども、彼女の目の前に渦を巻いた。

おつるが訪ねて來たのを、知らないと云つて返したと、お時は二階へ知らせに來て、「何だか言ひにく御座んしたけれど」と、嘘を吐くことの苦しさを洩らした。

「おつるさんにはなほ更會ひたくなかつたんですの。よく斷つて呉れましたわね」

おかつはお時の手柄を褒めそやすやうにさう云つて、おつるの言つた事を訊糺した。新七が外に手頃な相談相手がないから、據なくおつる親子に縋つたことが、おかつにはよく察せられた。

時々窓を開けて富士を眺めたり汽車の煙を眺めたりしたが、午過ぎまで一歩も外へは踏出さないでゐたおかつは、お時一人が内職のやうにやつてゐる商賣のあまりに暇過ぎるのに氣づいて自分が店へ出て看板になつてやらうか、さうしたらもつと繁昌するだらうと醉興な空想を起してお時にその考へを洩らして、この商ひのことを訊ねた。

「品物がよく賣れゝば商賣は面白いものらしいわね。私もこの土地にゐて何か商賣をはじめようが知ら」と云つたりして價値のある者のなさうな見窄らしい商品棚を覗き見などしてゐたが、鐵道馬車の煽り立てた埃風に包まれて店頭に立つた客は、ふと見ると、勢ひのない顔した幸吉であつた。

「オヤ入らつしやいまし」と、お時は悦しさうに云つて迎へて、「汚いですけどもお二階へお上んなすつて」と、おかつにかはつて案内した。

お時が無沙汰のお詫などしてゐる間に、おかつは幸吉の落着かない素振や落着かない返事に注意してゐたが、お時に行かれた後で何と云つて話の口を切つていゝかと氣迷ひされて、一人でゐ

た間の決心も鈍つて、明るい光が眩しかつた。

「なにか御用が御座んしたらお呼びなすつて下さいまし」と、お時が座を外した後で、底深い沈默が二人の間に澱んでゐたが、

「私は緩くりしちやゐられないんだから、あなたの望みだけ早く云つて貰ひませう。あなたが此處にゐなさることは新七にも秘密にしてあるんだが、私に當ててあゝいふ手紙をたび〳〵寄越されちや非常に迷惑するんです。親戚の者を代りに來させても會つて貰へないから、私が責任を持つて來にくい所を無理に此方に來たんだから、そのつもりで話をして下さい」

「なぜそんなことを仰有るの？……私の心の中は分つてゐらつしやるくせに」おかつは相手の角張つた造り文句がいやになつて、笑ひをこぼしながら馴々しく云つて、「此間の晩公園でお目に掛つた時には大變お怒りなすつたけれど　私はあなたのお心の中はよく分つてゐますから、そんなに失望はいたしませんでしたの。本當に失望したなら、今まで生きてゐてこんな土地にウロ〳〵してはゐませんわ。……でも、よく訪ねて來て下すつたわね。煩く申上げた甲斐があつたと思つて悅しくつてなりませんの。……早く望みを云へと仰有つたつて、かうしてお目に掛ると口へ出してはなんにも云へないんですから勘忍して下さいましな。お互ひに心の中が分つてゐればそれでよろしいぢやありませんか」

おかつの媚びを含んだ眼差しは幸吉を戰かした。自分の破滅を恐れたやうに思はず後退りして

「あなたのやうな人こそ毒婦と云ふんだらう」と、聲を震はせて云つた。顏にも血の氣を失つた。「こんなことは自分一人で穩便に仕末しようと思つて、誰れにも云はないで昨夕は一晩中考へたくらゐなんだが、あなたの方で無理剛情に私の家庭を亂さうと思つてゐるんですか。私は家の者や世間に對しても迷惑するから、お時を呼んで立合つて貰つて、自分の潔白を明して置かう」と云つて座を立ちかけた。

おかつは引留めもしないで、夢でも見てゐるやうな目をしてぢつと見上げてゐた。

「お時さんなんかを證人にして、それであなたの潔白が通つて、この先何時までも安心してゐられるんでせうか」と、やがて、彼女でない誰れかが彼女の口を借りて云つてゐるやうな聲で、おかつは氣拔けのした顏して云つた。

立ちかけながら暫らく立上りもしないでゐた幸吉は、「私はもうこれきりあなたに會はないから

さう思つてゐて下さい。あなたは無論新七には會ひなさらんだらうが、あなたのためにもならやうに、相當な人を入れて話をつけることは承知しといて下さい」と云つたが、その言葉には力がなかつた。手應へがないので梯子段の方へ向ひながら躊躇してゐたがおかつは夢から醒めたやうな目を向けて、

「それで事が濟んだと思つてゐらつしやるの？。これからもお家の中が穩かで日が送れると思つてらつしやるの？。男の人は卑怯にしてれば世の中が仕合せになるんですかねえ。あなたは何が怖くてビク〳〵してゐらつしやるのか知れないけど、私に會はないと仰有るのなら、私これきりお目に掛りやしません」

「それであなたはこれからどうするんです？　此處にゐるんですか」

「私はこれから新七さんの家へ歸りますわ。私の荷物も置いてあるんですもの。新七さんは私が歸つて行きさへすれば昨夕からの心配は忘れて生返つたやうに喜ぶに極つてゐますわ」

おかつは愚圖々々してゐる幸吉を侮蔑した目で見ながら、梯子段から下を覗いて、「主婦さん。若旦那はお歸りになるんですつて」と叫んだ。

幸吉は逃げるやうに出て行つた。

おかつは暗くなつてから、二度と足踏みすまいと思つてゐた新七の假宅へ歸ることにしてゐたが、幸吉が行つた後間もなく、老婢が姿を見せて、せか〳〵息を吐きながらその後の新七の事を慌たゞしく知らせた。

「私と姉さんと相談づくでお家を出たやうに、旦那樣は思つてゐらつしやるんです。だから私が姉さんの行先を知つてゐるに違ひないつて、私をお責めなさるんですよ。云はなければ私をどんな酷い目にでも會はせて白狀させると思つてゐらつしやるんだから怖くつてなりません」

「ちや、正直にさう云つたらいゝぢやないの」と、おかつは事もなげに云つて、「私これから家へ歸るところなんですからね。心配しなくつてもいゝの」

老婢は呆氣に取られてゐた。やがて、新七の氣の立つてゐる所へ不用意に歸つて行く危險を說いたりしたが、

「大丈夫ですよ」と云つて、おかつは取上げなかつた。見たところは雪と墨とほどに美醜の差別はあつても、氣心は同じい幸吉と新七との顏を彼女は目の先に浮べて見詰めてゐた。

冷

涙

冷涙

一

牛込見附から電車に乗つた相川信也は、可成り込合つてゐた座席に割込んで腰を掛けると、直ぐに腕を拱いて目を瞑つた。そして埃臭い生温かい風に、汗ばんだ顔を吹かれながら、周圍の騒音人語は耳にも留めないで、暫く苦しい假睡に入つてゐたが、赤阪見附まで來た時に、ふと、釣革にぶら下つてゐた老婆の下駄で足の甲を踏付けられたので、吃驚して目を醒ました。

「たまに東京へ出て來ると、彼方でも此方でも散々な目に會はされる」

彼は顔を顰めて、踏んだ奴を睨み返しながらさう思つたが、その時ふと、その老婆に姿を遮られてゐる向う側の乘客の白い手首だけが見えるのが、妙に彼れの目を惹いた。洋傘の柄を握つてゐるその女の手は、身體全體の肉付の豐かさと皮膚の滑かさとを思はせるやうな手であつた。

邪魔者の老婆が動いた時にちらと見えた横顔は、見覺えのある顔らしかつたので、さらでも興

味を寄せてゐた相川は、頭を動かして隙間から無理にも向うを覗いた。

「あゝおきくさんか」彼れは、十年前まだ學生であつたころ懇意にしてゐて、その後は一度も相見る機會のなかつた河本の娘を、久振りに強く心に浮べた。十年の年月は女の顔形にもあらはれてゐたが、不思議にもその顔は昔よりも生々として派手になつてゐた。最初の夫とは結婚後間もなく不縁になつて、數年の後にある官吏の家へ再婚したと聞いてゐるが、多分幸福に暮してゐるのであらうなどと推察されるにつけても、彼れは、自分の今の境涯の淋しさに思ひ及んだ。十年前に自分がもつと大膽であつて、女性戀ひしい思ひにもつと熱を帶びてゐたなら、そこにゐるおきくさんを他人の手に渡すやうな頓間なことはしないで濟んだのだがと、今まで感じたことのなかつた悔恨の思ひも自ら浮んで來た。

先方では氣がつかないのか、老婆といふ牆壁が取れても目を外へ向けてゐたが、相川は暫く聲は掛けないで、その姿を愛翫しながら自分の空想に耽つてゐた。

さうしてゐる間に電車は終點の新橋まで來た。相川は先きに立つて車臺を下りて、おきくが自分の前を通るのを待合せて聲を掛けた。

「相川さん」と、おきくは自分で疑つてゐるやうに云つて相手を見据ゑたが「あなたが默つてゐらつしやればお見外れしたかも知れませんよ。大變お變んなさいましたわね。この頃は何方にゐらつしやいますの」と、落着いた言葉で云つた。そして、電車の中では茫然としてゐた彼女の眼も、云ひやうのない懷かしみのある媚びを含んだ。

「暫く東京にはゐなかつたんです。この後も此方に住めるかどうだか分らないんですがね」と、相川は淋しい笑ひを洩らしながら云つた。先日來何處へ行つても誰れに會つても、物足らない思ひばかりしつゞけて來た彼れは、せめてこの昔馴染に向つて、自分の身の上話でも緩くり聞いて貰ひたくなつて、「僕も今は一人ぼつちで浮浪人のやうに暮してゐるんですよ。喰つたり飲んだりに不自由してる譯ぢやないが、この四五年は隨分變挺な生活を續けて來ました」と云つて、おきくの行先を訊ねて、銀座の方へ向つて一緒に歩き出した。相川自身は新橋から汽車に乘る筈であつたのだが、それは一列車遲らせてもよかつたので、買物に假托けておきくと同じ道を採つた。

おきぐは兩親の事や昔の知人の事などを、親しみをもつた口調で告知らせたが、自分の事については曖昧に話して、相川の立入つた問ひには答へなかつた。住所をも明かさなかつた。そして、

資生堂の角まで來ると、俄かに別れを告げて道を外らしてしまつた。

相川は名殘惜しい思ひをして、女の後姿を見送つてゐたが、姿が横町へ入つて見えなくなると我れに返つて苦笑した。

「おれをまいたな。しかし無理もないや。堅氣の妻君がおれのやうな男と一緒に歩いてゐる譯にや行くまいからな。……何かいゝ事がおれを待つてゐるやうに己惚れて、わざ〳〵東京へ出て來たのが馬鹿だつたのだ。當分穴の中へすつ込んでゐるのが、おれ相應の運命なのだらう」

彼れは詰らん道草を喰つたことを後悔しながら、停車場の方へ急いだ。そして、豫定の列車に乘込むと、今度は傍見などしないで堅く目を閉ぢてグッスリ寢入つた。國府津近くなると、ひとりでに目が醒めたが、長い日も暮れかゞつてゐて富士は紫色してゐた。涼しい爽かな夕風が窓から窓を流れてゐた。

小田原の寓居に着いた時には、下女の役をも勤めてゐる書生の白瀧が、風呂の湯を沸かして待つてゐた。

「それは有難い。東京をうろついてゐると埃だらけになるから溜らないよ」

相川は直ぐに風呂へ入つていゝ氣持になつて、留守中の出來事を白瀧に訊ねたが、主從二人きりの家だから、さして報告に價するほどの事件が主人の二三日間の留守中に起らう筈はなかつたので、白瀧は主人の問ひに答へるよりも、自分の方から東京の事を何くれとなく訊ねた。

「東京へ行つても騷々しいばかりで、面白いことつて何もありやしないよ。僕は當分此處に落着いてゐるつもりだが、君もつゞいて此處に辛抱してゐて呉れるだらうね」

相川は快い返事を待設けながらさう云つたが、

「成べくさうしてゐたいんですが」と、白瀧は言淀んだ。

「差支があるのかい。君がゐて呉れなければ、僕の計劃も破壞されるんだよ」

「實は今朝友人から手紙が來たんです。私にいゝ職業がありさうだから至急やつて來いと云ふんで、私も一日考へてゐましたのです」

「さうかい。君の出世の道の邪魔をする譯には行かないね」

相川はさう云つたゞけで口を閉ぢて、目も瞑つて、座禪でもしてゐるやうな形で、湯の中にぢつと漬つてゐた。自分でさへいゝ事が待つてゐるやうな氣がして、動もすると東京へ出て行きた

がるのだから、白瀧のやうな青年が永くこんな所にぢつとしてゐられないのは當然だと同情はされたが、しかし、この青年を手離すのは惜しかつた。自分の家庭の秘密をも知つてゐて、葛藤があつた。時には屢々自分のために力を盡くして呉れた白瀧をば、通り一片の寄食者あつかひは出來なかつた。白瀧と一緒にゐればこそ、淋しい穴籠にも堪へられたのだけれど、外の書生や下女を雇つたのでは、一日もこんな所に我慢してゐられさうではなかつた。

「先生、お酒はどうしませう」と、白瀧は臺所の方から大聲で訊いた。

「さうだな。……一杯やることにするかな」

相川はさして飲める方ではなかつたが、淋しい生活に色をつけるために、書生を相手に時々晩酌をやつてゐるのであつた。風呂から出ると、浴衣に着替えて、縁側の安樂椅子に腰を掛けて、其處からは目には見えない海の方から吹いて來る涼しい夕風を喜んでゐたが、すると、後から風呂に入りかけてゐた白瀧が、帶を解いたまゝで半身を茶の間の戸口から現はして、

「先生、湯殿の中にこんなものが落ちてゐました」と、褪せてはゐるが金色をした小さな十字架を持つて、不思議さうに云つた。

「あ、さうか」と、相川は事もなげに云つたが、極りの悪い思ひをして、自分で立つて行つてそれを受取つて、座敷の鞄の中へ收めた。こればかりは白瀧にも知らせてゐなかつた秘密の品だつたのにと、おのれの不用意を悔いた。この頃どこへでも出る時には、この十字架を身の守りとして首へ懸けて出るので、それを贈つて呉れた人の外には誰れにも見られも知られもしてゐなかつたのだが、今日は頭が疲れてゐたゝめに浮かり湯殿に置忘れたのであつた。

やがて風呂から上つて來た白瀧は、食卓を出して、鰺の鹽燒に奈良漬といふ簡單な副食物を並べて主人を招いた。そして酒の相手をしながら、

「あの十字架はどうなすつたのです?」と訊ねた。

「妙な物を君に見つけられたね」と、相川は照隠しにニヤ〳〵笑つてゐた。

「先生は耶蘇教信者になつてゐらつしやるんですか」

「さういふ譯ぢやないがね。これにはいろ〳〵な因縁があるのさ。最初持つてた者から三度目に僕の手に渡つた譯なのだが、最初の所有者が男でその次が女で、それから僕といふ順番なのだから面白いだらう。……今度は誰れの手に渡るだらうかな」

「さう仰有れば、私にも見當がつきますが、先生は何故何時までもそんな不吉なものを肌身離さず持つてゐらつしやるんでせう。天主教の信者でなければ十字架なんぞを有難がるには及ばないぢやありませんか」

さう云つた白瀧の語調は穩かだつたけれど、相川の胸には痛いところへ觸れたやうに響いた。

「一概に不吉とは云はれまいよ。誰れに貰つたにしろ、十字架は昔から尊重すべきものになつてゐるんだからね。佛教信者でなくたつて、佛像を見てゐると俗氣がなくなるやうなもので、十字架を持つてりや、いくらか心が奇麗になる譯さ」

「理窟はさうですが、あの十字架にはどんな思ひが籠つてゐか知れませんね」と、白瀧はいよいよ眞面目になつて卒直に、

「先生が何時までもさういふ者に祟られてゐらつしやるんなら、私も考へなければならんと思ひますよ。先生のこの頃の御樣子で多少察してはゐましたが、あの十字架のために大事な生命を蝕まれてゐらつしやるのなら、私も先生を離れて東京へ行く譯には行かないだらうと思ひます」

「あゝさうか……」と、相川は安心したやうに顏を綻ばせて、「君は見當違ひしてゐるんだ。まつ子の事なら、あれつきり僕の念頭に何も殘つてやしないよ。それは斷言するよ。四五年の間夫婦として一緒に暮して來た女だから、猫の子を棄てるやうに簡單には行かない。別れ際には多少の悶着があつたのは當り前さ。だけど、僕はあの女に對してはちつとも未練を殘してやしない。別れたことを一度も後悔したことはないよ。それだけは君も安心してゐたまへ」

「さうですか」白瀧はまだ半信半疑であつたが、「あの方のことは兎に角、先生も今度は一生苦樂を共になさるやうな奥樣をお貰ひなさるといゝんですね。溫かい平和な家庭をおつくりになつたら、どういふ事業をなさるにしても張合ひがつくんぢやないでせうか」

「君の忠告は尤もだが、緣といふものは思ふやうには行かないものだよ。……しかし、君は僕の經歷をいゝ見せしめにして最初の結婚に注意するやうにしたまへ」

相川は靜かにさう云つて、その話を收めたが、心の動搖は暫く靜まらないで、酒の味が苦かつた。飯の味もまづかつた。で、例なら食事が終つてからも、暫く座を立たないで無駄話に耽るのだが、今夜は箸を擱くとともに食卓を離れて、緣側の安樂椅子へ急いだ。月の光が庭先を照らしてゐた。その淡い光に誘はれたやうに、彼れは六本木のある家を思ひ出した。

「あなたにこれを差上げますから、私の心の徽號だと思つて大切に持つてゐて下さいましな」と云つて、彼女は手づから彼れの首へあの十字架を掛けたのであつた。

「私の眞心はこの十字架と一緒にあなたにお預けして、私はこれからは惡魔の仲間入りをしたやうな氣で、眞心のない女として生きて行くのです。……だつて爲樣がないぢやありませんか。私は母や弟妹を大勢養つて行かなければならないんですもの。皆んなが唯一人の手賴りにしてゐた兄には不意に死なれますし、永い間戀焦れてゐたあなたに心を打明ける機會が來た時には、あなたにはちやんとした奥樣が出來てゐるんですから、私の運は順當に行かないことに極つてゐますわ。……たとへあなたがどんないゝことを私に聞かせて下すつたにしても、今日の私は昨日までの津村かよ子ぢや御座いませんから、全く駄目なんですの。尊い魂を惡魔に賣りつけた後ですから」

さう云つた彼女の聲は哀れけに響いたが、その顏は艶々として生氣が溢れてゐた。魂の抜出た殘骸のやうではなかつた。「殘骸どころか、かよ子はあの時樂しい世界へ踏込まうとして身體中が希望に滿ちてゐたのかも知れない。そして、自分の希望に興を添へるために、おれに對してわざとセンチメンタルなことを云つて見たのかも知れない」と、相川は何時もかよ子を思ひ出すたびに感ずることを感じて、自分のお目出度さ心弱さを悔いた。

「父親在世の時分に婚約のあつた秋山といふ男に破約されてから、男を信じなくなつて、一生神に仕へて獨身で過ごすとかよ子の云つてゐたのを眞に受けて、美しい姿が木伊乃になるのを惜しみながら、長い間潛めてゐた自分の思ひはつひに打明けなかつたのであつたが、彼女の本心の知れかゝつた時には、自分はすでにあの碌でもない妻を迎へてゐて、彼女はあの年齡を取つた金持の瀨川の所へ後妻として緣づくことに定つてゐたのであつた」

「おれは何故早くから、胸に思つてゐることを、この女に向つて明らさまに云はなかつたのだらう？……いや、あの晩にでも身を棄てる氣で、もつと大膽に熱心になればよかつたのだ。……母や弟妹の養育くらゐは、自分が引受けて充分にしてやると斷言したつて構はなかつたのを、眞面目に責任を考過ぎて、それさへ口に出しかねて、蔭からあなたの幸福を祈つてゐようなんて、氣取つた臺詞を云つたりして、詰らない別れ方をしたものだ」

「あの夜から、家の中が一層面白くなくなりだした。女房の顔が一層悪相に見えて、野卑でヒステリー染みた女房の舉動が一層忌々しく思はれだした。あの晩にかよ子が芝居じみた事を云つて十字架なんぞを吳れたりしなかつたならば、おれたちの夫婦仲もあれほど險惡にはならなかつたかも知れない」

「年賀とか暑中見舞とかの折々の手紙に、思はせ振りの文句で、自分の境遇を誇るやうなことを書いたり、自分の心の淋しさを訴へて相手の心を咬るやうなことを書いたりしてゐるのが、マリアの繪像の前に跪いて祈願を籠めてゐた昔のかよ子とはどうしても思はれない」

相川はこんな事を暫く思ひ續けてゐたが、心の中で戀ひしてゐたゞけの女を何時までも有難がつてゐるのを年甲斐もない愚かなことゝ感じないではなかつた。今日電車で出會つたおきくさんといひ、かよ子といひ、自分が取逃した女の事ばかりに拘はつてゐるのは、自分ながら張合ひがないやうに思はれないではなかつたが、でも、譯を話したら白瀧にさへ嗤はれさうな十字架を無雜作に抛棄てる氣にはなれなかつた。

ヒステリーで煩かつた痩せつぽちのまつ子を、やうやく追拂つた後では、清々した氣持で、久しく停滯してゐた著述の筆を進めようと企てゝ參考書をも集めてゐるのであつたが、孤獨になつた後の心の空虛には、何時の間にか、かよ子などの姿が入つて來て、專念一意に仕事に身を入れようとする彼れを妨げてゐた。

「今夜は疲れてゐるから早く寢よう。手がすいたら床を延べといて吳れたまへ」と、食事の跡片付をしてゐる白瀧に呼附けて、相川は庭へ下りて、裏口から海岸の方へフラ〳〵出て行つたが、先日まで雨戸の濟されてゐたある別莊の二階に燈火の點いてゐるのがふと彼れの目を惹いた。

これから避暑客がやつて來　賑かになるのだと思ひながら、何氣なくその二階を見上げてゐると、

「先生お客樣です」と、直ぐ後ろで白瀧の呼掛ける聲がした。

「誰れだい。今夜は人に會ふのは大儀なのだが」

相川はこの土地の知合ひの者が遊びに來たのだらうと思つてさう云つた。

「お客樣は東京からわざ〳〵お出でになつたんださうです」と云つて、白瀧は意味ありげに主人の顏に目を留めながら、名刺を渡して、「入江良治といふ方なんですが、お會ひになりますか」

「良治が何しに來たんだらう」相川は不愉快さうに月の光でちよつと名刺を見て、「會はん譯には行くまいが、今日はよくよく運の惡い日だよ」と云つて、白瀧と並んで家の方へ歩きながら、

「君はまだ會つたことはないだらうが、この男はまつ子の從兄なのだ。二三年前から九州へ行つて新聞記者をしてゐんで僕は長い間手紙の遣取りさへしたことはなかつたのだが、何しに訪ねて來たのだらう」

「無論奥さんの身の上に關係した御用なんでせうが、先生は聢りした口をお利きにならなきやいけませんね」

「聢りも何もないさ。兩親も納得した上の離緣だもの。今更餘計な文句は云ふ必要も聞く必要もないぢやないか」

「此方ではさう思つてゐても、先方ではどんな言掛りをつけないとも限りませんからね」

白瀧の方が却つ　相川にもましてまつ子を嫌ひ憎んでゐて、主人の前途の幸福のためにも、彼女の復緣を飽くまでも妨げようとしてゐるのであつた。

家へ歸ると、折角延べて置いた寢床を片付けて、座敷へ客を通したが、客の入江は快活な聲でこの住居を褒めなどして入つて來た。そして、坐るや否や、自分が社用で上京した次第を話して、

「久振りに東京へ出て來ると、自分が田舍者になつてゐることに氣がつきますよ。何處へ行つても以前とは樣子が變つてゐるので間誤つきましてね」と、隔意なく落着拂つて世間話をしだした。

相川はいゝ加減に合槌を打つてゐたが、今に肝心な用談が持出されて、止むを得ずいやな口を利かなければならないのだと思ふと、入江と差向ひで坐つてゐるのが苦しくつてならなかつた。

「實は今日十二時過ぎに三井さんの家へ寄つたのですが、先つきあなたがお出でになつたと聞いて、非常に殘念に思つたのでした。」

まつ子との結婚の時に仲人役を勤めた三井の名前が客の口から出たので、相川は胸を騷がせた。足休めのつもりで三井の家へ何氣なく立寄つたことが後悔された。

「彼家へも暫らく御無沙汰してゐたから、東京へ行つた次手に、ちよつと顏出ししたのですが、彼家はます〳〵景氣がよさうですね」と空々しく云ふと、

「東京ではどの家を訪ねても景氣がよさゝうですよ」と云つて、入江は鎖を手繰つて金時計を出して見て、獨言のやうに汽車の時間のことを云つた後で、「實は三井さんからあなたの事を承つた

ので、急に此方へお伺ひする氣になつたのですが、まつ子があんまり我儘なものですから、あなたに御迷惑を掛けたさうで、私も報知のあつた時に非常に殘念に思ひましたのです。此方のやうな御家庭で婦人としての職務が盡くせんやうぢや、あれも一生駄目です」

「……いや誰れが悪いといふのでもありますまい。……いはゞ緣がなかつたのですね」

「さう思つて諦めるより外は御座いませんが、まつ子もこの頃は心底から後悔してゐるやうです。私は上京後忙しくつて親類や舊友をゆつくり訪問する暇はなかつたのですが、昨日些し暇が出來たので東片町へ行つて、まつ子にも會ひました。見違へるやうに窶れてゐましたから、私も露骨に叱りつけることは出來ませんでしたが、話してゐる間に私の非難は素直に受入れたやうでした。久振りに會つたのですから、私が懷かしかつたと見えて、以前のまつ子のやうに無邪氣に腹の中のことを打明けましたが、さうなると、私も多少不憫になつて來るんです。こんなことならもつと早く私に知らせて呉れゝば、及ばずながら一臂の力を貸してやるのだつたのにと、無駄な愚痴も出た譯なのですが、それについてまつ子が一生に一度のお願ひがあるが聞いてくれないかと私に歎願しました。……どうかして、一度だけあなたにお目に掛かれるやうに取計らつて呉れと云ふんです。……外の事なら何でも賴まれてやるが、それだけは困る。今更そんなことが相川さんに云へた義理ぢやないと一應は跳ねつけたのですが、よく訊いて見ると、自分の氣紛れからそんな無理をお願ひするんぢやなさゝうです。……生きてゐる間にまつ子の口からあなたにお話して置かなければならない重要な事が一つあるんださうです。あなたに取つて重大な事なのだから、それをお知らせしなければ心が咎めて夜も眠れないと云つてゐるのです。人の口を借りたり手紙に書いたりする譯には行かないことなのだから、是非お會ひして、自分の口から直接にお話しなければならない。十分間でも二十分間でも用は足りるんだから、無理にもお願ひして呉れと云つてゐますのですが。……いかゞでせう。聞いて頂けますまいか。お目に掛る場所は、三井さんのお宅なり此方なり、あゐひは私の宿でも、あなたの御都合のよろしい所に極めることにして、まつ子は私が連れてまゐりまして、決して御迷惑は掛けんやうに注意するつもりで御座いますが」

「しかし不思議ですね。そんなにしてまで聞いて置かなければならんやうな重要な事件があらうとは、どうしても思はれませんよ」相川は思ひ當るところはなかつたが、多少の不安を感じない譯には行かなかつたので、「何しろ私が會ふといふのも變なものですから、私の家の書生を代人に

したらどうでせう。家族同樣にしてゐる男で、私どもの内輪の事もよく知つてゐるのでして、この男にならどんな秘密な話を聞かせても差支へはないんです」と云つたが、入江は代人を受入れなかつた。

「代人で用が足りるくらゐでしたら、私が中間に立つて話のお取次をした方が手つ取り早くてよろしい譯なのですが、まつ子は他の事は私には何でも打明けますのに、それだけはどうしても云はれないと云つてゐるのですから」

入江は、誠意を籠めたまつ子の願ひだから、一兩日の中にその願ひを叶へてやつて呉れ、此方の宿屋へ彼女を連れて來てもいゝからと、押强く迫つた。

忙しい時間を割いてわざ〳〵訪ねて來た入江の賴みを相川は無下に斥けかねたが、しかし、即座の承諾をする氣にはなれなかつたので、

「私も近日また東京へ行きますから、その時都合によつて會ふことにしませう。あなたが九州へお歸りになつた後だつたら、三井君に間に立つて貰つて會へば會へんことはないんですから」と、一時免れの返事をしたが、入江は飽くまでも自分の滯在中にこの事を果したいと言張つた。

「三井さんには一切秘密にしときたいとまつ子が望んでゐますのです。私がかういふお願ひをしに此方へ伺つたことも、兩親はじめ身内の誰れにも絶對に知らせてゐないくらゐなので、まつ子の外出も、私が甘く口實をつくつて連出しでもしなければ、容易に出來ないのですから」

「しかし、兩親にさへ秘密にして會つたりしちや、後で知れた時に、私が困ることになると思はれますが」

「いや、そのことなら私が生命に掛けても責任を負ひますよ。……どうも、まつ子があなたにお話して置きたいと思つてることは、あなたの御一身に取つては、容易ならぬ重大な事件らしいんです。あなたにお目に掛りたいための口實でないことは私が保證いたします。……兎に角四年も五年もの間夫として仕へた人の身の上の大事件だから打遣つては置けないと、當人が眞劍になつていつてゐることだけは事實なのですから、その心持はあなたにも酌取つて頂きたいんです」

「……ぢや、あなたのお顔を立てるために、成べく會ふことにしませう」

相川は不承々々にさう云つたが、入江は承諾を得たのを喜んで、明日の日にもまつ子を小田原へ連れて來る約束をした。相川は氣が進まぬながらも相手の云ふまゝにしてゐた。

訪問の目的を果すと、入江は直ぐに暇を告げたが、先つきから襖越しに耳を欹てゝゐた白瀧は客を見送つた後で茫然として玄關に突立つてゐる相川に向つて、

「先生はなぜ御承知なすつたんです？」と責詰るやうに云つた。

「あゝまで熱心に歎願されゝば、止むを得ないさ。どうにかなるだらう」

「先方で先生の身の上の大事件を握つてゐるといふのが、私には本當らしく思はれませんですよ。變ぢやありませんか。むしろ、明日お會ひになることそのことが、先生のための容易ならぬ大事件で、豫じめ注意すべき大きな災難ぢやないでせうか」

「あるひはさうかも知れない」

相川は口輕く答へて安樂椅子に凭れて考込んだ。一生にまたと顏を見ようとは豫期されなかつたまつ子に些つとでも會ふのかと思ふと、云ひやうのない不快が感ぜられて、眠氣差してゐた眼も惡く冴えて、まつ子に關係したいろ〳〵な記憶が取留めもなく胸に浮んだ。そして自分の氣付かない重要な事件を、あるひは彼が女知つてゐるのぢやないかと、ふと疑はれだした。……聞いて置くのが自分のためにいゝのぢやないかと思はれたりした。「豫知されない災難が自分の身に落

ちて來さうに、先日來から稍々もすると氣遣はれてゐたが、蟲が知らせたのかも知れない」

彼れは不安を感ずるにつれて、厄除けとして十字架のことを念頭に浮べた。かよ子の面影が今夜はことに懷しく偲ばれだした。氣を紛らすために、白瀧に向つて、海岸の別莊の開いたことを話すと、

「彼家には昨日から人が入つてゐますが、若夫婦と女中とだけのやうですね。しかし妻君は服裝は立派だが顏は綺麗ぢやありません」と、白瀧は明快な答へをした。

「君が女の容色を褒めた例はないんだから」

「いや、私は第三者として何時も公平な批評をしてゐるつもりですよ」

「どうだかな」相川はふと思ひついて、「ぢや、君に女の品評をさせて見ようか。用箪笥の上の引出を持つて來てくれたまへ」

彼れは白瀧の持つて來た引出から、寫眞入れの小箱を取出して、その中から若い女の寫眞だけ數枚を撰んで前へ置いた。白瀧の知つてゐる女もあるし、知らない女もあつた。

白瀧は一つ二つ取上げては皮肉な批評を下してゐたが、やがて、「これはどうだね」と、相川が

目を据ゑて云つたかよ子の寫眞に目をうつすと同時に、吃驚した顔をして、

「先生はこの人と御戀意なのですか」と訊ねた。

「君は知つてゐるのかい」

「えゝ、會つたことがあります。今年の春先生の御用で村岡さんのお宅へ伺つた時でした。來客があるから待つて居れと云はれたので、書生部屋へ入つて、西田君と話をしてゐたのですが、その時西田君が、今美人が來て大將を惱ましてゐるんだと云ひましたから、好奇心を起して歸りがけを覗いて見たんです。その女が確かにこの人だつたのです。……寫眞よりも實物の方がもつと綺麗でしたが、先生もこの人を御存じなのですか」

容易に笑貌を認めたことのない白瀧にさへ美しく見えたのかと思ふと、相川はかよ子に對して一層の懷かしさ戀ひしさを覺えて、

「村岡を惱ましたつてどんなことなんだらう？」と努めて平靜を裝つて訊ねた。かよ子が村岡と知合ひであるといふことも、彼れには初耳であつた。

二

「村岡さんは昔その美人の御亭主に學資の補助を受けたことがあるんださうです。今でも時々物質上の世話になつてゐるんで、さういふ關係からその家の內輪の事にも立入つて口を利くやうになつてゐるんですが、この頃この美人夫婦の仲が面白くないので、村岡さんもその渦中に入れられて困つてゐるんださうです」

白瀧は詳しい事情は知らなかつた。村岡が自分の恩人である其家の主人の味方になつてゐるのに、妻君は不平を抱いて、この頃屢々事情を訴へに來て、激しい口も利いて、村岡を手古摺せてゐることを、書生の西田に聞いてゐるに過ぎなかつた。

相川は熱心に訊返しても、それ以上の消息が聞かれないので、痒いところへ手の屆かないやうな牴悟しさを感じたが、しかし、瀨川夫婦の家庭が圓滿でないといふことは、それだけで興味ある昂奮を彼の心に惹起させたのであつた。すでに三年あまりも出會ふ機會のなかつたかよ子の顏を見て、その後の話を聞いたり聞かせたりする時が、近いうちにありさうに思はれた。ことに彼

女を懐かしく思ひ出してゐた今夜、たとへ一言でも、彼女の身の上に關はつた噂を聞くことが出來たのは、暗夜に意外な燈火を見たくらゐな頼もしい氣持がした。

「今日は頭も身體も疲れた。明日は明日のことにして、今夜はよく眠らなければならん」

相川は一度片付けさせた寢床を、今度は自分の手で延べて、枕に就いたが、入江の訪問やかよ子の噂から受けた刺戟のために、容易に快い眠りを得られなかつた。眠苦しいあまりに、まつ子が知らせるといふ重大事件がまた〳〵暗い色で包まれて彼れの空想を惱ましだした。一度疑つたことがあるやうに、まつ子に不貞な所行があつたにしろ、離緣してゐる今では最早問題にするに及ばない譯であるし、またまつ子が身分不相應な濫費をして彼方此方の知人に借金をしてゐたにしろ、それは離緣當時に大抵極りがついてゐるので、その後何處からも催促を受けたことはないのだから、秘密の負債が殘つてゐようとは思はれない。……では何だらう。……どちらかといへば小膽で用心深い世渡りをして來た自分には、他人に深い怨みを受けてゐる覺えはないし、法律の網にかゝるやうな罪は無論犯してゐる氣遣ひはない。

かういふ風に彼れは、所謂重大事件についての恐れを否定しながらも、豫知されない災難が自分の身に落ちかゝつて來さうな無氣味な思ひを拂退けることは出來なかつた。まつ子に會ふのは不愉快だが、しかし、不愉快を忍んでも、その重大事件の本體を知つて置かなければ安心が出來ないやうに思はれた。

彼れはふと起上つて、臺所へ頭を洗ひに出掛けたが、書生部屋の方を顧みると、白瀧はまだ起きてゐて、書物や衣類を行李の中へ收めてゐた。

「君は荷造りをしてゐるんかい。急に東京へ行く氣になつたのかい」と相川は驚きながら書生部屋の前に足を留めた。

白瀧はドギマギしながら、「成べく明日の中に東京へ行つて樣子を見て來ようかと思ひまして」

「しかし、さう早く荷物まで持出さなくてもいゝぢやないか。出拔けに君に出て行かれると、僕も途方に暮れる譯だからね。」

「それは、先生が後で不自由な思ひをなさることは私も察してはゐるんですが、友人の手紙によると、かういふ機會を取外しちや、將來私の浮ぶ瀨もないやうに思はれてならないのですから」

「君が是非此家を出ようといふのを强ひて止めることは出來ないが、せめて二三日でも延ばして

貰ふ譯には行かないものかね。何しろ明日は、今夜來た客がまつ子を連れて來るかも知れないのだから」

「あの方にはお會ひにならない方がよろしいぢやありませんか」

白瀧はさう云つたが、その忠告も宵のうちほど熱心ではなかつた。そして主人から顏を背けて荷物の整理に拘はつてゐた。

「ぢや、僕もいよ〳〵一人ぼつちか」

相川は力なく云つて、水瓶の生ぬるい水で顏と頭とを洗つて自分の寢床へ戻つたが、神經はますく冴えて、書生部屋の微かな物音も耳に響いた。荷造りをしてしまつたのか、白瀧はやがて電氣を消して寢床に就いたやうであつたが、相川はなほ暫らく闇の中で目を開けたり閉ぢたりしてゐた。——ふと十字架の形が金色に光つて闇を照らしたかと思ふと、そこへ白瀧が險惡な相をして入つて來て、反抗の態度を示した。搭闘が暫らく續けられたが、しまひには、相川は喉を締められて息の根が止まりさうになつた。

夢から醒めても、相川は暫らく夢の中の白瀧の惡相を忘れることが出來なかつた。いつも穩かな顏をしてゐる忠實な白瀧が、夢の中とはいへ、なぜあんな風に現はれて來たのであらうと不思議に思はれた。

明け方になつてグッスリ眠込んで、正午近くにもなつてやうやく目を醒ましたが、白瀧は家の中から庭まで綺麗に掃除をして、水瓶にも水を一杯汲んでゐた。初夏の日はキラ〳〵と照りつけてゐたが、海の方から吹いて來る風は清々しかつた。相川は朝と正午とを兼ねた食事を採りながら、緣側で新聞を讀んでゐる白瀧に向つて、朦朧として頭に殘つてゐる昨夕の夢の話をして、

「夢にも多少根據があるものだが、昨夕のは突飛で可笑いよ。尤も君が僕を棄てゝ行くのがさういふ風に感ぜられたのかも知れないがね」と云つて笑ふと、

「だけど、私は腕力でも先生には適ひませんよ」と、白瀧も笑つた。

「いや、僕もこの頃は非常に衰へてゐるよ。眠付が惡かつたり變な夢を見たりするやうぢや人間も駄目だね」と云つて、相川は、改めて白瀧の決心を訊ねて、成べくなら引留めようとしたが、白瀧は平生の彼れとは思へないほどに剛情に我意を徹さうとした。本人の都合の如何に關はらず、一刻も早く此處を立たうとした。

「ぢや仕方がない。君の望み通りにしたまへ。そして、東京へ行つても若しも思はしいことがないやうだつたら、何時でも僕の所へ歸つて來たまへ」と云つて、相川は諦める外はなかつた。あたりまへなら、一酌を催して別れを告げるのだが相手が心を外らしてソハ〳〵してゐるのを見ると、張合ひがなくなつて、その事は口にも出さなかつた。しかし、持合せの金の中から可成りの金額を包んで、多年の勞に酬ゐることにした。

「また御厄介になるかも知れませんが、一先づお暇を頂くことにいたします」と、白瀧が挨拶して、荷物を肩に掛けて出て行くのを、相川は呆氣に取られて見てゐた。

「なんだか狐にでも抓まれたやうだ。昨日から今日へ掛けて、意外なことばかり起つて來る。もつと重大な意外な事件が鐵の槌のやうな力を持つて、ドシンとおれの頭の上に落ちて來るのではなからうか」と、彼れはまつ子の來訪を恐れをもつて期待しながら、緣側の安樂椅子に身を凭らせて涼風に吹かれてゐた。

机に向ふ氣にはなれないので、何もしないで、寢たり起きたりして一日を過した。自分で食事ごしらえするのは臆劫だつたので、蕎麥を取つて晩餐を濟ました。不快を感じながらも、絶えず心待ちにされてゐたまつ子が來ないうちに、長い日も暮れてしまつた。わざ〳〵訪ねて來た入江の約束が反古になる譯はないがと、相川は善でも惡でも極りのつかないのを次第に低悟しく思ひながら淋しい夜を過してゐた。白瀧のゐないのが、生活の上に不便なばかりではない、心を知合つてゐた相手に離れられた後の心の空虛が、次第に悲しく思はれてゐた。彼れは空つぽになつた書生部屋へ入つて、そこへ寢そべつたりした。

「しかし、合點が行かない。いくら友人の手紙に誘はれて東京行を急いだにしろ、あんなにアタフタと出掛けなくつてもよさゝうに思はれる」と、ひとりで疑ひを強めてゐると、彼れと白瀧とに關係した過去の雜多な記憶が叢つて來て、疑念は留め度なく縱橫に動いた。まつ子の言ふ重大事件が、あるひは白瀧に關係があるのぢやないかと、ふと疑はれだして、その疑ひを凝視するやうにさへなつた。

凝視して徒らに腦を痛めてゐるところへ、靴の音が家の前に留まつた。相川はさてはと察して弛んでゐた帶を引締めて玄關へ出たが、入つて來たのは果して入江であつた。

「大變遲くなりましたが、今夜は此地で一泊することにしてまつ子を連れてまゐりました。相模

屋といふ家に宿を取ることにしました。あまり遲いから、明日の朝にでもお目に掛ることにしたいと思つてゐますが、あなたの御都合はいかゞでせう」と、入江は謙つた態度を見せた。

「どうせ會はなければならないものなら、僕の方は今夜でも構ひません。早く義務を果した方が結句都合がいゝんです。」

「私ども丶無論早く責任を果した方がよろしいんですから、ぢや、今夜のうちに會つて頂くことに致しませう。……あなたに宿屋へ來て頂くのは失禮のやうにも思はれますが」

「それよりも此家へ連れてお出でなさい。この書生部屋で會ふことにしますから」

相川は無雜作にさう云つた。離別した妻を自分の家へ入れるのは變だとは思はれたが、會ふことそのことがすでに夢見たいな變なことなのだから、場所なんぞどうでもいゝやうな氣がしたのであつた。

入江は相川の打解けた態度を喜んで、直ぐ連れて來る約束をして出て行つた。

後で相川は、火を熾して湯沸しを掛けて、お茶の出せる用意をして待つてゐた。最後に見たまつ子の青褪めたギスノ〳〵した無氣味な顔が、どうしても親みを寄せられないやうに目の前に立つて、今夜久振りで見る彼女の顔の見窄らしさを豫想させた。こちらがまだ獨り生活をしてゐるのを幸ひに、まつ子を復緣させようと入江などが企てゝ、こんな運びをつけたのではあるまいかとも疑はれて、會つてからの面倒さが氣に掛りだした。こんな時に手賴りになる筈の白瀧が、無理無體に出て行つたのが怨めしくなつた。

靜かに戸が開いて、二人の姿が薄暗い土間に現はれたのは餘程經つてからであつた。「今日は東京は非常に暑かつたですよ。今年は梅雨があまり降らないから暑さが早いやうですね」などゝ、入江は無駄口を利きながら靴を脫いで玄關へ上つて、目顏でまつ子を誘つた。相川はまつ子の方は見ないやうにして、書生部屋へ導いた（自分の書齋であり寢室である座敷は彼女に見せたくはなかつたから）

「今日書生に暇をやつて、僕一人でゐるんです」と言譯をして、「なるべくなら君にも列席を願ひたいんですが、それがいけなければ、君だけ座敷の方へ行つて待つてゐて下さい」

「些しの間、私は座を外させて頂きませう」

入江は豫めまつ子と打合せをしてゐたのか、一通りの挨拶を濟ますと、直ぐに座を立つて緣側

を出て、穿物を見つけると庭へ下りたが、二人のゐる方をを り〳〵顧みながら耳を澄ましてゐた。

「重大事件といつてどんなことなのだい」

相川は、目を伏せて畏まつてゐるまつ子を、斜めに竊見しながら、口を切つたが、それだけの言葉も努力して絞り出したやうなものであつた。電氣の光で明かに目に映る彼女の顏は、依然として青褪めて萎びてゐた。しかも、生地のまゝで他所行の化粧をしてゐないので、尙更醜かつた。

まつ子は口を利くまへに、ホロ〳〵と涙を落した。

「私が惡かつたんで御座います。私がお別れした後では、直ぐに外の女をお入れなさるだらうと思つてお怨みしてゐたのですけれど、さうでないことが分つたので、自分の邪推を後悔してゐますのです」

「そんなことはどうでもいゝさ。……僕は重大事件といふのを聞きたいのだ」

「入江の兄さんは、昨日あなたにどう申上げたか存じませんが、私は打つなり蹴るなり、あなたに存分にして頂きたいのです。あなたからきびしい懲罰を受けたら、罪亡ぼしになつて、いくらか心が安穩になるだらうと思はれるのですから」

「そんな詰らんことを云ふもんぢやない。おれは今更お前を責める氣は毛頭無いのだ」

相川は靜かにさう云つたが、無意味な話を聞くためにこの女と對座してゐるのが、腕を壓搾されるやうに苦しかつた。

「私の不心得からあなたの知慧を暗くしました。人にすぐれた才をもつてゐらつしやるあなたを、充分なお仕事の出來ないやうにいぢけさせてしまつたのも私の所爲だつたことがこの頃やうやく分るやうになつて、死んでも申譯がないやうに思はれてなりません。あなたが學問も手につかなくなつて、毎日頭を抱へて溜息吐いて歲をお取りなさる樣子が、この頃寢ても醒めても目の前にちらついてならないんです。それがみんな私の所爲なのですから」

「おれはこれから一人で學問の方に一心にならうと思つてゐる。その準備も出來てゐるんだから、お前に心配して貰はなくつてもいゝよ」

「あなたは私を他人と思つてさう仰有るけれど、私にはよく分つてゐますよ。白瀧がたび〳〵さう云つてゐました」まつ子はさう云ひながら、凄い目差しで書生部屋の中を見廻して、「白瀧に暇

をやつたつて先つき云つてゐらしつたけれど、あなたはあの男がどんなに恐ろしい男だかよく御存じなのですか」

「あの男はおれのためにはよく盡くしてくれた」

「あなたはなんにも知らないんです。私は白瀧のために何度も酷い侮辱を受けました。榎町の家にゐた時、あなたが私を突飛ばして不機嫌な顔して戸外へ出なすつた後で、白瀧は旨いこと云つて私を慰めたのですが、あの時だつて、私は夢のやうな中に、白瀧に侮辱されたのです。あの男は魔藥か何かを持つてゐるに違ひありません。あんな男を側に置いて、御飯の事も任せてゐらつしやるのは、あなたの生命にもかゝることなのですからね。」

「重大事件といつてそんなことなのかい」相川は努めて冷やかに云つたが、不快な感じを蔽ふことが出來なかつた。榎町に住んでゐた時分に、まつ子の不貞腐れの醜態に堪へられなくなつて、家を飛出して夜おそくまで戸外をうろついてゐたことは、今でも明かに思出された。「そんなことは今になつて、お前から聞くには及ばないよ」

「私がお話することをあなたが信用なさらうとなさるまいと、私はあなたの前で自分の胸にある一切の事を懺悔したいのです。さうしたら胸の中が晴々して、死ぬるにも安心して死なれるやうに思はれるのですから。あなたのお側にゐた時には、いくら謝まれと云はれても、謝まる氣になれなかつたのですけれど、今はあなたのお差圖通りにして謝まりますわ。私には信心してゐる神様はないし、親兄弟をはじめこの世の人に、誰れ一人として心を打明けられる人はないのですから、あなたを神様と思つて懺悔したいのです。四年の間夫婦の緣を結んでゐた間、私はあなたの體面を汚すやうな事をいく度もしつゞけて來ました。あなたが外の女を思つてゐらつしやるといふ邪推から嫉妬を起してその腹癒せに、お隣りにゐた學生さんに無理にも思ひを掛けたことがあるんです。白瀧が邪魔をしなかつたら、あの時どういふことになつてゐたか知れませんわ」

「さういふ話は御免蒙る」相川は澁い顔をしてふと座を立たうとしたが、すると、まつ子は膏立つた腕を伸して彼れの裾を捉へて引据ゑようとした。昔の彼女の狂はしい擧動が新たに相川の目の前に浮んだ。

「いゝえ、私の懺悔の濟むまでは此處にゐて頂かなければなりません。入江の兄さんが手輕に思つてゐるやうに、も一度あなたのお側へ戻れるとは夢にも望んではゐないのですし、兩親に勸めら

れたつて、再婚する意志は微塵も有つてはゐないのです。私には一生人の妻となれる運は缺けてゐるのですから、それは諦めてゐますわ。……だけど、あなただつて二度目の結婚は注意なさらにやいけません。あなたを慕つてる女の方があつても、その女を家へ入れて決してあなたのためにいゝことはないのです」

まつ子の聲は自ら高く嶮しくなつたが、すると、それを聞きつけた入江は、打棄てゝ置けなくつて、咳拂ひして書生部屋の襖を開けた。相川は裙を搔合せて一先づ坐ることは坐つたが、

「格別必要な用事はないやうですから、連れて歸つて頂きたいものですが」と、不興げに云つた

「いゝえ、私まだ肝心なお話はしてゐないのです。心殘りのないやうにお話ししたら直ぐに歸りますから、兄さんは一足先きへ宿へ歸つてゐて下さい」

まつ子がさう云ふと、入江は意味ありげに二人の顏を見比べて、「ぢや、さうしようか。後で迎へに來てもいゝ」と云つて、玄關の方へ出て行つた。

相川は出て行く入江を引留めやうとしながら、啞のやうに言葉が口から出なかつた。まつ子の忌はしい無用な話の斷片が何時か彼れの心に喰入つて、その方にのみ心を取られて、入江などゝ

爭ふ餘力はなかつた。

「あなたは白瀧の計らひで私を實家へ返して置いて、兩親をも得心させて離緣したのだからそれで萬事がすんだやうに思つてゐらつしやるんでせうけれど、四年の間に私のした事はいゝにつけ惡いにつけ、一生あなたの心を離れはしませんよ。私は誰れにも相手にされないやうな汚れた身體なのですけれど、私の影はあなたを離れやうとしても一生離れられないに極つてゐるのです。將來あなたがどんな方と結婚なすつても、その女の人には私の魂が入り込むに違ひありません。私はあなたに罪のお詫びをしたら、死んでも厭はないのですけど、四年の間の夫婦の契りはあなたの骨身に染んでゐるんですから、拭いても洗つても、跡方なしに綺麗になる筈はありません。」

かう言續けるまつ子の言葉は、相川の耳には、神の聲か惡魔の聲かのやうで、人間の聲としては聞えなかつた。

「それでどうしようと云ふのだい」相川は氣拔けのした聲で云つた。「おれの身の上の重大事件を知らせると脅かしといてそんなお前の愚痴を云ひに來たのかい」

「痴愚なら愚痴でいゝんですわ。あなたが私との惡緣の果てを忘れないやうにして、この後も慎ん

で用心して世お渡りなさる氣におなりなされば、私が無理にも此方へお訪ねした甲斐があつたのです。私は先日うちからあなたの將來を夢うつゝで見ては氣になつてならなかつたのですもの。決してあなたの不爲を思つてこんなことを申上げるんぢやありませんの。……あなたを永い間苦しめた上に、この後も何時までもあなたの影身に添つて御迷惑を掛ける私を憎いと思ひなさるのなら、私を打つなり蹴るなり存分にして下さい。私は默つてあなたの懲罰を受ける覺悟をしてゐるんですわ」

さう云つた言葉や、男の鞭を甘受しようと身構へする樣子が、狂氣のやうでもあり正氣のやうにも思はれて、相川は仕末をつけかねた。最早懸り合ひのない筈の別れた妻の吐く息に周圍は濁されて、昔のやうな腐つた空氣の中に自分が漂つてゐるやうな氣がした。……今朝までこの部屋にゐた白瀧の顏や、榎町の隣家にゐてをり〳〵訪ねて來ては無邪氣な事を云つてゐた學生の顏が、敵意を含んで眼前に浮んで來た。

「野村といふ學生は、去年の年末だつたか、おれに挨拶らしないで不意に轉居したつきりで、その後は一度も顏を見せなくなつたが、お前もあれから會つたことはないのかい」と、身を入れて訪ねた。

「あの人はもう一足で罪に墮ちるところを、白瀧に勸付かれたりして、怖くなつて逃げたのですもの。私の側へ寄りつく筈はありません。……あの晩あなたのお留守の時に、野村さんは故郷からの贈り物だといつて、枯露柿を持つて來て呉れたのですが、その時あの人は私の泣顏を見て變に思つたやうでしたから、私は無理に家へ呼込んで、火鉢の側で差向ひで有る事無い事の差別なしに、いろんな愚痴を零して、あの人の同情を惹いたのです。正直に同情して呉れました。さうしてゐるうちに、あなたに對する仕返し見たいな無法な氣になつて、懷こい素振りをあの人に見せたのですが、今でもその時の野村さんの興奮した顏が目に見えるやうですの」

「馬鹿め。何を云ふんだ」相川はふと險しい聲を立てゝ胸を轟かせた。女を力一杯打擲したい氣がした。

「私野村さんにも罪なことをしました。あの人も柔しい人だから、後でどれほど氣に病んだか察せられますわ」

「お前は永い間おれを苦しめながら、まだ飽き足らないでおれに付纏ふのだな。……歸れ、直ぐに歸れ」

相川は歸れと叫んで、女の身體を外へ蹴出さうとしかけたのをやうやく我慢して、自分自身、襖を荒々しく開けて縁側へ出て庭へ下りた。そして、月が出てゐるのを幸ひに、裏木戸から海岸の方へ足を向けたが、混亂した頭は容易に鎭まらなかつた。嘘にしろ眞實にしろ、恥づべきことを勝手に喋舌り立てたまつ子は、生身の彼女ではなくつて、彼女の亡靈か何かのやうに思はれたが、それは兎に角、白瀧とまつ子との醜體や、野村とまつ子との關係が、現狀を今目前に見てゐるやうにありゝと想像されるのに堪へられなかつた。先日來將來の新しい妻、あるひは戀人を空想しては祭しんでゐた彼の氣輕な希望は今は無殘に碎かれてしまつたやうになつて、過去の忌はしいまつ子の面影に彼れの心は集中された。

海岸に近づいた彼れは、ふとまた足を轉じて、知らず〳〵相模屋の前まで行つた。玄關先へ寄つて入江のことを訊ねると、「もうお休みになつた」と、宿の者が答へた。

まつ子を連れにも來ないで先さへ眠りに就いた入江の無責任を憤つて、相川は、宿の者に强ひて賴んで、彼れを呼起させて玄關まで出て來させた。面と向つて無責任を責めると、入江は恐縮しながら、一緒に出掛けようとしたが、相川はまつ子の狂態を告げて、一切を入江にまかせて自分は避けることにして、宿屋の前で道を外らした。

暫らく海岸をさまよつてから、忍び足で裏木戸から家へ入つて、そつと書生部屋を見たがそこにはまつ子はゐなかつた。今夜は白瀧もゐないのであつた。

彼れは表の戸を堅く鎖して雨戸を締めた。寢床へ入る前に、かの十字架を出して見たが、今夜はそれから何の慰めも力も得られなかつた。十字架に伴うて思ひ起されるかよ子の影は今夜は薄かつた。

「何のために訪ねて來た?。同棲してゐた時分のやうに夫の無情を怨むのではなく、ひたすら自分の所行を悔ひて、無價値な女のやうに自から卑下するのが、以前のまつ子とは思はれない。……さう云へば、わざ〳〵此處へ來るのに、華美な服裝をしてゐないし、化粧すらしてゐないのが、以前のまつ子にしては有り得べからざることだ。……あるひは心から懺悔する氣で來たのであらうか」

相川は寢床の中で彼方へ向き此方へ向きして、今夜の不思議な會見について思ひをめぐらしてゐたが、彼れは、彼女の懺悔を憐憫をもつて受入れるやうな神ではなかつた。

翌朝、最初の電車の出る時刻を待つて、東京行の仕度をした。白瀧から居所の通知の來るのを待ちかねて、一刻も早く彼れを訪ねて聞糺したいと決心したのであつた。永い間とに角忠實に家の中の世話をしてくれて、眞面目に勉強も續けてゐたらしい白瀧が、異常な惡行を殘してゐよう筈はないと、自分の慌てた態度を恥ぢる氣がしないでもなかつたが、充分に確めなければ安心が出來なかつた。

三

相川が慌たゞしく東京へ向つたのは、白瀧に會つて夢のやうな事を訊糺さうとしたゝめであつたが、入江やまつ子の新たな煩はしい訪問を避けたいためでもあつた。

彼れは京京へ着くと、先づ白瀧の親戚で白瀧の保證人にもなつてゐる大島の家を訪ねたが、其家へは白瀧がまだ顏出してゐなかつた。居所の通知をもしてゐなかつた。相川は引留められて歡待されるのを幸ひに、暫くその家で時を過ごして、正午近くなつて暇を告げたが、眠不足の頭は眞晝の暑さに惱まされて、當てもなく埃つぽい街上を歩くのは堪へられなかつた。涼しい海風の通つてゐる小田原の自宅で手足を伸してゐる氣樂さを思ひ出して、無用な穿鑿なぞ企てゝわざ〳〵東京へ來たことが後悔された。

一昨日來たばかりなので買物もないのだから、やがて空手で新橋の停車場へ入つたが、待合室で腰を掛けて目を瞑つて一休みしてゐると、不安な妄想は刺を立てゝ彼れの心を突いて止まなかつた。離婚後努めて靜かな生活に入らうとして、昨今やうやく平穩を得かゝつてゐた彼れの頭腦も、白瀧の意外な行爲や、まつ子の不思議な告白などのために、再び亂されて、當分收まりがつきさうでなかつた。斷然振拂つてしまつた筈の數年間の不快な結婚生活の記憶が、以前にも增して力强く彼れの頭に湧上つた。四年間同棲してゐた間の事は、一生あなたの心を離れないと、まつ子が昨日云つたことが、今は恐ろしい呪ひの言葉として思ひ出されるとゝもに、自分の一生も世の中も暗く見られた。「まだ三十幾つの若い身で、こんなに過去に祟られてゐちや溜るものぢやない」と、自分で元氣を出して、明るい將來の希望を見据ゑてゐようとしても、過去を打消すだけの頼りになる者を、現在の彼れは身に備へてゐないので仕方がなかつた。白瀧でさへ自分に背いて行つたといふことが、淋しい彼れの境涯を一層深く淋しくさせるのであつた。……左右に動

いてゐるさま〳〵な乘客の顏や姿を夢のやうに見ながら、過去の思ひ出に惱まされてゐる彼れは發車時刻の迫つてゐるのに氣づいても座を動かなかつた。

餘程經つてから彼れは勢ひよく立上つた。が、待合室は出ても、改札口の方へは向はないで、埃つぽい街上の方へ足を向けた。日常神符のやうに肌身に付けてゐる十字架が、彼れの暗い頭の中に、一點の微な金色の光を放つて浮んでゐた。獨り身になつた後も、他に心を惹かれる女に出くわさず、東京へ出た次手にたまに色街に足を踏入れても、一人の女に執着することのなかつた彼れは、十字架に魂を宿してゐるといふかよ子を、唯一人の女として夢現に見てゐたので、彼女に會つたら、今の淋しい暗闇の中から、あるひは浮び出られさうに、ふと微な望みが起つた。結果をのみ氣遣つて躊躇してゐるのは馬鹿だと、自ら勵ましたが、白瀧から偶然かよ子の現在の境涯の一端を聞くことが出來たのが、十字架のお告げのやうに心頼みに思はれてゐたのであつた。

彼れは最早迷はないで村岡の家を訪ねた。村岡とはある研究會で知合ひになつてから時々往來はして書籍の貸借もしてゐたのだが、さして深い交際があるのではなかつたので、小田原移轉の時も一片の通知も出さなかつたほどに疎遠になつてゐた。

久振りに訪ねて見ると、その家は見違へるやうに改築されて、西洋室が一棟建添へられてゐた。通された應接室も、敷物や窓掛が新たになつて、壁紙も薄汚れてゐた以前とは違つてゐた。何時の間に金持になつたのかと、相川は相變らずの自分の質素な生活を省た。相手が金持になつて勿體振るやうであつたら、打解けた話がしづらくなると氣遣ひながら待つてゐたが、間もなく入つて來た村岡は、その低い平たい鼻や小さな柔和な目が、以前の通り懷つこい馴易い相をしてゐて態度も口調も以前の通りで、氣取つたところはなかつた。

「君のお噂もちよい〳〵耳に入れてゐますよ。この頃はお獨りで田舍にゐらつしやるんださうですね」と、村岡は誰れから聞いたのか、相川の近況を可成りよく知つてゐるらしかつたので、相川も隱立てしないで、離婚の次第を簡單に話したが、自分の離婚話の後でかよ子の事を訊ねるのは氣が差した。

お互ひの研究してゐる學問を話題として暫く時を過ごしたが、村岡は差迫つた用事を扣てゐるらしかつたので、相川も落着いてはゐられなかつた。

「つかぬことをお伺ひするやうですが、君は瀨川銀平といふ方と御懇意にしてゐらつしやるんで

すか」と、出抜けに問ひ、けゐと、村岡は、
「えゝ、瀬川さんはよく知つてゐますが」と、微笑した。その微笑は相川の目には快く映らなかつた。自分の心の中をすでに見られてゐるやうな氣がした。
「あしこの家庭はこの頃どんな樣子です？……」相川は仰々しい質問では要領を得た返事は得られないと思つて、怯む心を勵まして、「僕は瀬川さんとは一面識もないんですが、あしこの妻君はある關係で、結婚前には可成り懇意にしてゐたのです。瀬川さんへ行つてからは一度も會つたことがないし、家庭の事情を噂に聞いたこともなかつたのでしたが、先日偶然、これは僕の家の書生の口から出たのですが、君が瀬川さんをよく御存じだといふことを聞いたものですから、機會があつたら、君にお尋ねしたいと思つてゐたのです」と云ふと、村岡の顏は笑ひの影を收めて、今までになく堅苦しくなつた。
「さういへば、三月時分でしたか、君のお家の書生さんが××の寫本を筆記しにお出でになつたことがありましたね。確か三月のはじめだつた」と、小首を傾けて考へて「君が瀬川の妻君と御懇意だとはちつとも氣がつきませんでした。不思議なものですね」

村岡は注意深い目を相川の顏に注いで口を噤んだ。
「餘程の財産家ださうですから、妻君も贅澤をして幸福に暮らしてゐるんでせうね。僕も機會があつたら、一度會つて見たいと思つてゐるんですが、出抜けに訪ねて行く譯には行きませんから君を煩はして妻君の承諾を豫め求めて置きたいと思つてゐるんです。……さう云ふと變なやうですが、實は結婚前に妻君から大事な物を預つてゐるんで、それを僕の手から直接に妻君に返したいと思つてゐるんですよ。……どういふ家に住んで、どんな贅澤な風をして得意になつてゐるか、一度見てやりたいといふ僕の好奇心も無論あるんですがね。それは君にお含みを願つといて、たゞ何日の何時ごろに訪ねて行つていゝか、眞面目な用事として君に聞合せて頂いとくと非常に都合がいゝんです。さういふ立派な家の妻君に、手紙で面會を求めるのは何だか不謹愼なやうで、先方の迷惑になるかも知れませんから」
「なに、突然お訪ねになつたつて差支はありますまい。そんなに嚴格な家庭ぢやありませんよ」
村岡の語調には嘲りを含んでゐた。「彼家も見掛けほどの金持ぢやありません。それに、君はどうお思ひになつてゐるか知らないが、あの妻君は普通の女とは少し違つたところがあるので、多少の

贅澤は有勝ちのことだからいゝとして、一口に云ふと、家庭の破壞者といふやうなところがあるんです。……しかし、二年も三年もの間、表面だけでも無事でよく續けて來たものだ。この先はどうだか知れないんですけれどね」

「以前は柔順しい女でしたが……」相川は空呆けてさう云ひながら、内心かよ子が家庭の破壞者たることをむしろ痛快に思つてゐた。

「かう云ふと少し立入り過ぎたことになりますが、君が瀨川の妻君から預つてゐらつしやる物は今お持になつてゐるんですか」

「えゝ、……」相川は咄嗟の質問に對して嘘が吐けなかつた。そして「今日東京へ來る次手に、返せるものなら返したらいゝと思ひついたものですから」と、慌てゝ言足した。

「ぢや、小さな物ですね」

村岡の目は鋭くなつた。相手の衣服を徹して何かを搜してゐるやうに鋭かつた。

「まあさうです」

「……間違つたらお詫びしますが、それは金屬でつくつた物ぢやないですか」

「君はどうして知つてゐるんです？あの妻君が君にお話したんですか」相川の聲はやゝ震へた。

「ぢや僕の想像が的中したのですね」村岡の顏は陰鬱な曇りを帶びたが、言葉は穩かに「あの十字架は、……あれは昔僕が持つてゐたのですよ。あれが廻り廻つて君の手に渡つたのは不思議といへば不思議ですね。……なに大した譯があつたのぢやありません。純金だから潰しにしたらいくらか價値があるでせうが、要するに子供の玩具同樣の物ですからね」

「ある人から貰つたのだと、かよ子さんが云つてゐましたが、君がおやりになつたんですか」相川は努めて平氣を裝ひながら、「ぢや、君は餘程以前からあの女を知つてゐたのですね」

「さう、隨分前から知つてゐた譯です。しかし、十字架をやつたのには深い意味はなかつたのです。その當時の事をお聞きになりたければ、僕よりもかよ子さんからお聞きになつた方がいゝでせう。なんならこれから直ぐにお會ひになつちやどうです？　電話で先方の都合を訊合せて見ませう」

「いえ、それには及びません」相川は村岡が座を立掛けるのを押留めて、「僕はあの女がどんな風に異つてゐるか、好奇心から見たいと思つたまでですから。……僕が十字架を預つたのも、眞實

は座興見たいなもので、先方でもそんな物に價値を置いたのぢやないでせう」と照れ隠しに云つた。何年となく肌身に添へて有難がつてゐた十字架を、子供の玩具同樣だといはれたので、彼れの男としての矜持(プライド)を著るしく傷つけられたやうな氣がして、村岡と對座してゐるのが、堪へがたく居苦しくなつた。

「しかし、君が思ひ立たれたのだから、一度會つて御覽なさい。瀬川夫婦のことについては、僕も後日緩くりお話することがあるかも知れませんが、今日はなんにも云はないことにして置きませう」

「いづれまた」

相川は俄かに立上つて暇を告げたが、不斷になく無愛想になつた村岡に追立てられてゐるやうな氣がした。彼れは眞晝の光の眩(まぶし)い戸外へ出てから、村岡の口から洩れた斷片的の話を心の中で繰返して、その意味をいろ〳〵に判斷 て見た。が、どちらにしても、先つきまでは後光(ごくわう)の射してゐた金色の十字架が俄かに光を失つて、石礫(いしころ)見たいに思はれだした。出所が分つて見れば有難くも何ともないものを、永年珍重してゐた自分の愚さが腹立たしくなつたが、しかし、路上の石礫の上にその十字架を投棄てることもしかねた。

彼れは疲れた身體を、附近の小さな洋食店で休めて、冷たいソーダ水を飲みながら、ソッと十字架を取出して見た。自分ひとりで勝手につくり上げたのにしろ、數年の間純潔な戀の記念として、美しい女の魂の籠つた物として大切にしてゐた十字架には、見てゐると未練が殘つた。棄てるにも無雜作には棄てられなかつた。

「兎に角、かよ子が會はうといへば會つて柔順しく返へすし、會はなければ、小包にでもして贈り返すことにしよう」と決心して、一刻をも急いで、筆や紙を借りて、かよ子宛の簡單な事務的な手紙を書いた。

洋食屋を出ると、手紙はポストへ入れて、自分は停車場へ向つたが、過去も現在も未來も、たゞ虐げられるために生存を續けてゐる人間のやうに自分自身の身の上が思はれて、相川は明るい夏の日に照らされながらも、全心が惡夢に魘されてゐた。まつ子も、白瀧も、あるひは村岡も、かよ子も、みんなが毒牙を磨いで彼れの心を嚙切らうとしてゐるように思はれた。

彼れは汽車に乘つても、電車に乘つても、周圍の乘客を見まいとして、絶えず目を瞑つてゐた。

一昨日東京から歸つた時には、風呂も沸いてゐたし、白瀧を相手に晩酌も出來たし、淋しいながらも閑居が樂まれたのであつたが、今日は不吉な思ひ出のみ籠つてゐる空家へ、疲れた身體を横へに入つて行くのであつた。

彼れは雨戸を開けて海風に汗を乾かせながら、暫く昏々として睡つた。郵便配達の聲に目を醒ました時には、永い日も暮れて、ごろ寢の肌が寒かつた。郵便は白瀧の端書であつたが、それには假りの住所の通知の外に何も書かれてゐなかつた。

「まつ子や入江はあの後どうしたか。若しも今夜でもまた訪ねて來るやうであつたら、おれの頭は滅茶々々だ」と、恐れられたので、相川は宵のうちから表の戸を堅く鎖して、電氣は點けつ放しで寢床の中に入つてゐた。暫く睡眠が得られないので、目を開けたり閉ぢたりして、をり〳〵表を通る足音に耳を留めなどしてゐたが、さうしてゐるうちに足音の一つが家の前に止まつた。

「相川さん」と呼掛ける聲は確に入江の聲であつた。

「あわだけで飽足らないで、まだおれを苦めに來るのか」と、相川は慣りながら默つてゐると、入江の足音は庭の方へ廻つた。そして今度は雨戸の側で呼掛ける聲がした。雨戸がトン〳〵と叩かれた。息を殺してじつとしてゐた相川も、最早我慢がなりかねて、發起きて雨戸を開けて、

「僕にまだ用事があるんですか。僕は日歸りで東京へ行つて來て、非常に疲勞してゐるんです」と、無愛想に云放つたが、

「御迷惑を掛けて相濟みません」と、入江は悪びれないで戸口へ寄つて來て、「今朝からたび〳〵お訪ねしたんですが、ゐらつしやらないから、諦めてこれから東京へ歸らうと思つたところでした。お別れに、私から一言お願ひしたいことがあるんですが、聞いて頂けないでせうか」

「ぢや此處で云つて行きたまへ」

「私は安受合ひに、まつ子の頼みを容れて、此方まで連れて來たことを後悔してゐるんです。あなたにも意外な御迷惑を掛けましたが、まつ子は永い間の氣苦勞でスツカリ頭腦を悪くしてゐるらしいんですよ。さうとは氣がつきませんでしたから、先日浮かりあれの云ふことを信じて大いに同情をした譯でしたが、昨夕から今日へかけて一緒に暮してゐたのでよく分りました。あれは全く常識を失つてゐるんですね。自分で妄想を起しちや辻褄の合はんことを云つて自分で苦しんでゐるんです。それで、昨夕もあなたに對して變なことばかり申上げたらしいですが、あれは病

氣のせいですから、一切お心にお掛けなさらないやうに、私からお願ひして置きます。……昨夕あれから夜つぴて泣きつゞけるので私も閉口しました」

入江は縁側に腰を掛けて、目は庭の木立に注ぎながら、冷靜な口調でさう云つたが、相川が何とも答へないでゐると、傍らを顧みて、今度は言難さうに、

「私の責任としてこれから無理にでも東京へ連れて歸りますが、その前に、私から折入つてお願ひしたいことがあるんです。……まつ子はあんな風に根も葉もないことを神經に病んで自分が苦めて、あなたに濟まない〳〵と口走つてるんですから、今あなたから過去のことは一切許してやると、まつ子の前でお言葉を掛けて頂く譯にはまゐりますまいか。あんまり馬鹿々々しいんで、お願ひしにくいんですが、さうして頂ければ、まつ子の精神も大變安らかになるでせうから、私が連れて歸るにも都合がよろしいのですよ」

「しかし私はまつ子にはもう會ひたくないんです。第一、許すの許さんのとそんな芝居じみた口は利きたくありません」

「御尤もです」と、入江は些つと頭を下げて、「しかし、あなたのお言葉が何よりもまつ子の心を休めるのですから、一言でも柔しいお言葉を掛けて頂けますまいか。今朝も氣晴しにと思つて海邊へ連れて行きますと、波の中へ飛込みさうな氣振りを見せるんで危くつてなりません。私が責任をもつて兩親を說伏せて、保養といふ口實を設けて連れて來ながら、まつ子の身に間違ひでもあつたら、私は兩親に合す顏がないんです」

さう云つて强請されると、相川も無下に斥けかねて默つてゐたが、すると、入江は承諾を得たことに獨り極めにして、急いで出て行つた。相川は逃げるにも逃げられないので、雨戸を二三枚開けて涼しい風を入れながら、忌はしい客を待つともなく待つてゐた。入江のかさねゞ〳〵の押付けがましい所行を彼れは憎んでゐたが、しかし、過去の不貞な身持についてのまつ子の告白が、みんな彼女の精神の異狀から起つた妄想に過ぎないやうに入江が斷定してゐたのは悅しかつた。さう云へばさうかも知れないと、自分の輕卒な疑ひを嗤ふ氣にもなつて、黑い雲に鎖されてゐた頭の中もいくらか明るくなりだした。そして、懺悔したり悲しんだりして徒らに心を苦めてゐるまつ子を、多少ふびんに思ふやうにもなつた。離別前後から今まで一度もい〻目で見ることの出來なかつた彼女に對して、いくらか溫かい思ひが寄せられだした。

「喧嘩しながらも四年も一緒に暮してゐたんだから」と、彼れはをり〳〵は睦まじく日を送つてゐた過去の記憶を懐かしく思ひ出した。……昨日今日の一人ぼつちの生活に比べると、あの時分の生活の方がまだしも幸福であつたやうに思はれた。

入江が再び姿を庭先へ現はしたのは餘程經つてからであつた。此家から直ぐに東京へ歸れるやうに身仕度をして、手提鞄をも持つて、片手でまつ子の手を執つて入つて來た。

「この次の電車までまだ二十分ほど時間があるから、心殘りのないやうに緩くりお話したらいゝだらう。折角此處まで來たのだから」と、入江は慰めるやうに云つて、相川にはソッと目で欺願した。そして、まつ子を緣側へ上らせて、入江自身は二人の側を遠ざかつた。

相川は昨夕とは違つて、まつ子に對して憐れみを感じて來たために、却つて對座してゐるのが間が悪い氣がして、口が利きにくかつた。まつ子の方でも首垂れたまゝ容易に口を開かなかつた。寂とした沈默が暫く續いた。

果しがないので、「おれは過ぎ去つたことは何とも思つてやしないのだ。昨夕は行きがゝりで酷いことも云つたが、お前を咎める氣は些ともないのだよ。だから安心して身體の養生をしてゐたらいゝだらう。お前はまだ若いんだから、この先いゝ事もあるだらう」と、努めて靜かに云つたが、すると、まつ子はシク〳〵泣きだした。

「性の合はない人間が一緒になつたのが悪かつたのだ。おれはお前を責める氣はないのだから、お前も詰らないことを考へないやうにしたらいゝぢやないか」

「いゝえ、詰らないことぢや御座いませんわ。私はあなたに耻辱を與へて一生の破滅をさせた女ですから、あなたから思ふ存分の懲罰を受けたいんですの。一寸だめしに切刻まれても厭はない覺悟をしてゐるんです。あなたは今日何のために東京へ入らつしやつたのか知りませんが、あなたの御樣子を見たつて、昨夕とはお心持の異つてゐることが、私にはよく分りますわ。昨夕私が自分の不身持を正直にお話したゝめに、あなたは今になつてお氣がついて、それで寢ても眠られない思ひして苦しんでゐらつしやるでせうけれど、何も御存じなかつた時よりも、よく譯が知れた方がまだしもあなたのためにもよろしいんです。……昨夕申上げた外に、私はまだ恐ろしいことを企らんだことがあるんですの。それも榎町にゐた時でした。あなたがお父さんの遺産の中を私に隱して持つてゐらつしやると思つたものですから、あなたさへ亡くなつたら、さういふ莫大な

財産がみんな私の物になるだらうと淺墓な考へを起して……」

「もういゝよ、そんなことは聞かなくつてもいゝよ」と、相川は早口に云つて、「お前は過去つたことは忘れてしまつて、靜養しなさい。緣があつたらこの後また何處かで會ふかも知れないが」と云つて、一生の見收めのつもりで、われ知らずまつ子の顏を見詰めて座を立たうとすると、まつ子は目を欹(そば)てて、今にも縋りつきさうな氣振りを見せて、

「私、生きてるうちにまたお目に掛れようとは思つてやしません。ですから、何もかも私の心に溜つてる一切の事を懺悔させて下さい。私はあなたのお側に寢てゐながら、倉田さんのことを考へてゐました。私の寢衣の長襦袢に倉田さんの寫眞を縫込んで寢たこともありました。……妻としての眞心を盡くさないで、才智の傑れたあなたの一生を汚した私は、いくらお詫びしてもし足らないんです。以前のやうに手向ひはしませんから、あなたの手で思ふ存分にして下さい」

だけど、相川は憤怒の鞭を下す力を持つてゐなかつた。昨夕のやうな烈しい言葉さへ出なかつた。長襦袢に寫眞を縫込んで寢たといふことは、彼女の妄想とばかりは思はれないので、相川自身もふと思ひ當ることがあつた。

「お前は懺悔だの罪亡ぼしだのと、殊勝らしい名をつけて、おれに復讐しに來たのか。お前の兩親も得心してお前を引取つたので、今更お前からいやなことを聞かされる筋はないのだよ」と、彼れは力のない聲で云つた。

「私が秘密を打開けて懺悔するのを復讐だなんて思ひなさるのは、あなたの智慧の暗くなつた證據なのです。……」

「もう澤山だ。おれはお前に會つてるのが恐ろしいよ」

相川はまつ子から顏を背けて、高い聲で入江を呼んだ。木蔭に蹲(しゃが)んで窃に二人の樣子を見てゐた入江は、氣遣はしさうにやつて來て、

「話が濟んだのなら出掛けようぢやないか」とまつ子の肩を叩いて、

「二度もお目に掛つたのだから、お前も心殘りはないだらう。もう僕を困らせないで大人しく家(うち)まで歸つてお呉れよ」と云ふと、

「兄さんがさう心配しなくつても、、私海へ身を投げたり汽車の線路へ飛込んだりなんかしませんよ。私まだ生きてゐなければならないんですもの」と、まつ子は案外氣輕に云つて顏を上げた。

「ぢや、そろ〳〵お暇にしようか」と促されると、

「え、……」と、まつ子は大人しく答へたが、座を動かなかつた。じつと相川を見上げた兩眼に はしほらしい涙が溜つてゐて、先つきのやうな嶮しさも物狂ほしさも影を潜めてゐた。

「ぢや、これで失禮します。私は二三日うちには九州の方へ歸りますから、當分お目に掛ることも御座いますまいが、若し彼方へ御旅行でもなさるやうでしたら、是非お寄んなすつて下さい。御見物の御案内をいたしませう」と、入江は快活に云つて、殆んど抱下さぬばかりにしてまつ子を縁側から下りさせて、寄添つて警戒しながら、庭を横切つて出て行つた。

相川は暫く氣抜けのしたやうな目で、微風に戰いでゐる庭の木の葉を見でゐたが、やがて、氣を紛らすために、寢衣のまゝで裏口から海岸の方へ出て行つた。一昨日の夜二階の燈火が目についた別莊には、今夜も華やかな燈火が耀いてゐて、若い聲が笑ひにまじつて洩れてゐた。「若夫婦と女中とが來てゐる」と、白瀧が云つてゐたことを思ひ出して、暫く立つて見てゐると、間もなく二階では話聲が止んで、そのかはりに啜泣きするやうなヴァイオリンの音がしだした。

相川は三十前の若い時代に、進んで得ようとすれば得られる筈の戀を取逃がしたことを、二階から洩れて來るヴァイオリンの音につれて思ひ出してゐた。そして、まつ子との惡因緣が彼女が毒々しく云つてゐたやうに、將來をかけての彼れの一生の破滅を示してゐるやうに思はれてゐたが、しかし、今は爭ふ力も慣る力も無くなつてゐる彼れは、昨夕までの彼れとはちがつて、運命の前に首垂れてしよんぼりしてゐるのであつた。彼れは町の方から響いて來る電車の音が耳に入るとともに、入江に守られながら東京へ歸つてゐるまつ子の見窄らしい姿をあり〳〵と目の前に浮べた。

磯へ出て波打際を散歩してから、町へ廻つて家へ歸つた時には、月が出て庭を照らしてゐた。縁側から上へ上りながら、ふと氣づくと、まつ子の坐つてゐたところに紙屑が落ちてゐた。手に取つて見ると、皺になつた紙の中には藥らしい白い粉が入つてゐた。病氣の藥か毒藥か分らなかつたが、彼れはそれを庭へ棄てかねて用箪笥の中へ入れた。「毒藥ならまつ子の置土産に相應してゐる」

彼れは光の無くなつた十字架と、この毒藥とを、過去の自分に關係の深かつた二人の女の記念として心に描きながら、一人寢の床に就いた。

あくる日も朝から暑かつた。相川は家を疊んで宿屋住ひか何かするにも、荷物が手足纏ひになつて早急な運びがつきかねるので、急場の間に合はせに、知合ひの近所の老婆に賴んで炊事と拭掃除とをさせることにした。お喋舌の老婆の世間噺は受答へするのが煩はしいだけで些とも面白くなかつたし、ことに白瀧のことをくどく訊ねられるのがいやだつたが、それでも、一人ぼつちで過去の記憶に苦しめられてゐるよりもましだつた。

辛じて日の永い一日が暮れた。老婆が晩餐の跡片付をして、寢床をも延べてくれて出て行つた後では、無氣味な夜が、相川の目の前に匍ひ寄つて來たが、その時一通の意外な手紙な暗い玄關へ拋込まれた。

「何年目かのあなたのおたよりに接して夢ではないかと思はれました。でも、何といふ冷淡なおたよりでせう。私はお端書をいく度となく讀返しては考へて見ましたが、私の淺い智慧ではどうしても判斷が出來かねたのです。それでなんと御返事していゝかと迷つて居りましたが、丁度その時に、あるいやな男(陰劍な奴です)が訪ねて來まして、意外にもあなたのお噂をしたのでした。それで私にもやうやくあなたのお手紙の意味がよく察されました。先日うちから、どうかするとあなたのことが思ひ出されて懐しくつてならなかつたのですもの。かういふおたよりを拜見しては一時も早くお目にかゝらないではゐられません。私の宅へお出でを願つてもしみ〴〵お話を伺ふことは出來かねますから、お差支さへなければ近日私の方からあなたのお宅へお訪ねする決心をいたしました。この頃はおひとりでお暮しになつてゐらつしやるさうですね。何かのことはお目に掛つた上で申上げます。それまでは十字架は御面倒でもお手元にお置き下さいまし。あんな物は見るのもいやだとお思ひになるのなら、私が頂いて、海へでも川へでも投棄てますわ」

模樣入の洋紙へペンで書かれた女文字を、相川は天來の福音のやうに見入つたが、その懐かしい手紙の上にも、村岡の影が差してゐるやうで、自ら戒める氣になつた。

四

その日も暑かつた。相川は、永い間胸に宿してゐた珍客のかよ子を迎へる準備として、朝早くから部屋を綺麗にしたり、髯を剃つたり、老婆に手傳はせながら自分が先に立つて庭の草むしりなんかをしたりして、午前中を過したが、そんなことでもしてゐると、當てのない散歩なんかをし

てゐるよりも、却つて氣が紛れて頭が輕くなつた。

老婆が午餐の膳立をして、「お客樣が入つしやつて御用が御座いましたら、ちよつと聲を掛けて下さいまし」と云つて、自分の家へ歸つた行つた後で、相川は一合にも足らぬ酒を温めて、手酌で飲んだ。そして、いゝ夢を待設けながら假睡をしてゐたが、夢にも現にも彼れを呼醒ます者はなかつた。ひとりでに目が開いたので、所在なく茫然として庭を見てゐるうちに、日は徒らに暮れてしまつた。「また騙されたのか」と、かれは自分の輕信を悔ゐた。まつ子が呪つてゐたやうに、自分の前途は暗闇に包まれてゐるので、何もいゝ事が待つてゐる筈はないのかも知れないと、まつ子や白瀧や村岡やかよ子など、知人緣者のすべてから、自分の魂が侮辱を受けてゐることを、昨日よりも更に激しく感じてゐたが、さうしてゐると、晩餐の世話をしに來た雇ひ老婆の聲でも懷しく聞かれた。で、入江の手土產のカステラを切つて打解けた世間話をしかけたが、老婆は鈍い顏をしてゐるくせに、まつ子の來たことをちやんと知つてゐて、深い譯があるに違ひないと睨んでゐた。

その譯を訊かれるのがいやさに、相川は折角親しく話しかけてゐた口を噤んで、この老婆の目をさへ意地くね惡い者の一つにしてしまつた。

口を噤んでゐるところへ、郵便の聲がして、老婆の手を經て一通の手紙が渡されたが、上書を一目見たゞけで、かよ子の手紙だと知れると、「またいゝ加減なことを書いて來たのだらう」と叩きつけたくなつた。邪慳に封を破つて見ると、「一人で小田原へおたづねすることが出來ないので急に思立つて今日大磯の別莊へ來ることにした。當分此方に滯在する筈だから、機會を見てお訊ねする」といふ意味のことが走り書きで書いてあつた。

相川は生返つたやうな氣がした。

「お客樣が入つしやるんで御座いますか」と、老婆は相手の顏色を讀みながら訊ねた。

「いや、來ないだらう」

相川は老婆の側を離れて、書齋の机の側へ行つて、も一度手紙を讀直した。かよ子が主人と一緒に大磯へ來てゐることが察せられた。先方から來ると云つてゐるのだが、それをボンヤリ待つてゐるのは、今の相川には堪へられなかつた。會つて却つて後悔することになるかも知れないが、とに角かよ子にでも早く會つて見る外には、昨今の言ひやうのない不快な氣持の遣場がなかつた。

で、翌日彼れはあまり暑くならないうちに身仕度をしたが、記念の十字架は、例のやうに神符

見たいに首へは掛けないで、紙に包んで紙入に入れて置いた。村岡の手垢のついてゐる者を有難がつてゐると思はれたくなかつたからだつた。

大磯へ着くと俥夫に訊ねて、瀬川の別荘の位置を確めて、その方へ足を向けた。鐵道線路を横切つて、いろ〳〵な別荘の表札を見い〳〵、山の麓を巡つてゐると、捜してゐる表札は間もなく目についたが、その別荘は豫想してゐたほどの立派な家ではなかつた。瀬川と書いた表札も雨に朽ちてゐたが、板塀もところ〴〵壞れかゝつたまゝで、近所のある伯爵家の新しい堂々たる西洋館などに比べると、著るしく見窄らしかつた。

「財産も傍で思ふほどはないのかも知れない」と、相川はかよ子の豪奢な生活についても疑ひを起しながら、二階を見上げたが、東向きの二階には日除けがかゝつてゐて、座敷の内はよく見えなかつた。だし抜けに訪ねたら、かよ子が迷惑するかも知れないと氣遣はれたので、相川はその辺りを一巡りしてから、海岸の方へ出た。まだ時節が少し早いので、水泳所の設備も出來てゐないし、人の出も稀だつた。小田原に住んでゐる彼れには、此處の海の眺めも物珍らしくはなかつたので、直ぐに引返した。何處か涼いところで一休みしていゝ考へを思當てるつもりで、町の中を歩いてゐたが、すると、向うから駛せて來る自動車の乘客が、ふと彼れの目についた。先方では氣がつかなかつたらしく、間もなく埃を立てゝ行過ぎたが、相川は暫く埃の中に突立つて、その後を見送つてゐた。……數日前に東京の電車の中で久振りに出會つた河本のおきくさんが今の自働車の中にゐたのを、不思議に思つた。「夫婦連れで自働車に乘つて箱根へでも行けるやうないい身の上になつてるのだらうか」と、その盛裝した派手な姿を、暫く夢のやうに目の前に浮べてゐた。

手頃な休み場所が見つからないうちに、ひとりでに停車場の前へ出て來たので、彼れはそこの待合室へ入つて腰を卸した。心を落着けて考へてゐると、あたりの人々に比べて自分の二三日間の精神狀態が變になつてゐることがふと胸に浮んで、今企てゐる訪問の非常識なことにも氣がついた。そして非常識な所行から生じる災厄に心が怯みだした。

つまりは小田原の寂い巣の中へすぐ〳〵歸つて行く外に、彼れの頭腦にいゝ智慧は出なかつたのであつたが、待合室の窓際から何の氣なしにプラットホームを覗いて見た彼れの目に映つた女の一人は、間違ひのないかよ子であつた。よく肥つた頑丈な五十代の男と並んで立つてゐた。

「もう東京へ歸るのか知らん」と、彼女の一通の手紙を眞に受けてお調子に乘つてゐた自分の淺

暮さを悟りながら、相川は進んで側へ行つて挨拶するだけの勇氣をさへ失つて、蔭からじつと見てゐたが、久振りに見るかよ子の顔や姿は、美しいことは美しいが、先つき出會つた自働車の中のおきくさんほどにも彼れの心を唆らなかつた。三年も四年もの間絶えず念頭に宿してゐた唯一人の女は、もつと豐麗な色香に富んでゐた筈だつたと、多少の失望をさへ感じた。

上りは向ふ側なので、やがて汽車が着くと二人の姿は見えなくなつた。相川は最早この土地にゐる必要はなくなつたので、次の下り列車に乘ることにして、待合室を出て時間表を見ようとしてゐたが、その時彼女の姿は再び彼れの目に映つた。此方のプラットホームを通つて出口の方へ向つてゐた。

「此方へ來てゐらしつたんですか」

出口で行合つた時のかよ子の最初の言葉は、相川の耳にはいかにも空々しく聞えた。以前よりも尖つてゐるかよ子の鼻も、目も口も冷淡らしくて、別れに臨んで魂とともに十字架を吳れたあの女とは思はれないやうであつた。

「暫くで御座いましたわね。一度お伺ひしたいと思つてゐましたのですけど」と云つて、かよ子は鹸しい目を周圍に注いでから、「昨日私が差上げた手紙を御覽なすつて？」

「えゝ」相川はそのために來たと思はれるのがいやだつたが、素直に答へると、かよ子は快げに微笑した。

「お差支えがなければ、これから私どもの別莊へお寄んなすつて下さいましな。一汽車お延ばしになつてもよろしいんでせう。明日あたり小田原のお宅へお伺ひしようと思つてゐましたのですから、此處でお目に掛れたのは何よりなんですわ」

「僕は關ひませんが、あなたは御迷惑ぢやないんですか」

「いゝえ、ちつとも」

かよ子は輕くさう云つたが、連立つて歩くのを憚つてゐるのか、一足先へ歸つてゐるから、少し間を置いて訪ねて來て吳れと云置いて、急いで停車場を離れた。相川はその後姿を見えなくなるまで見送りながら、その活潑な足取が昔のかよ子らしいのを懐しんでゐた。

暫くして彼れは別莊の方へ足を向けたが、途中でひそかに十字架を紙入から出して首へ懸けた。村岡から聞いた不快な事は今の間だけでも忘れてゐたいと念じてゐた。

別莊の門を入ると、かよ子は玄關に立つて待つてゐた。默つて二階の方へ導いた。家の中には他に人のゐる氣色はしなかつた。日は最早二階へ差込まなくなつてゐたが、日除はそのまゝになつてゐた。南側の障子も締められてゐて、山に接した次の室の小窓が開いてゐるばかりであつた。

紫檀の卓の上にはサイダやバナヽが出てゐて、煙草盆に座蒲團と、客を迎へる用意がされてゐたが、相川は入るべからざるところへ入つて來たやうで、胸が頻りに波打つた。それは、すでに他人の妻になつてゐる人に秘密で會ふといふことが氣が咎めるばかりではない。……此處で十字架を返して新たにかよ子と別れの言葉を取かはしたなら、それを眞實の最後として、生身のかよ子とゝもに、夢の中のかよ子とも別れなければならないと思はれてゐた。長い間空想の裡に覆寃んでゐた女との緣も全く切れてしまふのが心淋かつた。

風の通はない座敷は暑くるしかつた。

「何からお話したらよろしいやら」

階下の仕末をしに行つたかよ子は、再び上つて來るや否や、俄かに打解けた顏して云つて、「先つきお目に掛つた時には、あなたも大變お變んなすつたと思ひましたよ。私も痩せてゐるでせう。いろ〳〵いけないことがあつて、どうかしなきやならない場合に今なつてゐますのよ」

「だけど、あなたは好きなことして暮らしてゐらつしやると云ふぢやありませんか。六本木のお家はお變りはないんでせうね」

「母や妹は元の家で氣樂さうに暮らしてゐますわ。詰らない目に會つたのは私ばかりなの。どうせ自分を殺して瀨川の家へ行つたのですから、今になつて誰れを怨んだつてはじまらないんですけど、この頃は昔が戀しくつてなりません。あなたと御懇意にしてゐた時分よりももつと昔の、父が生きてゐた時分が戀しくつてなりませんの。六本木であなたや大川さんなんかに交際して頂いてた時分の私はもう無邪氣ぢやなかつたんですのよ。假面を被つてたのですわね。子供の時分に、父が崇拜してゐた露西亞人のロシノフさんから遺物に貰つたマリア樣を拜んでゐたのも、神樣が眞實に見てゐらしつたら、隨分可笑くお思ひになつたでせう。勝手なことばかり願つてゐたんですもの。あなたが御存じのあの繪像も、昨年の年末に私の手文庫にあつたいろ〳〵な下らない記念物と一緒に屑屋へ賣つちまひました。惜くも何ともなしにですよ。あなたは驚きなさるかも知れませんが、昨今の私はそんな氣持になつてゐるんですから、そのつもりで、今日は私の話

を聞いて下さいましな。魂だの神樣だのと云つてゐた六本木時代のかよ子とはお思ひにならないで、あなたの方からも御遠慮のないお話を聞かせて下さいましな」

さう云つてゐるうちに、かよ子は次第に元氣づいて、先つきよりも目や口が生々して來た。相川は女の言葉を意外に感じながら、

「あの神聖な繪像までお賣りになつたのですか。僕のやうな者でもそれほどに思切つたことは出來ませんよ」

「繪像を反古同樣に人手に渡した時に、あの十字架を思出したのですが、先日のお手紙によるとあなたは今まで大切に保存して下すつたんですつてね。私の詰らない記念物にそれほど重きを置いてゐて下さるのかと思ふと、私何と云つて感謝していゝか分りませんわ。それに差上げる物に事を缺いで、何故あんな物をお分れのしるしに差上げたのかと、申譯のないやうな氣がいたしますの」

かよ子の方から先きに、しかも事もなげに十字架の話を持出したので、相川はドギマギした。大事さうに首に掛けてゐるのが却つて極りが惡くつて顏を紅らめた。

「あれは不意にお返しする氣になつたんですが、あなたに取つてもどうでもいゝものなら、やはり私が持つてゐませう」と、輕く云つて、「あなたは不斷どんな事をして日を送つてゐるんです？この別莊には一人でゐらつしやるつもりですか」と話を轉じた。

「此方で泊つてゐたら、あなたにお目に掛かる機會があるだらうと思つて、身體の保養を口實にして出て來ましたの。……私あなたにお願ひがありますの」

「何です？」相川は何でもいゝから、かよ子と掛合ひのつくことを望んでゐた。先つき飲んだサイダは汗になつてべたべたした肌が氣持惡くて、相手の願ひの言葉は、もつと冷い所で寬いで聞きたかつた。かよ子はダイヤか何かの指環が一つ光つてゐる白い纖い手で團扇を輕く動かしながら、暑さを感じない人間のやうに、額にも首のまはりにも汗一滴浮べてゐなかつた。

「その前にあの緣喜の惡い物、あなたもおいやになつたんでせうから、返して頂きますわ」と、かよ子に云はれると、相川は有難さうに首に掛けてゐるのを彼女の目で見徹されてゐるやうな氣がして、今は持つてゐないと詐ることが出來なかつた。白瀧に見つけられた時よりももつと烈しい羞恥を覺えながら、不承々々に十字架を首から外して机の上に置いた。

「かうして持つてゐると、僕だつて熱心な舊教の信者らしいですね」と照れ隠しに云つて笑つた。

「どうも有難う。私に返して下すつたのだから、これからどうしようと私の勝手なんですわね」と云つて、かよ子は汗で濡れた十字架を指の先で抓んで見入つた。それが、久振りで懐しい者を見たといふ風ではなかつた。

「何故こんな者をあなたに差上げたんでせう。私馬鹿なのね」と、かよ子は忌々しさうに云つて、煙草盆の隅へ落して、

「今夜でも海へ棄てゝしまひますわ」

「その十字架にはどういふいやな記憶がついてゐるんです？」相川はさつきから目先にちらついてゐた村岡の顔を毒々しく思浮べた。

「あの陰劍な奴がこの十字架にも、私の身體にも蛇のやうに纏はりついてゐるんですよ」かよ子は嗚嗟に嶮しい目をして云つた。「無論この十字架はあの男が持つてた者ぢやありません。ロシノフさんから頂いて、繪像と同じやうに大切にしてゐたものなんですけど、……あの男は昔二十前の時分にさへ、私の父に取入らうと思つて、柄にない舊教の信者らしい風をしてゐたくらゐで、利益のためになら、どんなことでも爲かねない男なんです。あなたが六本木へ遊びにゐらしつてた時分には、ある事情から私の家へは寄付かなかつたのですが、何時の間にか人手を借りて、私を瀬川の家へ賣込むやうに企んだのですわ。……私もあなたが思つてらしつたやうな純潔な女ぢやなかつたのですから、家の爲めではあるし、半分は自暴な氣持から、人の勸めに乘つたのですけれど、村岡は何時までも私に祟つてゐますの。瀬川家のためにも牛蝨見たいな男ですわ。學者然とした假面を被つてゐるから、世間から本心を見破られないでゐるんですけど、あの男の蛇のやうな根性のために私はどのくらゐ迷惑してゐるか知れませんの」

「村岡君はそんな人ですかね」相川はかよ子の言葉をそのまゝには信じかねたが、先日村岡から受けたいやな印象を思ふと、彼れのために一言の辯護をもする氣にはなれなかつた。そして「村岡君はあなたを家庭の破壞者だつて云つてゐましたよ」と云ふと、かよ子は意外にも反對はしないで、微笑しながら、

「破壞者だつていゝぢやありませんか。第一村岡自身が私に瀬川の家を破壞させようと思つてゐたのかも知れませんわ。あなたはまだ氣付いてゐらつしやらないか知れないけど、村岡が次第に有

福になつて柄にない贅澤をするやうになつたのは何のためです？　あの男の學問や地道な働らきで、そんなにお金が出來る道理はないぢやありませんか。私の家の主人は、まだ老耄する年齢ではないんでせうけれど、長年の不養生のためか、家庭に不幸が續いたゝめか、見掛けは丈夫さうでも頭腦はこの頃駄目になつてゐるものですから、村岡なんぞに勝手なことをされてゐながら、些とも氣がつかないでゐるんです。……それは私も瀬川家の破壞者かも知れませんわ。だつて、最初から財產を目當てに結婚したのですもの。多少の贅澤をしようと我儘をしようと傍から彼此云はれる筋はないと思はれますわ。もつと贅澤をして、金で買はれることなら何でもして見たいと思つてゐたのですけど、瀬川の身代は高が知れてゐるですからね。以前はもつと豊だつたのださうですけど、この頃は金持扱ひされるのが可笑なくらゐなんです」

「しかし、あなたも最初のお考へは兎に角、結婚なすつた上は、自然の人情として、瀬川家が榮えることを望んでゐられるでせう」

相川はお座成りを云つた。たとへ不釣合に歳がちがつてゐても、夫として長い間一緒に住まつてゐれば、自然に情愛が出來て來るだらうと想像しながら。

「それは無論さうでせうけど、私はしみ〴〵自分の家の將來を考へたことありませんわ。そんなことよりも、私には差迫つた大事な問題があるんですから」かよ子は目を伏せて萎れてゐた。

「金があつても貧しくつても、人間はそれ相應の問題を持つてゐるんですね」相川は暫く忘れてゐた自分の身の上――まつ子などによつて心を亂されてゐること――を思出して歎息するやうに云つた。

「あなたにお願ひしたいと思つたのはそのことなんです。私、村岡の恐ろしい壓迫から完全にのがれたいと思つてゐますの。……なぜそんなにあの男を怖がつてゐるか、その譯は今日は訊いて下さいますな。そのうち綾くりお話しますわ。今日はたゞ、村岡の恐ろしい壓迫からのがれるために力を貸して下さることを承諾して頂きたいと思つてゐますの。……あなたのお力添へで私のこの望みが遂げられさへすれば、私は私の力で出來ることなら、どんなことでもしてあなたにお禮をいたしますわ。お禮をするなんて、お氣に觸るかも知れませんけれど」

「僕が役に立つんですかねえ。村岡に對してどういふことをするんです？」

相川は怪訝な顔した。しかし、かよ子の今までの話のはし〴〵から、彼女と村岡との間柄が、

普通の知合ひといふだけに止まつてゐないことが略々察せられたので、村岡に對してます〳〵激しい敵意を感じてゐた。六本木時代にも、かよ子はすでに村岡のために純潔を破られてゐたかと思ふと、自分のお日出度さが腹立たしくなつた。

「あの男にはどんな酷いことをしてやつても、私後悔する心配はありませんわ。……私は村岡がこの世に生きてゐないやうにと、どれほど熱心にマリア様にお祈りしたか知れませんわ。そしてマリア様も神様も信じられなくなつた今は、その事をあなたに願ひする氣になつたのです。あなたのお手紙を拜見して、あなたこそ手頼りになると、ふいとさう思ひましたの、あんな詰らない十字架をさへ私の記念として持つてゐて下さるんだから、私が生命を懸けてお願ひしたら聞入れて下さるに違ひないと、ふいとさう思ひましたの」

かよ子はさう云つて相手の返事を待つてゐたが、ふと思出したやうに、「あなたはこの頃はお一人でゐらつしやるんですつてね。奥様はどうなすつたんです」と訊ねた。

相川ははじめて自分の事を訊かれたのでドギマギしながら、「僕の家庭のことは簡單にはお話が出來ませんよ。二三日以前以來僕の頭は滅茶々々になつてるんです。……何か大きな奇蹟見たいなことがあつて世の中が變つちまへばいゝと思つたりしてるんですよ」

「私も以前よくさう思つてたことがありましたよ」と、かよ子は心から同感したやうに云つて、「だけど、當てにならない神様の奇蹟なんかをボンヤリして待つてるよりは、お互ひに進んで奇蹟をつくつて行く外ないと思はれますわ。……お互ひに決心次第でどうにでも世の中を變へて行けないことないと思はれますわ」

二人は暫く默つてゐた。相川は何の氣なしに部屋の中を見廻したが、すると、それに誘はれたやうに、かよ子も部屋の中を見廻して、

「今日一日は私一人の自由なのですけど、女中にはあなたのお顔を覺えさせたくないと思つてゐるんです。主人には知れたつて關ひませんけれど……」

それにしても、障子を締切る必要はあるまいと思つて、相川は暑さに惱んでゐたが、かよ子はそんなことには頓着しないで、自分の望みにのみ心を凝らして、相手を説伏せようとしてゐた。

近日東京で再び會はうと堅い約束を取りかはして其家を出た相川は、全身の汗を、海から吹いて來る涼しい風で乾かせながら、不思議な夢を思ひ出してゐるやうに、かよ子との意外な會見を思ひ出してゐた。……思ひ出してゐる今も夢の中のやうであつた。昔は假面を被つてゐたとかよ子は云つてゐたが、久振りで會つたかよ子は、相川が不斷心に宿してゐたかよ子とは全く別な人のやうであつた。心持が違つてゐるばかりでなく、顏付さへ違つてゐたが、しかしそのために彼女に對する親しみが薄らいだのではなかつた。今までにない濁つた執着が新たに彼れの心に强い根を張つたのであつた。

村岡がそんな惡人であらうとは信ぜられなかつたが、偶然にもせよ、十字架のことについて、自分が村岡から侮辱を受けてゐることを思ふと、かよ子の調子外れの言葉もみな尤もなやうに聞取れた。

「私は時の機勢で瀨川の妻となつたのですけれど、女としての眞心を捧げるのはあなた一人の外にはないやうに思はれますの。女として天から戀を許されてゐる男は、世の中に一人しかないのぢやありますまいか。それに、私は自分の境遇なんぞに支配されて、本當の戀を蹈付けて傍道へ外れた世を渡つて來たから、何時まで立つても本當の幸福は得られなかつたのですわ。あなたに奥樣が定つてゐようとも、村岡に睨まれてゐようとも、そんなことを斟酌しないで、あの時一切を棄ててあなたに取縋つてゐればよかつたのですのに。私が假面を被つて遠慮してゐたことは、あなたのためにもいゝ結果は持つて來なかつたのぢやありませんか」と云つたかよ子の熱を帶びた言葉は、燒付くやうに彼れの胸に刻まれた。

「私は逃隱れして生先の短い瀨川に苦痛を與へようとは思つてやしません。無理な我慢もして一生を見守つてやるつもりなのですけれど、私の心ははじめから瀨川に賣つてやしないんですからね。あなたが何と思つてゐらつしやらうとも、私は一生に一人の戀人としてあなたのことを、晝も夜も胸に持つて生きて行くつもりです」

村岡さへ無いならば、自分の心だけでも自由になつて、安んじて瀨川の一家を自分の好きなやうに支配して見せると、ふと得意らしく云ふかよ子の顏に、放縱な心の現はれてゐるのを見ながら、相川は却つてそれに興味を起してゐた。

まつ子からも白瀧からも、すべての人々から受けてゐる侮辱で押詰められてゐる苦しい息の吐

き口を、彼ればかよ子に會つてゐる間に見つけたやうな氣がした。モダ〳〵してゐる鬱憤晴らしに、彼女が差圖さへすれば、どんなことでもしかねまじき氣持がした。暑苦しい密室での彼女の囁きは、しみ出る汗とともに、彼れの肌を刺戟して、異樣な快感を起させた。

あの無邪氣だつた昔のかよ子の尊い處女の貞操を破つたゞけで飽足らないで、今も彼女に附纏つてゐる村岡の所行を思ふうと、彼女の身體はます〳〵媚態を加へた。

相川は大磯から小田原の家へ歸つても、かよ子の掛けた謎を果てしなく考へてゐたが、そのためにまつ子の殘した影は稍薄らいだ。

二三日は過ぎた。その間に雇ひ老婆一人の取留めのないお喋舌りを聞くだけであつたが、この老婆の言葉だけが、この頃彼れの耳に觸れたいろ〳〵な知人の言葉のうちで、最も勢ひのいゝ音調を含んでゐた。

眞夜中にふと目を醒ました彼れは、まつ子と入江とが此處へ訪ねて來たことも、大磯でかよ子に會つたことも、自分がわざ〳〵東京へ出掛けて村岡に會つたことさへも、みんな自分の過去の苦しさや今の淋しさが呼出した迷ひの夢ではないかと、冴えた頭で氣のつくこともあつたが、たとへそれが夢だつたにしろ、その夢からのがれ出ることは出來なかつた。

白瀧はある職業に有りついたことを知らせて來たが、その手紙の文句にも筆跡にも何かの疚しいところのある樣子は見えなかつた。「先生も早く其方をお引上げになつて東京にお住ひになつてはいかゞです。その御決心がおつきになつたら、相當な貸家を私が搜しませう」とも書添へてあつた。

「ぢや、さうしようか。居心地のいゝ空家を搜しといて呉れたまへ」と、相川はふと輕い氣持で白瀧へ宛てゝ返書を書かうとしかけたが、その瞬間に、白瀧の顏が險惡な相をして目の前に迫つて來た。すると、その懇ろな手紙の文言も、相手を愚弄しようとする底意地の惡いものゝやうに見られだした。

自分の蒐集した物や他人から借りて來た物や、さま〴〵な形をした古書新書を机の側へ積重ねて、かねて計劃してゐる歴史的の述作に着手しかけても、今まで頭の中で組織立てゝゐた構圖がぐらついて、自分だけは確信して摑んでゐたつもりの昔の事實もアヤフヤな疑はしき物となりだして、筆を下すにも下されなかつた。

蝕ばんだ古紙の上にノラリクラリと浮んでゐる壁の跟を見詰めてゐても、「……」の記事の眞贋を彼れの頭は批判しかねた。大といふ字を大と讀みそれに人といふ意味を持たせるのも、見詰めてゐると變に思はれる。小といふ字を小と讀むのも變に思はれる。こんな文字で人間同士お互ひの心の通じ合ふのが不思議に思はれたりした。

「まつ子は果してあゝいふことを云つたのだらうか」「かよ子は果してあゝいふことを云つたのだらうか」

相川は自分が受けた侮辱の言葉をも熱愛の言葉をも疑ひだした。疑ひながら、用箪笥を開けて見ると、そこにはまつ子が忘れて行つた白い粉藥が入つてゐた。毒藥にしろ良藥にしろ、その粉藥が、結晶した彼女の魂のやうであつた。そして、相川自身の胸には、長い間懷かしい柔しい思ひを寄せてゐた金色した十字架は、今は疑ひもなく懸つてゐなかつた。……「村岡の壓迫をのがれるために力を貸せ」と、かよ子が云つてゐたのは、村岡の生命を斷てといふことなのか。さうした後では、二人が長い間胸にのみ潜めてゐた戀を、安んじて秘密に樂まれると彼女が暗示したのであらうか。……相川は神符の十字架を失つて粉藥を得たことだけを疑ひもない事實として詰めてゐた。

再會の場所を定めてお知らせすると、堅く約束してゐたかよ子からは、待つてゐても何の音信もないのに倦んじて、ある日彼れは東京へ向つて出掛けた。電車や汽車に乘つて、群集の中に入つてゐると、暑苦しいながらも、自分の身體がその居るべき所を得てゐるやうに、案外に心が安まつた。自分も左右の人々と同じやうで、自分だけの精神が特別に壞れてゐるやうには思はれなかつた。彼れは珍らしく左右の人々に向つて、いろ〳〵な世間話を仕掛けた。時候のこと、湘南地方の避暑客のこと、物價のこと、さういふ平凡な話を取りかはしてゐると、話は順調に運んで自分が左右の人々に怪まれるやうな頭を持つた人間とは思はれなかつた。

騷々しい汽車の響きも、停車場へ下りてからの目眩しい雜沓も、彼れの頭にさしたる刺戟を與へなかつた。彼れは何の危險をも感じないで、自動車を避け電車を避けて、都會の街上を歩んだ。そして、自働電話を掛けてかよ子を呼出した。オヅ〳〵話掛けると、

「直ぐに此方へ入つしやいましな」と、案外にも快活な返事があつた。

相川は思慮を振拂つて其方へ急いで行つた。が、大磯の別莊で耳目に觸れたことが、夢か現か